



岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第167集

# 白石道遺跡

2024

岐阜県文化財保護センター

しら いし みち  
白 石 道 遺 跡

2024

岐阜県文化財保護センター



## 序

岐阜県の南西部に位置する養老町は、西には養老山地が連なり、東には揖斐川が流れ、その間の扇状地や平野部に広がる町です。岐阜県西濃地域は、古代には国府や不破関、国分寺などが設置された重要な地域です。この西濃地域と伊勢をつなぐ伊勢東街道は養老山麓を通り、古くから重要な街道として利用され、元正天皇や聖武天皇の行幸にも使用されたと考えられています。

このたび、岐阜県大垣土木事務所による道路建設事業に伴い、養老町にある白石道遺跡の発掘調査を実施しました。白石道遺跡は、これまで古墳時代と中世の遺跡と考えられていましたが、今回の発掘調査では、奈良時代頃の竪穴建物6棟のほか、溝状構造や土坑を確認し、奈良時代を中心とする遺跡であることがわかりました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、養老町教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

令和6年3月

岐阜県文化財保護センター  
所長 岡田 知也

## 例　　言

- 1 本書は、岐阜県養老郡養老町に所在する白石道遺跡（岐阜県遺跡番号21341-09912）の発掘調査報告書である。
  - 2 本調査は、令和4年度は公共社会資本整備総合交付金事業、令和5年度は県単道路新設改良（一般分）事業に伴うもので、岐阜県大垣土木事務所から岐阜県文化財保護センターが依頼を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
  - 3 宇野隆夫帝塚山大学客員教授の指導のもとに、発掘作業は令和4年度、整理等作業は令和5年度に実施した。
  - 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第1章第2節に一括して掲載した。
  - 5 本書の執筆は、第1章と第2章、第3章第1節から第3節を主に西松が行い、他は西松の所見を参考に春日井が行った。
  - 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影、出土遺物の洗浄・注記などの支援業務は令和4年度に株式会社アコードに、整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真団版作成などの支援業務は、令和5年度に橋本技術株式会社岐阜営業所に委託して行った。
  - 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
  - 8 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。
- 永井宏幸、中島和哉、廣瀬正嗣、安田正道、渡邊博人、養老町教育委員会
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を使用する。
  - 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
  - 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

## 目 次

序

例言

目次

### 第1章 調査の経緯

　　第1節 調査に至る経緯.....1

　　第2節 調査の方法と経過.....3

### 第2章 遺跡の環境

　　第1節 地理的環境.....6

　　第2節 歴史的環境.....7

### 第3章 調査の成果

　　第1節 基本層序.....10

　　第2節 遺構の概要.....11

　　第3節 遺物の概要.....13

　　第4節 遺構と遺物.....15

　　遺構全体図分割図.....45

　　遺構一覧表.....50

　　遺物観察表.....52

### 第4章 総括

参考・引用文献.....70

写真図版

報告書抄録

## 表目次

表1 試掘・確認調査結果.....	2	表11 出出土器観察表（3）.....	54
表2 周辺遺跡一覧表.....	8	表12 出出土器観察表（4）.....	55
表3 検出遺構数量表.....	11	表13 出出土器観察表（5）.....	56
表4 出土遺物数量表.....	13	表14 出出土器観察表（6）.....	57
表5 壺穴建物一覧.....	50	表15 出出土器観察表（7）.....	58
表6 壺穴建物柱穴等一覧.....	50	表16 砥石一覧.....	58
表7 溝状遺構一覧.....	51	表17 美濃地方西半部の壺穴建物検出遺跡.....	62
表8 土坑一覧.....	51	表18 古代の器種組成.....	65
表9 出出土器観察表（1）.....	52	表19 他遺跡との用途別組成比較.....	66
表10 出出土器観察表（2）.....	53	表20 各遺跡での特殊遺物出土状況.....	67

## 挿図目次

図 1 遺跡位置図	1	図24 SK03・SK04遺構図	31
図 2 試掘調査坑と発掘区の位置	2	図25 SK05・SK06遺構図	32
図 3 発掘区地区割図	3	図26 SK07～SK10遺構図	33
図 4 遺跡周辺の地形分類略図	6	図27 SK11～SK13遺構図、SK11出土遺物	34
図 5 周辺遺跡位置図	9	図28 SK14～SK18遺構図	36
図 6 基本層序及び発掘区東部の削平範囲	10	図29 包含層等出土遺物（1）	37
図 7 遺構配置図	11	図30 包含層等出土遺物（2）	38
図 8 遺構土層堆積状況及び断面形模式図	12	図31 包含層等出土遺物（3）	39
図 9 I層及びII層の遺物出土分布図	13	図32 包含層等出土遺物（4）	40
図10 SI01遺構図（1）	16	図33 包含層等出土遺物（5）	41
図11 SI01遺構図（2）、出土遺物	17	図34 包含層等出土遺物（6）	42
図12 SI02遺構図（1）	18	図35 包含層等出土遺物（7）	43
図13 SI02遺構図（2）、出土遺物（1）	19	図36 遺構全体図分割図（1）	45
図14 SI02出土遺物（2）	20	図37 遺構全体図分割図（2）	46
図15 SI02出土遺物（3）	21	図38 遺構全体図分割図（3）	47
図16 SI03遺構図	22	図39 遺構全体図分割図（4）	48
図17 SI03出土遺物	23	図40 遺構全体図分割図（5）	49
図18 SI04遺構図	25	図41 壁穴建物長軸方位	60
図19 SI04出土遺物	26	図42 壁穴建物検出遺跡位置図	62
図20 SI05遺構図（1）	27	図43 発掘区全体図（白石道遺跡・三井遺跡 ・重竹遺跡）	63
図21 SI05遺構図（2）、出土遺物	28	図44 発掘区全体図（東山浦遺跡・針田遺跡）	64
図22 SI06遺構図	29	図45 須恵器合子及び類似資料	69
図23 SD01・SK01・SK02遺構図、SD01出土遺物	30		

## 挿入写真目次

写真 1 調査前近景	5	写真 3 遺構掘削作業風景	5
写真 2 遺物包含層掘削作業風景	5	写真 4 現地見学会風景	5

## 写真図版目次

図版 1 発掘区遠景・近景	図版 5 出土遺物（1）
図版 2 発掘区近景・SI01（1）	図版 6 出土遺物（2）
図版 3 SI01（2）・SI02	図版 7 出土遺物（3）
図版 4 SI03～SI06・溝状遺構・土坑	図版 8 出土遺物（4）

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

白石道遺跡は、養老郡養老町鶯巣に所在し、養老山地東麓に広がる扇状地性緩斜面の端部に位置する（図1）。

岐阜県が計画する公共社会資本整備総合交付金事業予定地内に、白石道遺跡が所在することから、岐阜県大垣土木事務所から岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課（以下、「県文化伝承課」という。）に試掘・確認調査の依頼があった。令和3年10月18日～20日に県文化伝承課が11ヶ所の試掘・確認調査を実施した（図2）。その結果、TP 8とした試掘調査坑において、堅穴建物の可能性がある方形の遺構が確認され、土師器や須恵器などが出土した（表1）。

この試掘・確認調査結果をもとに、令和3年12月22日に岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会が開催され、676.1m<sup>2</sup>について保護措置が必要であると結論づけられた。文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、大垣土木事務所長から岐阜県知事（以下、「県知事」という。）あてに埋蔵文化財発掘通知（令和4年1月6日付け大土第777号）が提出され、同条第4項の規定に基づき、県知事から大垣土木事務所長あてに発掘調査実施の勧告（令和4年1月31日付け文伝第114号の181）を通知した。大垣土木事務所長は、岐阜県文化財保護センター（以下、「センター」という。）所長に発掘調査の実施を依頼し、センターが発掘調査を実施した。センター所長は調査着手後、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく発掘調査の報告（令和4年5月23日付け文財セ第67号）を県知事に提出した。



図1 遺跡位置図

2 第1章 調査の経緯

表1 試掘・確認調査結果

試掘調査坑	検出遺構	出土遺物（点数）			
		土師器	須恵器	中近世陶器	石器
TP1	なし	0	0	0	0
TP2	なし	0	0	1	0
TP3	なし	0	0	0	0
TP4	なし	0	0	0	0
TP5	なし	1	1	0	0
TP6	なし	8	0	0	0
TP7	なし	0	0	2	0
TP8	方形遺構2基	61	11	0	1
TP9	なし	0	0	0	0
TP10	なし	0	0	0	0
TP11	土坑9	0	0	0	0

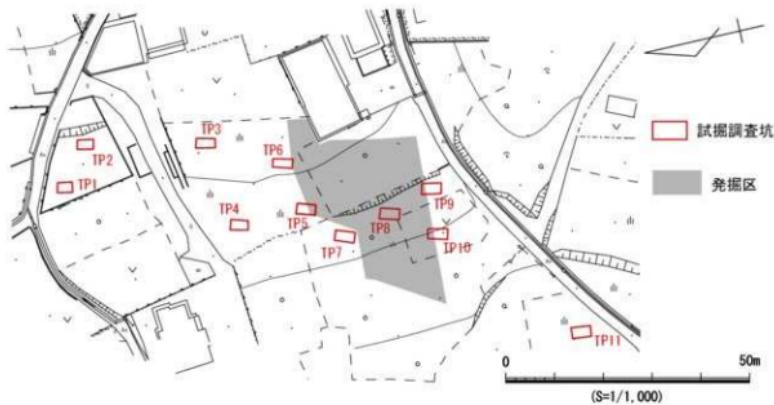


図2 試掘調査坑と発掘区の位置

## 第2節 調査の方法と経過

### 1 調査の方法

発掘作業は、令和4年度に676.1m<sup>2</sup>を実施した。発掘調査対象地に、世界測地系による平面直角座標系第VII系に基づく、X=-79030、Y=-55395を北西隅の基点とした一辺5mの格子目状のグリッドを設定した(図3)。グリッドは、北から南へAからH、西から東へ1から11とし、グリッドに囲まれた5m四方の区画を調査グリッドと呼び、その呼称は北西角の杭番号を用いた。そのため、発掘区の西端の調査グリッドはF1、東端の調査グリッドはB10、南東端の調査グリッドはG8となる。

表土及び整地層の掘削は、重機を用いて行った。遺物包含層掘削、遺構検出、遺構掘削は、ジョレン、草削り鎌等を用いて行ったが、固く締まった堆積ではツルハシや片手バチ鍬を使用した。今回の調査では基盤土と遺構埋土の区別が困難であり、必要に応じて断ち割りトレンチを設定し、断面観察により遺構の掘り込みを確認した。遺構埋土は、半截又は四分割して土層堆積状況などの必要な記録を作成した後に完掘した。検出した遺構は、原則として検出順に通番を付し、「S001」のように「S」と三桁の数字により表記した。この番号は、整理等作業時に遺構種別ごとの番号に付け替えた。

遺構等の調査記録は、写真撮影及びデジタル測量で行った。図面の縮尺は20分の1を基本として、実測対象に応じて適切な縮尺を選択した。写真撮影は、デジタル一眼レフカメラを使用し、工程管理などで補助的にコンパクトデジタルカメラも使用した。また、発掘区全体の景観写真撮影は、ラジオコントロールヘリコプターにより実施した。

遺物包含層掘削時に出土した遺物は、原則として調査グリッド単位で取り上げた。遺構掘削時に出土した遺物は、土層の実測前後で取り上げ方法を変えた。半截前は、検出面から5cm単位の人工層位で取り上げ、aから順に記号を付し、分層後は層位ごとに取り上げた。遺物には、取り上げ単位ごとに遺

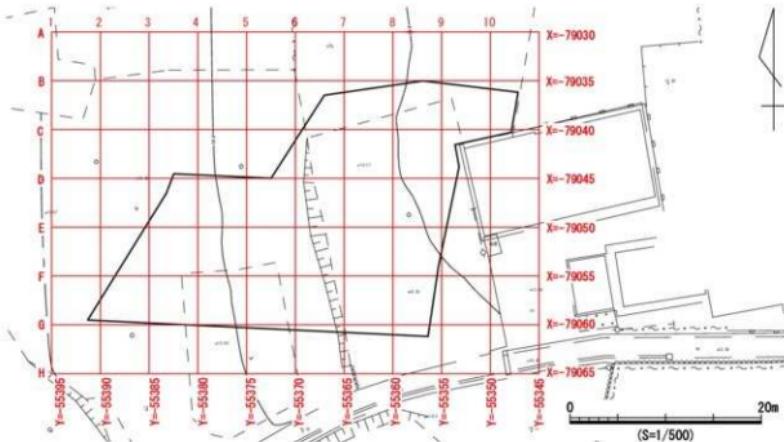


図3 発掘区地区割図

#### 4 第1章 調査の経緯

物ラベルを添付した。遺物ラベルには「西暦下二桁（22）と遺跡略号（SI）」「出土場所（遺構番号又は調査グリッド番号）」「出土層位」「取上日」「遺物取上番号」「備考」を記入し、この記録をもとに遺物台帳を作成した。

出土遺物の一次整理作業（洗浄及び注記作業、遺物台帳作成）は、当センターにおいて実施した。

#### 2 調査の経過

現地での調査経過は以下のとおりである。

- 第1週（5/12～5/13） 発掘区の表土掘削作業を開始。並行してグリッド杭を打設。
- 第2週（5/16～5/20） 表土掘削作業を終了。F2 グリッドから遺物包含層掘削作業を開始。SK01 等を検出して掘削作業を実施。
- 第3週（5/23～5/27） 基盤層の上面がはっきりしないため、D3 グリッドにサブレンチを設定した結果、東に向けて地形が下がる様子を確認。D3 グリッドの東側を再度掘り下げた。SK06 を検出し掘削作業を実施。
- 第4週（5/30～6/3） SI01などを検出し、掘削作業を開始。床面断ち割りトレンチ内のSI01 壁際溝埋土から土師器底部片（1）が出土。SK11 等を検出して掘削作業を実施。
- 第5週（6/6～6/10） SI01 床面の西壁際で浅い溝状の遺構を検出し、内部から粘土塊が出土。SK04 等を検出して掘削作業を実施。
- 第6週（6/13～6/17） 発掘区の東部（B6・C6 グリッド以東、D6～F6 グリッドの中央から東）で、サブレンチを設定して土層堆積状況を確認した結果、基盤層と整地土を誤認していたことが判明し、再度重機を使って掘削作業を実施。SI02などを検出して掘削作業を開始。
- 第7週（6/20～6/24） SK16などを検出して掘削作業を実施。
- 第8週（6/27～7/1） SI04などを検出して掘削作業を開始。
- 第9週（7/4～7/8） SI03などを検出して掘削作業を開始。
- 第10週（7/11～7/15） 養老町立上多度小学校3年生（25名）が来跡し、現地見学。
- 第11週（7/18～7/23） SI05やSI06などを検出し、掘削作業を開始。関連指導調査員廣瀬正嗣氏（養老町教育委員会）・中島和哉氏（養老町議会事務局）による現地調査指導。地元向け現地見学会を23日に開催（参加者34名）。
- 第12週（7/25～7/29） 景観写真撮影実施。SI05とSI06を完掘し、掘削作業完了。
- 第13週（8/1～8/5） 埋め戻し作業実施。現場撤収及び一次整理作業を開始。
- 第14週（8/8～8/12） 現場撤収完了。
- 第15週（8/15～8/19） 大垣土木事務所に現地引渡し。

出土遺物の洗浄や注記等の一次整理作業は、令和4年8月3日から令和4年9月6日に当センターにて実施した。令和4年12月7日に指導調査員宇野隆夫氏（帝塚山大学客員教授）から今回の調査成果に関する助言を受けた。

遺物実測や挿図作成等の整理等作業は、令和5年度に当センターにて実施した。整理等作業時には、令和5年5月25日に関連指導調査員渡邊博人氏から、出土遺物や美濃地域の古代集落遺跡に関して、

令和5年8月23日に指導調査員宇野隆夫氏から調査成果に関して指導を受けた。

### 3 調査体制

発掘作業及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長	岡田知也（令和4・5年度）
調査課長	三輪晃三（令和4・5年度）
調査担当係長、課長補佐	長谷川幸志（令和4年度）、大本直人（令和5年度）
調査担当職員	西松薫樹（令和4年度）、春日井恒（令和5年度）



写真1 調査前近景(北から)



写真2 遺物包含層削作業風景



写真3 遺構削作業風景



写真4 現地見学会風景

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

白石道遺跡が所在する養老町は、岐阜県南西部に位置し、東部は大垣市や安八郡輪之内町、西部は大垣市（旧上石津町）、南部は海津市や三重県いなべ市、北部は不破郡垂井町に接している。

養老町の地形は、西部の養老山地、養老山地山麓の砂礫台地及び扇状地、東部から南部の揖斐川やその支流の牧田川による氾濫平野や三角州、その中に点在する自然堤防や旧河道からなる<sup>1)</sup>。濃尾平野に接する養老山地の東側は、養老・伊勢湾断層により急傾斜面をなし、多くの扇状地を形成しているが、西側は緩い傾斜となっている。また、氾濫平野は古くから洪水災害に度々見舞われ、水害対策として輪中が築かれた。当遺跡の東側は、複数の小輪中を内包する複合輪中である多芸輪中の範囲である。

当遺跡は、養老山地山麓の滝谷から、氾濫平野に流れ出る谷川により運ばれ堆積した、砂礫によって形成された扇状地上に位置する。このため当遺跡の基盤層や表土層、遺物包含層には疊が多く含まれている。遺跡範囲は、東西約150m、南北約200mで、南西から北東へなだらかに傾斜する地形に広がる。発掘区は遺跡範囲の南部となり（図1）。調査前には住宅地及び畠地として利用されていた。

注

1) 养老町1978『養老町史 通史編』上巻

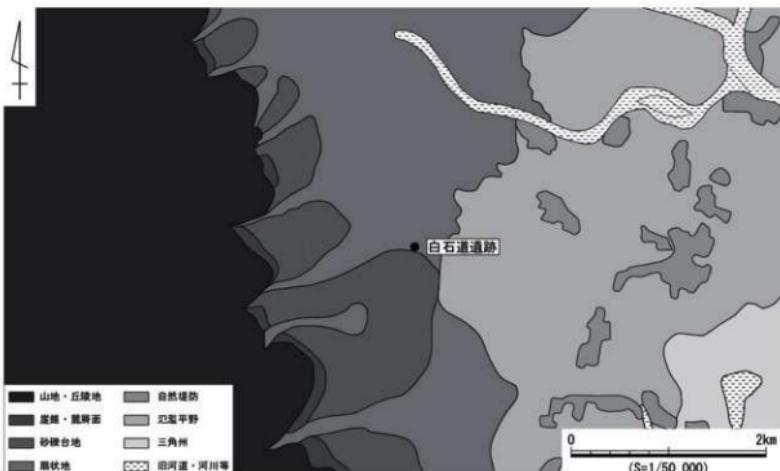


図4 遺跡周辺の地形分類略図 (1:50000、岐阜県1986『地形分類図彦根東・津島・桑名』を基に作成)

## 第2節 歴史的環境

当遺跡周辺には、山地及び丘陵地から氾濫平野に至るまで、多くの遺跡が確認されているが、古墳時代から中世の遺跡が多い。本節では各時期の主要な遺跡について、概要を時代順に記す<sup>1)</sup>。なお、文中的遺跡名に続く括弧内の番号は、表2及び図5<sup>2)</sup>と一致する。

**旧石器時代・縄文時代** 京ヶ脇遺跡(20)では、ナイフ形石器若しくはスクレイバーの可能性のある石器が採集されている他、旧石器時代や縄文時代の遺物は確認されていない。

**弥生時代・古墳時代** 当センターが令和2・3年度に実施した、明徳遺跡(10)の発掘調査で、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡が確認された。堅穴建物や掘立柱建物を検出し、多数の土器が出土した。

養老山地東麓には、喜勢古墳群(5)、柏尾1・2号古墳(7-1・2)、白石古墳(12)、千人塚古墳群(14)、京ヶ脇1～3号古墳(18-1～3)が確認されている。このうち千人塚1号古墳は、令和2年度に養老町教育委員会が発掘調査を実施し、葺石や周溝が確認され、円筒埴輪が出土した。京ヶ脇3号古墳は、標高200mほどの尾根上に位置し、全長約40mの前方後円墳の可能性があるとされる。他の古墳については発掘調査が実施されていないため詳細は不明であるが、各古墳の立地や墳形から多くは後期古墳と考えられる。

**古代** 古代になると遺跡数は増加する。発掘調査された遺跡は、白石道遺跡(1)だけであるが、この地域を含む多芸郡は、壬申の乱や天皇行幸の際の交通路となっており、政治的にも重要な地域となっていたと思われる。元正天皇は、靈龜3(717)年と養老2(718)年の2度、伊勢東街道を通り「多度山の美泉」に行幸した。靈龜3年の行幸の際、天皇自身が美泉の効能を実感したことを慶事として、養老に改元したとされ、行幸にちなんだ養老改元が養老町の町名の由来となった。なお、元正天皇行幸遺跡(13)は、元正天皇・聖武天皇を祭神とした多芸行宮神社があった場所として、昭和37(1962)年に県史跡に指定されている。

聖武天皇は、天平12(740)年の藤原広嗣の乱の最中に美濃に行幸した。この行幸に随從した大友東人が詠んだ歌(万葉集所収)の題詞に「多芸行宮」の記載があることから、不破頓宮(垂井町)滞在に先立ち、多芸郡に宿泊したと考えられる。戸開遺跡(6)は、伊勢街道に接して東側に位置し、遺跡範囲内には遺跡名称の「戸門」をはじめ、「中門」、「東門」、「南門」といった屋敷等に関連すると考えられる小字名が残る。また、遺跡の範囲内で8世紀中頃から9世紀初頭にかけての遺物が確認されていることから、戸開遺跡は多芸行宮跡に関連した遺跡である可能性が指摘されている。

養老山地から南宮山にかけて「多芸七坊(たぎしちぼう)」と呼ばれる寺院跡群が残る。多芸七坊は、伊勢街道沿いに集中して所在し、北から別所寺(垂井町)、竜泉寺、光堂寺、柏尾寺、養老寺、光明寺(以上養老町)、藤内寺(海津市)の7か寺で、創建はいずれも天平宝字年間(757～765)と伝わり、それぞれ法相宗であったが、平安時代に天台宗に改めて続いているといわれている。しかし、古代の遺物が確認されているのは柏尾庵寺跡(8)だけである。また、古代の遺物が採集された遺跡として、高田遺跡(3)、喜勢遺跡(4)、柏尾庵寺跡、明徳遺跡、鷺巣東遺跡(15)があるが、寺院跡も含め詳細は不明である。

**中世** 中世になると、遺跡数はさらに増加する。多芸七坊は、中世に存在していたことは確実で、各

表2 周辺遺跡等一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	備考
1	白石道遺跡	集落跡	弥生、古墳、古代、中世	R4一部発掘調査、本報告
2	押越遺跡	散布地	中世	
3	高田遺跡	散布地	古代、中世	
4	喜勢遺跡	散布地、社寺跡、生産遺跡	古代、中世	町史跡光堂寺廃寺跡
5	喜勢古墳群	古墳	古墳	円墳4基、方墳2基
6	戸閉遺跡	散布地	古代、中世	
7	柏尾1・2号古墳	古墳	古墳	円墳2基
8	柏尾廃寺跡	社寺跡	古代、中世	県史跡、土塁や平坦面残る
9	柏尾城跡	城館跡	中世	堀切や平坦面残る
10	明徳遺跡	集落跡	弥生、古墳、古代、中世、近世	R2・R3一部発掘調査
11	飯ノ木遺跡	散布地	中世	
12	白石古墳	古墳	古墳	
13	元正天皇行幸遺跡	—	古代	県史跡
14	千人塚古墳群	古墳	古墳	円墳5基
15	鷺巣東遺跡	散布地	古代、中世	
16	大跡遺跡	散布地	中世	
17	養老神社経塚跡	経塚跡	中世	出土品は県重要文化財
18	京ヶ脇1～3号古墳	古墳	古墳	3号古墳は前方後円墳
19	京ヶ脇遺跡	散布地	旧石器	

寺に付属する坊は、別所寺49坊、竜泉寺24坊、光堂寺24坊、柏尾寺24坊、養老寺12坊、光明寺36坊、藤内寺6坊を数え、中世に隆盛を極めたが、戦国期に兵火によりことごとく焼亡した。このうち、柏尾廃寺跡は県史跡に、光堂寺廃寺跡は町史跡に指定されている。光堂寺は中世には勢至寺という寺名であった可能性がある。なお、喜勢遺跡の範囲内で古瀬戸の瓶子及び須恵器の提瓶が採集され、古瀬戸瓶子は県重要文化財（工芸品）、須恵器提瓶は町重要文化財（考古資料）に指定されている。また、喜勢遺跡内には鉄座が存在し、現在も「鍛冶屋町」の小字名が残り、採集された鉄滓が町重要文化財（考古資料）に指定されている。

柏尾城跡（9）は、養老山地東側中腹の尾根上に立地する。柏尾廃寺跡の背後の尾根先端部に位置し、北側の緩斜面には畝状空堀群が残存する。明徳遺跡の範囲内に「庄司屋敷」という小字名が残り、小字内に「鷺之巣城跡」の看板が設置されているが、城館跡を示す遺構は確認できていない。

養老神社経塚跡（17）では、昭和37（1962）年、養老神社本殿改築に伴う工事中に常滑産の甕が発見された。この常滑産甕を経筒外容器とし、容器内に銅製経筒1、和鏡3、火打金1、青磁合子1が納められていた。時期は常滑産甕から12世紀末と考えられる。なお、出土品は県重要文化財（考古資料）に指定されている。

この他、中世の遺物が採集された遺跡として、白石道遺跡、押越遺跡（2）、高田遺跡、喜勢遺跡、戸開遺跡、明徳遺跡、飯ノ木遺跡（11）、鷺巣東遺跡、大跡遺跡（16）があるが、白石道遺跡や明徳遺跡以外では発掘調査は行われておらず、詳細は不明である。なお、白石道遺跡や明徳遺跡の発掘調査でも中世の遺構は確認されていない。

## 注

- 各遺跡の記述は、以下の文献を参考とした。

岐阜県教育委員会 2002『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第1集（西濃地区・本巣郡）』

養老町教育委員会 2007『養老町道路詳細分布調査報告書』（養老町埋蔵文化財調査報告書第4集）

養老町教育委員会 2007『養老町道路地図』（養老町埋蔵文化財調査報告書第5集）

養老町教育委員会 2020『千人塚1号古墳範囲確認調査現地説明会資料』

- 表2及び図5は、以下の文献を基に作成した。

養老町教育委員会 2007『養老町道路詳細分布調査報告書』（養老町埋蔵文化財調査報告書第4集）

養老町教育委員会 2007『養老町道路地図』（養老町埋蔵文化財調査報告書第5集）

岐阜県文化財保護センター～2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書（第2分冊）』

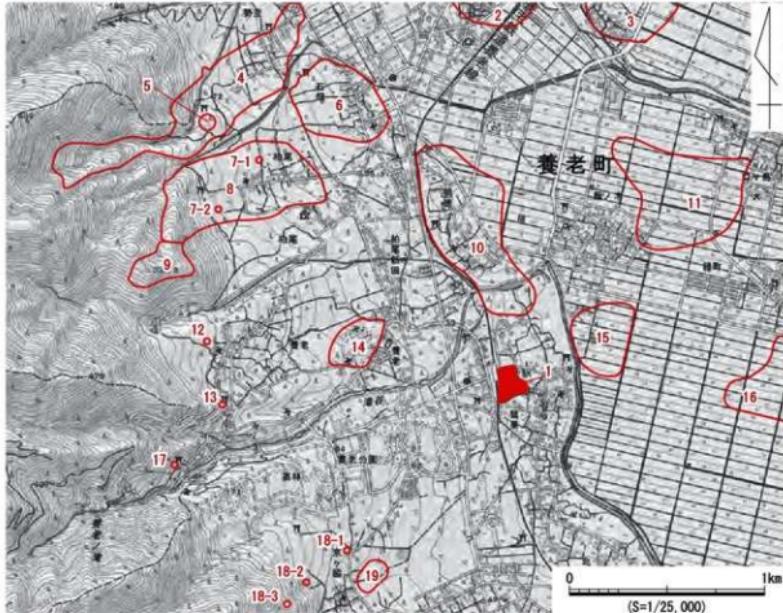


図5 周辺遺跡位置図（平成30年国土地理院発行電子地形図25,000「養老」を使用）

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

発掘区は、調査前が柿畠で、それ以前は養蚕業のための桑畠として利用されていた<sup>1)</sup>。標高は、南西端が15.75m、北東端が13.66mと約2mの比高差があり、緩やかに傾斜する地形である。ただし、発掘区内には基盤層まで達する土地改良が行われた場所があり（図6）、そこには遺物包含層は残存しておらず、遺構も削平された可能性が高い。また、発掘区南西端付近も遺物包含層が認められず、土地利用による削平が考えられる。なお、発掘区北東部では部分的に遺物包含層が残存していた。基本層序は、令和3年度の試掘・確認調査で確認された層序を基に、I層からIII層を設定し、遺構はIII層の上面で検出した。

注

1) 地元の方の御教示による。

#### I層：表土及び整地土

I a層 現況の耕作土である。土色は暗灰黄色土で、しまりや粘性はない。亜角礫を含む。

I b層 土地利用に伴う整地層である。土色はオリーブ褐色土で、ややしまりがあるが粘性はない。

亜角礫を多く含み、基盤層に類似する。

#### II層：遺物包含層

土色は黒褐色で、ややしまりがあるが粘性はない。亜角礫を含み、土師器や須恵器などの遺物を含む。土地改変の影響により一部削平を受ける。

#### III層：基盤層

土色はオリーブ褐色で、ややしまり、やや粘性がある。亜角礫を含む。

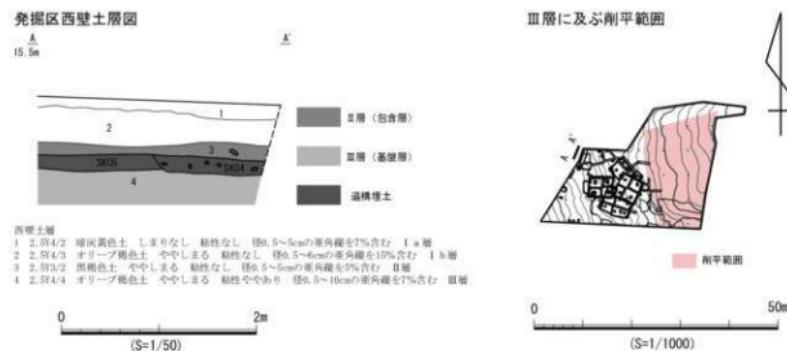


図6 基本層序及び発掘区東部の削平範囲

## 第2節 遺構の概要

### 1 概要

調査で検出した遺構のうち、時期が判明したものは古代のものだけであった（表3）。これらの遺構は、Ⅲ層（基盤層）の上面若しくは遺構埋土上面で検出しており、遺構内部から出土した遺物や、遺構の重複関係により時期決定を行った。しかし、遺構内部から遺物が出土せず、他の遺構との重複関係でも時期決定ができなかったものは、時期不明とした。検出した遺構の内訳は、竪穴建物6棟、溝状遺構1条、土坑18基である。本書では、すべての遺構について報告した。

### 2 遺構の分類

調査で検出した遺構は、形状や規模、構造などから竪穴建物、溝状遺構、土坑に分類した。各遺構の分類基準は次のとおりである。

#### 竪穴建物（略号SI）

地表を掘り下げる位置に床面を持つ建物跡で、柱穴や壁際溝など建物を構成する要素を確認できたもの。床面で検出した柱穴や土坑は略号を「SI●-P●」としたが、土坑は必ずしも竪穴建物に伴わないので含まれている可能性がある。床面で検出した壁面に沿う浅い溝は、壁際溝とし「SI●-壁際溝」と表記した。なお、検出した6棟の竪穴建物

表3 検出遺構数量表

	竪穴建物	溝状遺構	土坑	合計
古代	6	1	9	16
不明	0	0	9	9
合計	6	1	18	25

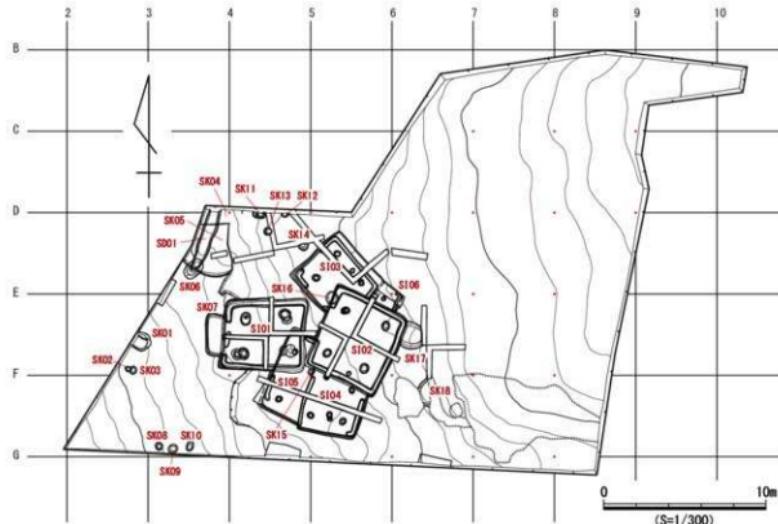


図7 遺構配置図

は、平面形が方形若しくは長方形に近い形状で、柱穴を四隅で確認した。また、いずれの堅穴建物でもカマドや炉といった施設が確認できなかった。

#### 溝状遺構（略号SD）

細長い平面形で、上端の短軸（幅）に対して、長軸（長さ）が5倍以上の長さとなる遺構を溝状遺構とし、1条検出した。

#### 土坑（略号SK）

地面に掘りくぼめられた穴のうち、上記以外の穴を土坑とし、18基検出した。

### 3 遺構一覧表

各遺構の基礎的情報は、それぞれ種別ごとに作成した遺構一覧表（表5～表8）に示した。遺構種別によって、一覧表の項目はやや異なるが、共有する基本項目については次のとおりである。また、遺構全体図分割図において、重複した古い遺構を掘削したことにより、新しい遺構の上端・下端がなくなった場合は、淡色で表示した。このため、淡色で示した方が、重複関係は新しい。

**平面形** 円形及び方形、不定形を基本とし、さらに円形と方形は、長軸長と短軸長の比が1.2以上となるものを橢円形と長方形に区分し、次のように数字で表示した。なお、他の遺構との重複や発掘区外に続くため形状が明確でないものは不明とした。

1—円形 2—橢円形 3—方形 4—長方形 5—不定形 6—不明

**遺構埋土** 分層した土層数と、堆積状況を次のように表示した（図8）。

A—単層 B—水平堆積 C—中央が凹む堆積 D—最上層が掘りこんだ状態となるもの

**断面形** 溝状遺構や土坑等の断面形を次のように表示した（図8）。

a—底面が丸く、壁面が開く b—底面が平坦で壁面が開く c—底面が2段となる

d—不明

**遺構の大きさ** 単位は「m」であるが、（ ）で示したものは、全形が確認できなかつたため、残存長を計測したものである。

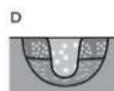
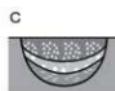
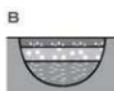
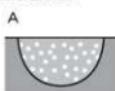
**遺構の重複関係** 「新>古」の関係を示した。

**出土遺物** 次のように記号化して示した。

縄文土器：J 弥生土器：A 土師器：H 須恵器：P 山茶碗：Y 陶磁器類：T

石器類：S

#### 土層堆積状況



#### 断面形

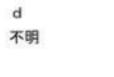


図8 遺構土層堆積状況及び断面形模式図

### 第3節 遺物の概要

#### 1 概要

調査で出土した遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、山茶碗、陶磁器類、石器類がある。その数量は、接合前の破片数が3,344点である（表4）。なお、試掘・確認調査のTP8は、発掘区内に含まれるため、TP8から出土した遺物もこの中に含めた。

表4 出土遺物数量表

	縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	山茶碗	陶磁器類	石器	合計
I層	1	2	143	75	0	1	0	222
割合(%)	0.5	0.9	64.4	33.8	0.0	0.5	0.0	100.1
II層	0	2	1,746	877	1	0	1	2,627
割合(%)	0	0.1	66.5	33.4	0.0	0.0	0.0	100.0
遺構	0	0	385	110	0	0	0	495
割合(%)	0	0.0	77.8	22.2	0.0	0.0	0.0	100.0
合計	1	4	2,274	1,062	1	1	1	3,344
割合(%)	0.0	0.1	68.0	31.8	0.0	0.0	0.0	99.9

\* I層は、表土層や整地層の他、擾乱坑出土や排土採集遺物を含む。

\* 割合は、小数点以下第2位を四捨五入して表示。

出土した遺物は、古代の土師器と須恵器が大半であり、縄文土器や弥生土器、山茶碗等は極少量出土しただけであった。出土層位の傾向として、土師器、須恵器ともII層出土点数が多く、次いで遺構からの出土となる。I層及びII層から出土した土師器と須恵器の平面的な出土傾向は、土師器と須恵器で同じ傾向を示す（図9）。どちらも遺構を検出した調査グリッドに集中し、基盤層まで削平が及ぶ調査グリッドでは、出土点数が非常に少なかった。

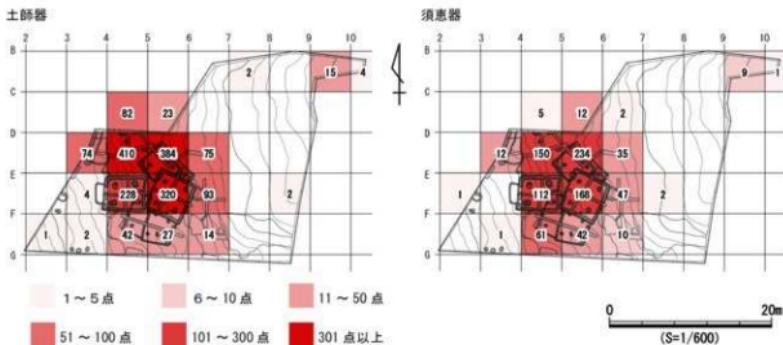


図9 I層及びII層の遺物出土分布図

## 2 土器類（表9～表15）

接合前の破片数で、3,343点出土した。土師器が最も多く、次に須恵器となるが、縄文土器や弥生土器、山茶碗、陶磁器類は非常に少ない。土師器や須恵器は8世紀のものが多く、既存の研究成果を参考にして、器種分類を行った<sup>1)</sup>。なお、図示した遺物は、遺構や包含層などから出土した時期判別がある程度可能なものや、特徴的なものを抽出した。

縄文土器は、I層から深鉢の破片が1点出土したが、小破片のため、図示しなかった。

弥生土器は、I層から壺の胴部片が2点、II層から甕の口縁部片が1点、胴部片が1点出土したが、小破片のため図示しなかった。

土師器は、I層やII層、遺構埋土から2,274点出土したが、大半が甕や壺と思われる破片である。他に少量の壺や製塩土器の脚部片が2点、口縁部片や胴部片が数点、刺突による文様を施した蓋の摘みと思われるものが1点確認できた。甕は、口縁部の形状が様々であるが、いわゆる伊勢型甕や濃尾型甕があり、その形状から8世紀頃のものが主体と思われる。

須恵器は、I層やII層、遺構埋土から1,062点出土したが、壺身や壺蓋が多く、盤や高壺、甕、壺、瓶類などがある。壺身には、高台を持つものと持たないものがあり、壺蓋は口縁部内面に返りを持たず、天井部に摘みを付けるものである。遺構内外から出土した須恵器は、その形状から8世紀頃のものが主体と思われる。

山茶碗は、II層から碗の底部片が1点出土した。12世紀頃のものと思われる。

陶磁器類は、I層から擂鉢の胴部片が1点出土したが、小破片のため図示しなかった。

## 3 石器類（表16）

II層から砥石が1点出土した。試掘・確認調査TP8から出土したものであるが、SI02上部のII層から出土したものである。

注

1) 土師器や須恵器については、以下の文献を参考にした他、須恵器の器種や時期、産地等について、渡辺博人氏の指導を得た。

内藤信雄・井川祥子「美濃における古代煮炊具の様相」、城ヶ谷和広「総論 東海地方の古代煮炊具の様相と諸問題」、永井宏幸「尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷」いずれも『鍋と甕そのデザイン』所収、各務原市教育委員会1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』、斎藤孝正1995「I 東海西部」『須恵器集成図録』第3巻東日本編I、渡辺博人2008「美濃須衛窯について」『日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集』日本考古学協会2008年度愛知大会実行委員会

## 第4節 遺構と遺物

今回の調査では、8世紀頃の遺構と遺物が他の時代と比較して最も多く、堅穴建物や溝状遺構、土坑を検出した。調査で出土した遺物の多くが8世紀頃のものであることから、遺物を伴わず、時期不明とした遺構の中にも、8世紀頃のものが含まれる可能性がある。

### 1 堅穴建物

発掘区西部で、8世紀頃の堅穴建物を6棟検出した。6棟の堅穴建物は、検出面での傾斜角度が3°程度の緩やかな斜面の直径約13mの範囲に、重複した状態で確認した。発掘区の東半部が削平されているが、他にも同様の緩やかな傾斜の場所があるにもかかわらず、この狭い範囲に集中することから、堅穴建物設置場所に何らかの制約があった可能性が考えられる。

#### SI01（図10・図11）

**検出状況** 発掘区西部の堅穴建物集中地点の西端において、II層除去後III層上面で検出したが、北部から東部はIII層と類似しており、検出は困難であった。検出時にSI01よりも古い遺構として、SI02やSI05、SK07がある。平面形は各辺とも直線的で方形に近い形状であるが、東西方向にやや長く、長軸長5.10m、短軸長4.47mである。長軸方位は、他の堅穴建物と異なり、N90°Wでほぼ正方位である。

**埋土** 6層に分層したが、堅穴建物廃絶後の埋土は単層（1層）で、整地土（6層）の上面が床面と思われる。2層～5層は壁際溝埋土であるが、各辺において土色や混入物が少し異なる。

**壁** III層を掘り込んでいるが、西壁で0.15m前後の深さがあるものの、東に向かって浅くなり、中央から東側では残存していない。西壁は比較的傾斜している。

**床面** 比較的平坦であるが、西から東に向かってわずかに低くなる。床面において、7基の小穴（P1～P7）を検出した。このうちP1～P4は、堅穴内の四隅にほぼ方形に配置されていることから、柱穴と判断した。平面形は円形若しくは楕円形で、長軸長0.59m～0.80m、深さ0.23m～0.34mである。P5～P7はいずれも柱穴と重複し、柱穴よりも新しいと判断した。そのため、SI01よりも新しい時期の土坑である可能性が考えられる。また、各辺の壁に沿って壁際溝を検出したが、西辺部のみ一旦途切れ、中央に長さ1mの短い壁際溝を検出した。この壁際溝は深さが0.08mで掘方埋土内におさまり、他辺の壁際溝はIII層まで達し、0.11m～0.15mの深さがある。また、西辺の壁際溝内からは粘土塊が出土したため、調査時はカマドの痕跡である可能性を検討したが、被熱痕跡や焼土粒、炭化物等火を用いたことを示すものが確認できなかつたため壁際溝とした。なお、この西辺の壁際溝に対応するように、SK07が重複しているが、関連性は不明である。カマドや炉跡と思われるものは確認できなかつた。

**遺物出土状況** SI01埋土からは、土師器片15点、須恵器片4点が散在した状態で出土した。このうち図示した須恵器坏蓋（3）は、包含層出土のものと接合した。6層（整地土）からは、土師器片3点、須恵器片1点が出土した。P2から須恵器有台坏片（2）が出土したが、他の柱穴から遺物は出土しなかつた。西辺を除く壁際溝から、土師器片10点、須恵器片1点が出土したが、南辺壁際溝から出土した土師器鍋底部片（1）はやや大きな破片で、埋められた可能性が考えられる。

**出土遺物** 1は底部が平底に近く、底径が18cmほどになることから、胴部が扁平な形状の土師器鍋と思われる。2～4は須恵器で、2は有台坏である。口縁部を欠くが、腰に稜があり直線的である。3

と4は蓋で、3は口縁端部が短く屈曲し、4は口縁端部が巻き込まれるように屈曲する。

**時期** 遺物は8世紀代のものを中心するが、1を除き埋土中から散在した状態で出土しており、確実にSI01に伴うとは言えない。しかし、1は平底に近い形態で8世紀後葉の可能性があり。遺構重複関係からSI02やSI05よりも新しいと判断していることから、8世紀後葉と思われる。

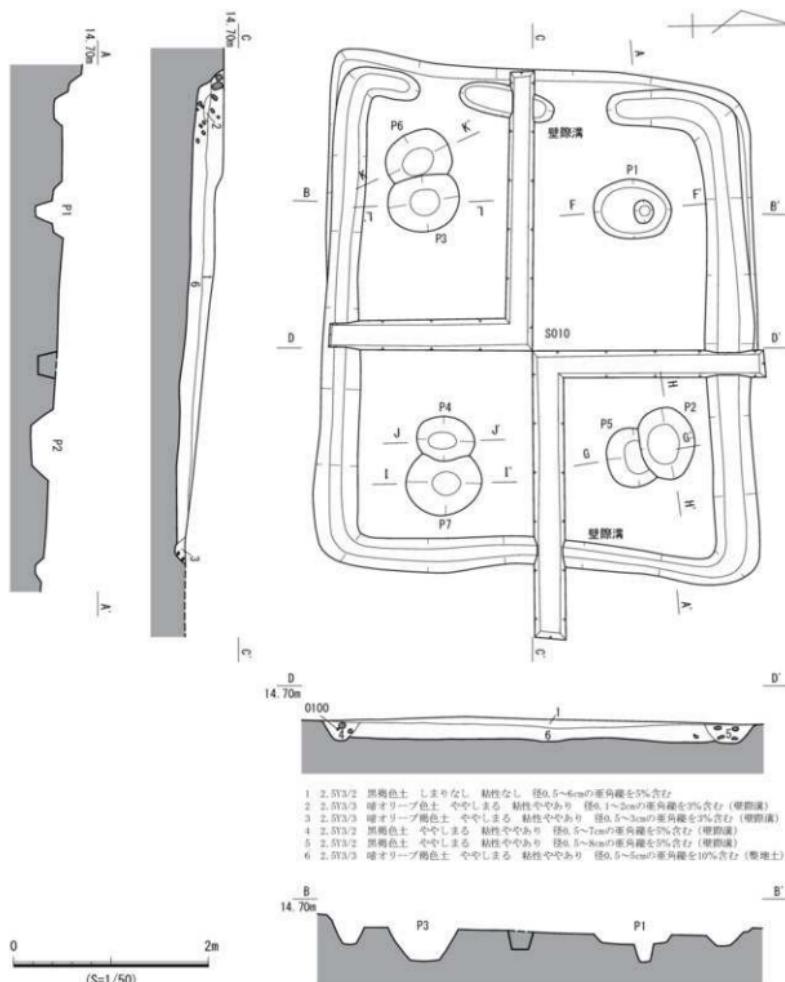
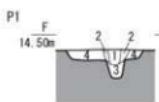


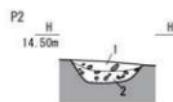
図10 SI01遺構図(1)

## SI02 (図12~図15)

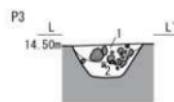
検出状況 発掘区西部の竪穴建物集中地点の東部において、II層除去後III層上面で検出した。試掘・確認調査のTP 8で確認した遺構であり、その際には2基の方方形遺構が重複すると考えられていたが、竪穴建物1棟となった。多くの遺構と重複しており、特に南東部は平面形が不明瞭であった。検出時



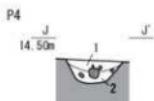
1. ST3/4 オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~5cmの亜角礫を5%含む
2. ST3/1 黒褐色土 ややしまる  
粘性なし 径0.5~1cmの亜角礫を5%含む
3. ST3/2 黑褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~1cmの亜角礫を5%含む
4. ST3/3 線オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~1cmの亜角礫を5%含む



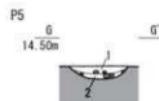
1. ST3/3 線オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~5cmの亜角礫を5%含む
2. ST4/3 オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~5cmの亜角礫を5%含む



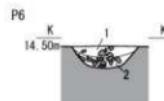
1. ST3/3 線オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~1cmの亜角礫を10%含む
2. ST4/3 オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~5cmの亜角礫を5%含む



1. ST3/3 線オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~5cmの亜角礫を5%含む
2. ST4/3 オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~10cmの亜角礫を5%含む

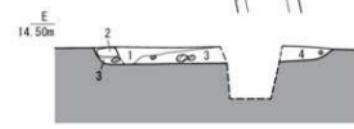
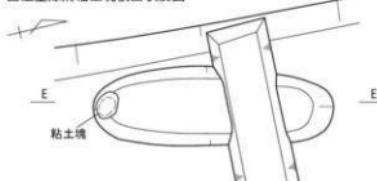


1. ST3/3 線オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~5cmの亜角礫を5%含む
2. ST4/3 オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~5cmの亜角礫を5%含む



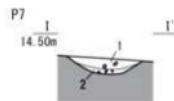
1. ST3/3 線オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~5cmの亜角礫を5%含む
2. ST4/3 オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~7cmの亜角礫を10%含む

## 西辺壁際溝粘土塊検出状況図



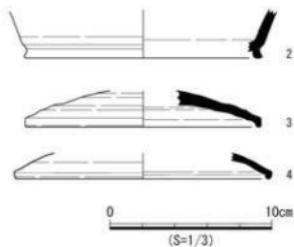
1. ST3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.5~1cmの亜角礫を7%含む
2. ST6/6 明黄色の粘土 ややしまる 径0.5~1cmの亜角礫を3%含む(土塊)
3. ST4/2 墓灰黄色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.5~5cmの亜角礫を5%含む
4. ST3/3 線オリーブ褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径0.1~2cmの亜角礫を3%含む

0 1m  
(S=1/20)



1. ST3/3 線オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~3cmの亜角礫を3%含む
2. ST4/3 オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 径0.5~4cmの亜角礫を5%含む

0 2m  
(S=1/50)



0 10cm  
(S=1/3)

図11 SI01遺構図(2)、出土遺物

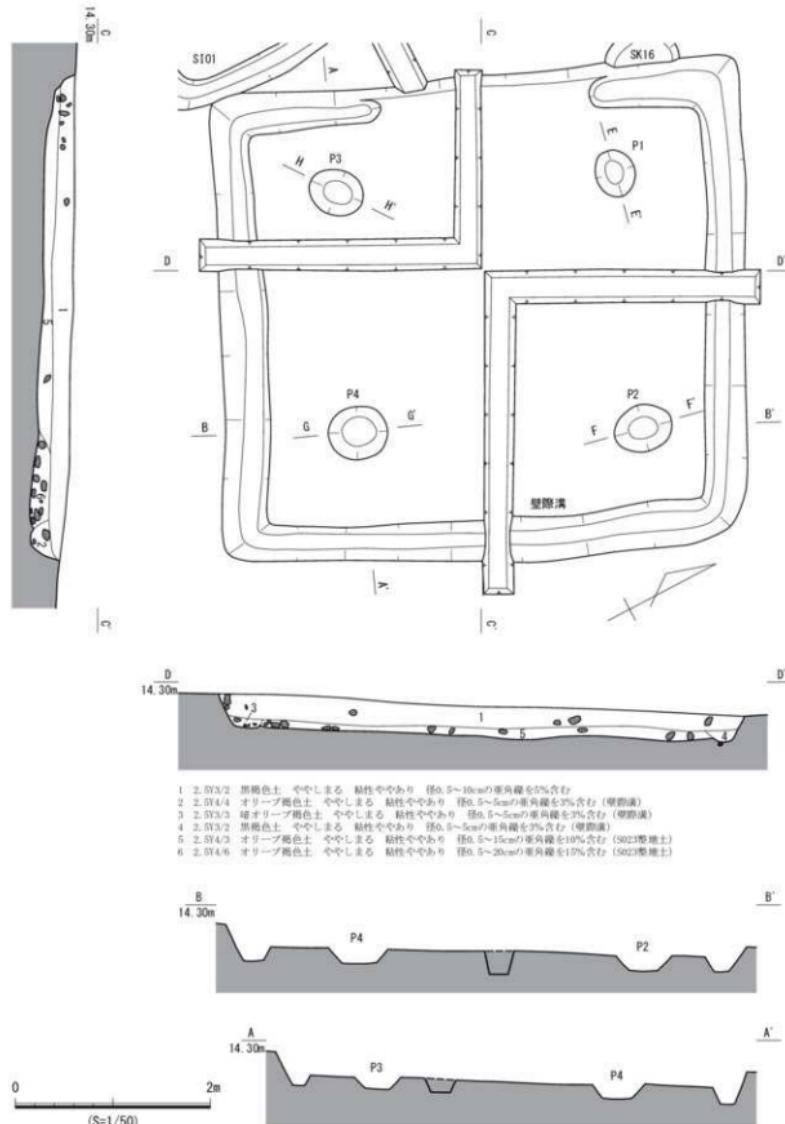


図12 S102遺構図（1）

にSI01やSK16がSI02よりも新しく、SI03やSI04、SI05、SI06、SK17が古い遺構と判断したが、SI01とは南西隅がわずかに重複するだけであった。平面形は、各辺とも直線的で方形に近い形状であるが、南北方向にやや長く、長軸長5.40m、短軸長5.00mである。長軸方位は、N23°Eとなり、SI04やSI05と方位が近い。

**埋土** 6層に分層したが、堅穴建物廃絶後の埋土は単層（1層）で、整地層（5層・6層）の上面が床面と思われる。2層～4層は壁際溝埋土であるが、各辺において土色や混入物が少し異なる。

**壁** III層を掘り込んでいるが、西壁や南壁で0.20m強の深さがあるものの、北東に向かって浅くなり、東壁では0.08mの深さとなる。壁面は各辺ともやや傾斜している。

**床面** 比較的平坦であるが、南西から北東に向かってわずかに低くなる。床面において、4基の小穴（P1～P4）を検出した。P1～P4は、堅穴内の四隅にはほぼ方形に配置されていることから、柱穴と判断した。平面形は円形若しくは椭円形で、長軸長0.50m～0.60m、深さ0.14m～0.16mである。また、各辺の壁に沿って壁際溝を検出したが、西辺部中央のみ途切れている。なお、カマドや炉は確認できなかった。

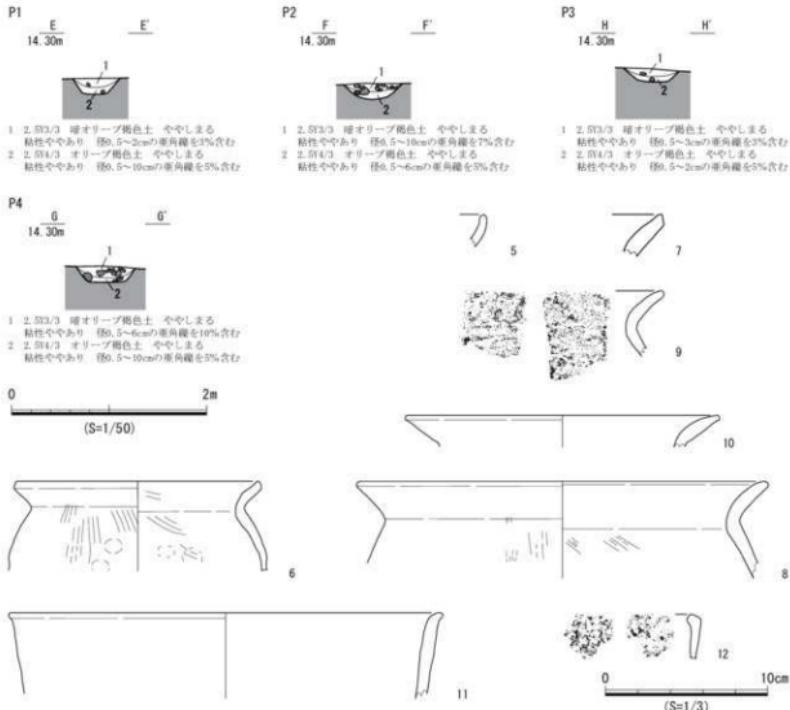


図13 SI02遺構図（2）、出土遺物（1）

**遺物出土状況** SI02埋土からは、土師器片218点、須恵器片63点が散在した状態で出土した。遺構から出土した点数としては最も多い。このうち図示した16と23、25、26は、包含層出土のものと接合した。また、22は表土や包含層出土のものと接合し、SI04出土の38とは接合しないが、胎土や焼成状況から同一個体と思われ、本来はSI04に伴うと考えられる。5層や6層（整地土）、壁際溝埋土からは、遺物は出土しなかった。P2から製塙土器片6点と土師器片が1点出土したがいずれも小破片で、他の柱穴から遺物は出土しなかった。

**出土遺物** 5～12は土師器、13～26は須恵器である。5は胎土や色調から畿内系<sup>1)</sup>と思われる坏だが、器面が摩滅し暗文は不明である。6は小型の甕で、口縁端部がわずかに上方に摘み上げられる。7～10は甕で、7の口縁端部は斜めに面取りされ、口縁部がやや肥厚する。8と9の口縁端部は丸く収める。10は口縁部がやや肥厚し、口縁端部を面取りする。11は植木鉢状の器形となる壺と思われ、口縁端部が外反する。12は被熱痕が顕著で、製塙土器と思われる小破片である。13と14は無台坏で、口縁部が直線的に開く。14は平底に近く、8世紀後半頃か。15と16はやや浅い有台坏と思われ、口縁部が直線的に開く。15は器壁がやや厚手で、8世紀前半頃か。16は器壁がやや薄くなり、腰部近くまで回転ヘラ削り調整及ぶことから、8世紀後半頃か。17はやや深さがある有台坏で、腰に丸みがあり、口縁部は直線的に開く。8世紀前葉と思われる。18は蓋で、口縁部が短く屈曲し、8世紀前葉と思われる。19は無台盤と思われるもので、口縁端部が外反する。8世紀中葉から後葉のものが。20は高盤の脚部と思われるもので、端部が下方に屈曲する。外面に沈線上の凹みが巡ることから、金属器模倣の

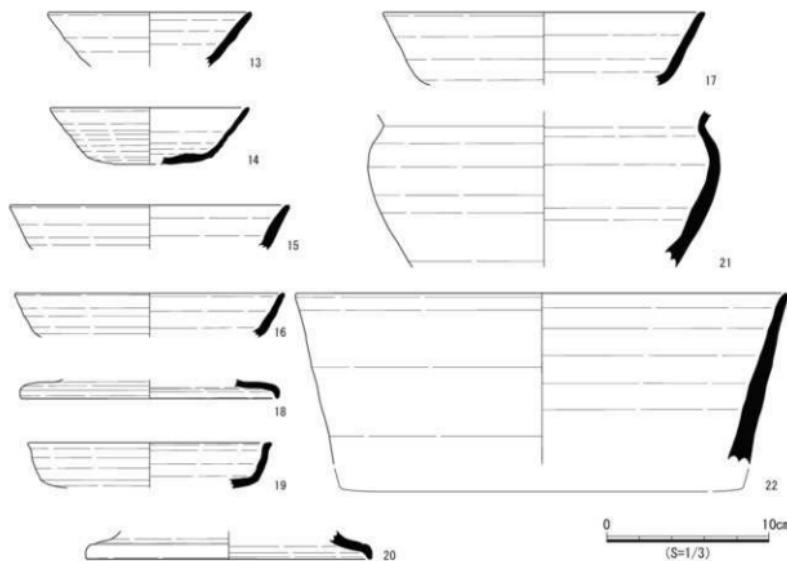


図14 SI02出土遺物（2）

蓋の可能性もある。21は鉢の胴部で、頸部が外反して開く。22は大型浅鉢の口縁部片で、直線的に開く。23と24は壺で、口頭部が大きく外反して開く。23の口縁端部は上下に拡張し、頸部外面に4条の沈線を巡らせ、縱位の櫛状工具による沈線を施すが、いずれも回転撫でにより不明瞭となる。7世紀末から8世紀前半頃と思われる。24の口縁部はやや外反して開き、外面に文様はない。25と26は壺の胴部片で、内面の当て具痕を25はほぼ全面を、26は部分的に撫で消している。

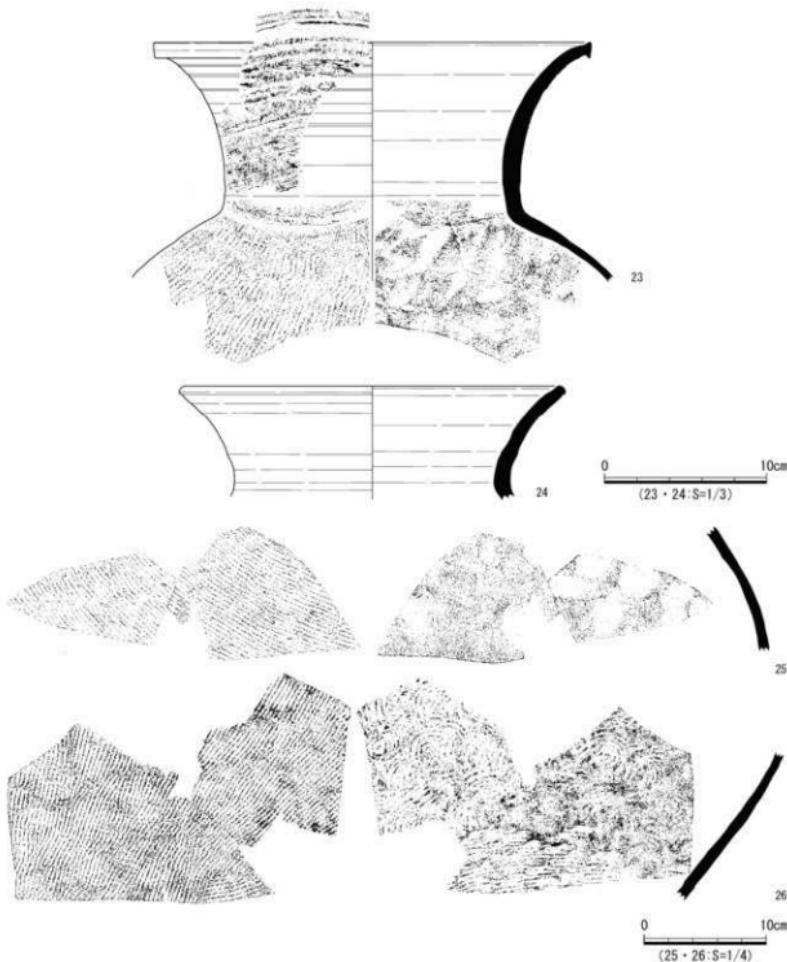


図15 SI02出土遺物（3）

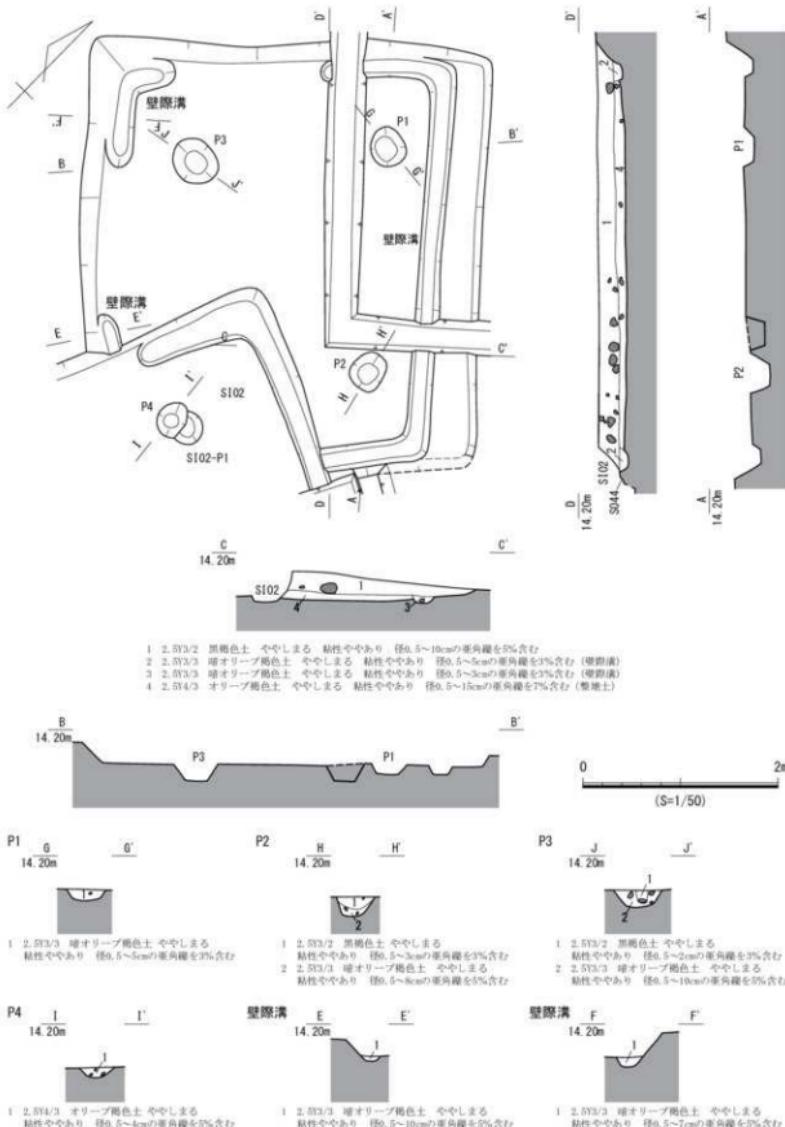


図16 SI03遺構図

**時期** 埋土中から出土した遺物は、7世紀末から8世紀後半のもので、重複した遺構からの混入と思われるものも含まれる。重複関係からSI01より古く、SI03～SI06よりも新しいとされていることから、8世紀後半と思われる。

#### SI03(図16・図17)

**検出状況** 発掘区西部の堅穴建物集中地点の北部において、II層除去後III層上面で検出した。多くの遺構と重複しており、北東辺を除いて不明瞭であった。北東辺も2基の遺構を同じものとしていたことが、掘削により判明した。このため、南東辺は確認できていない。検出時にSI02やSK16がSI03よりも新しいと判断した。また、SI06は当初SI03と同じものとして掘削したが、掘削過程で土色や混入物の変化、壁際溝の東隅の状況から、2基の遺構が重複していること、壁際溝の残存状態からSI03が新しい遺構と判断した。平面形は、検出できなかった南東辺を除き、直線的で方形に近い形状であるが、北西から南東方向にやや長く、長軸長4.50m、短軸長4.14mである。長軸方位は、N41°Wとなり、SI06と方位が近い。

**埋土** 4層に分層したが、堅穴建物廃絶後の埋土は単層（1層）で、整地土（4層）の上面が床面と思われる。2層と3層は壁際溝埋土であるが、各辺において繰り混入割合が少し異なる。

**壁** III層を掘り込んでいるが、北西壁では0.20m強の深さがあるものの、北東壁では0.05mの深さとなる。壁面は各辺ともやや傾斜している。

**床面** 比較的平坦であるが、西から東に向かってわずかに低くなる。床面において、4基の小穴（P1～P4）を検出した。P1～P4は、堅穴内の四隅にあり、P4がややずれた位置になるが、他の3基はほぼ方形に配置されていることから、柱穴と判断した。平面形は、SI02-P1と重複したP4以外はほぼ円形で、長軸長0.40m～0.50m、深さ0.10m～0.17mである。また、各辺の壁に沿って壁際溝を検出したが、北西辺部中央と南西辺部中央は途切れている。なお、カマドや炉は確認できなかつた。

**遺物出土状況** SI03埋土からは、土師器片33点、須恵器片13点が散在した状態で出土した。SI03埋土出土として取り上げた遺物の中には、SI06のものも含まれている。4層（整地土）や柱穴からは、遺物は出土しなかつた。壁際溝から土師器片が1点出土した。

**出土遺物** 27は土師器鍋又は瓶の把手である。28～30は7世紀末から8世紀代の須恵器である。28は無台坏の底部で、ヘラ切り未調整である。29は有台坏で、口縁部は直線的に開く。30は須恵器平瓶の口縁部片で、直線的に開く。7世紀末から8世紀前葉のものか。出土した場所から、SI06埋土のものである可能性がある。

**時期** 埋土中から出土した遺物は、7世紀末から8世紀代のもので、重複した遺構からの混入と思われるものも含まれる。重複関係からSI02より古く、SI06よりも新しいとされていることから、8世紀

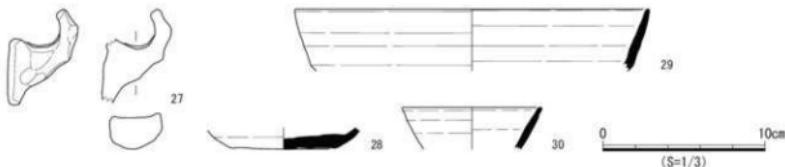


図17 SI03出土遺物

前半と思われる。

#### SI04（図18・図19）

**検出状況** 発掘区西部の堅穴建物集中地点の南部において、II層除去後III層上面で検出した。南辺部が不明瞭であり、多くの遺構と重複していたため、確認は困難であった。検出時にSI02やSK15がSI04よりも新しいと判断した。また、SI05は当初SI04と同じ遺構として掘削したが、南壁で段差が生じたことや床面の状況から2基の遺構が重複していること、土層堆積状況の確認により、SI04が新しい遺構と判断した。平面形は、SI02で削平された北辺を除き、直線的で方形に近い形状で、東西3.94m、南北の残存長3.90mであるが、柱穴の間隔からは南北にやや長いと思われる。長軸方位は、N12° Eとなり、SI02と方位が近い。

**埋土** 3層に分層したが、堅穴建物廃絶後の埋土は単層（1層）で、整地土（3層）の上面が床面と思われる。2層は壁際溝埋土である。

**壁** III層を掘り込んでいるが、南壁で0.41m、北壁附近で0.23mの深さがあり、検出した堅穴建物の中では、最も深さがある。壁面は各辺ともやや傾斜している。

**床面** 比較的平坦であるが、南西から北東に向かってわずかに低くなる。床面において、5基の小穴（P1～P5）を検出した。P1～P4は、堅穴内の四隅にあり、P1がややずれた位置になるが、他の3基はほぼ方形に配置されていることから、柱穴と判断した。平面形はほぼ円形若しくは楕円形で、長軸長0.27m～0.45m、深さ0.13m～0.20mである。P3とP4の間に類似した形態のP5を検出したが、その性格は不明である。また、西辺と東辺の壁に沿って壁際溝を検出したが、確認した状況は不明瞭であった。なお、カマドや炉は確認できなかった。

**遺物出土状況** SI04埋土からは、土師器片40点、須恵器片20点が散在した状態で出土した。このうち図示した33と35、38は、包含層出土のものと接合した。また、38はSI02出土の口縁部片（22）と接合はしなかったが、同一個体と思われる。39はSI02や包含層出土のものと接合した。なお、SI04埋土出土として取り上げた遺物の中には、SI05のものも含まれている。3層（整地土）や壁際溝からは、遺物は出土しなかった。P2から土師器片2点、P5から土師器片1点出土したが、他の柱穴からは出土しなかつた。

**出土遺物** 31は畿内系と思われる土師器壺であるが、暗文は確認できなかった。口縁端部が内側に巻き込まれて段をなし、外面には沈線状の凹みが巡る。32は土師器甕の底部片で、平底に近い形状である。33～39は須恵器で、8世紀代のものと思われる。33は無台壺で、口径が小さく口縁部が直線的に開く。美濃須衛IV～3期のものと思われる。34は無台壺で、口縁部がわずかに外反して開く。口径がやや大きく、器壁に厚みがあることから8世紀前半頃のものか。35と36は蓋で、口縁端部が短く湾曲し、美濃須衛IV～1期のものと思われる。35の内面にはヘラ記号が刻まれている。37も蓋で、天井部が直線的で、口縁端部が短く湾曲する。8世紀前半頃のものか。38は大型浅鉢の体部から底部で、あまり開かない。SI02出土の口縁部片（22）とは、胎土や焼成から同一個体と思われる。8世紀頃のものか。39は横瓶胴部片で、ラグビーボール状となり、7世紀後葉頃のものか。なお、34や37、39は、出土場所からSI05埋土出土の可能性がある。

**時期** 埋土から出土した遺物で、最も新しいと思われる33は8世紀後葉だが、遺構の重複関係からはSI02よりも古く、SI05よりも新しいと考えられることから、8世紀後半と思われる。

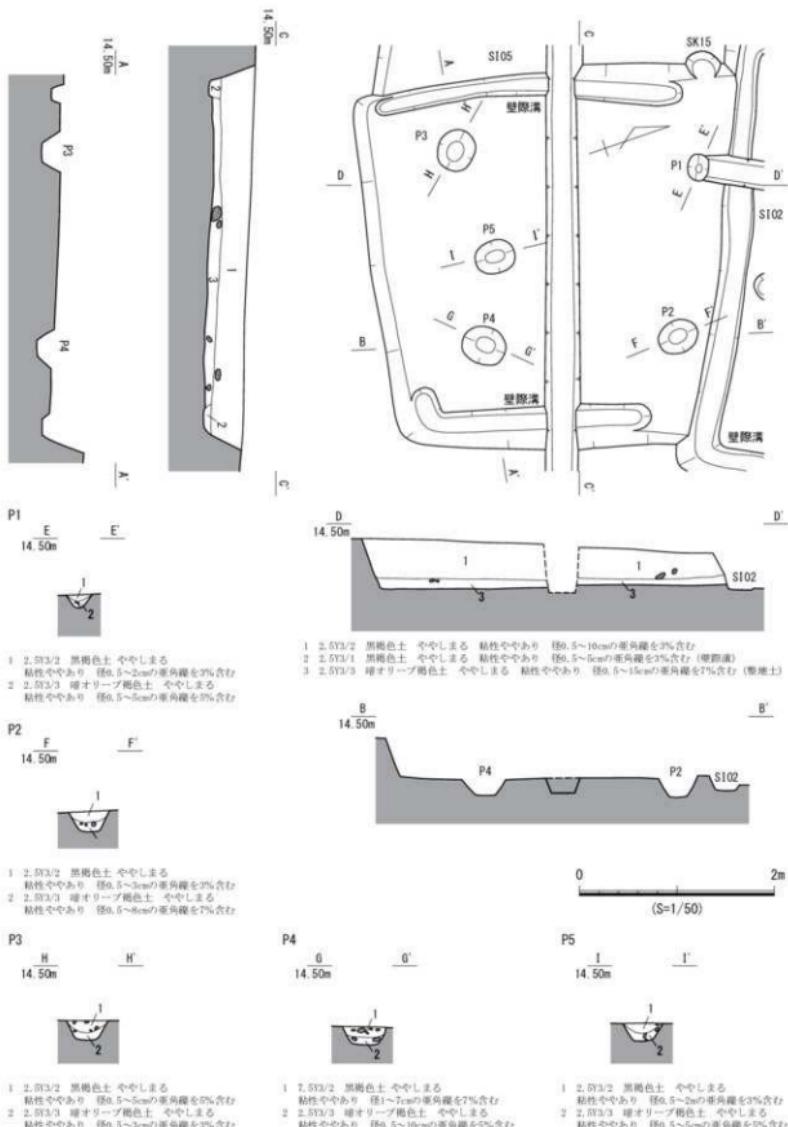


図18 S104遺構図

## SI05(図20・図21)

**検出状況** 発掘区西部の堅穴建物集中地点の南部において検出したが、当初はSI04と同じ遺構としており、掘削途中でSI04と重複する別の遺構と判断した。東半部はSI02とSI04により削平され不明であるが、北辺と西辺の一部はSI01底面で検出した。西辺の一部は誤認により掘り過ぎている。平面的に重複したSI01、SI02、SI04、SK15よりも古いと思われる。平面形は、残存した西半部の各辺は直線的で、柱穴の配置状況から方形に近い形状と思われるが、東西方向にやや長い。残存する南北方向の長さは5.38mで、柱間の長軸方位は、N70°Wとなり、SI02やSI04と方位が近い。

**埋土** 3層に分層したが、堅穴建物廃後の埋土は単層(1層)で、整地土(3層)の上面が床面と

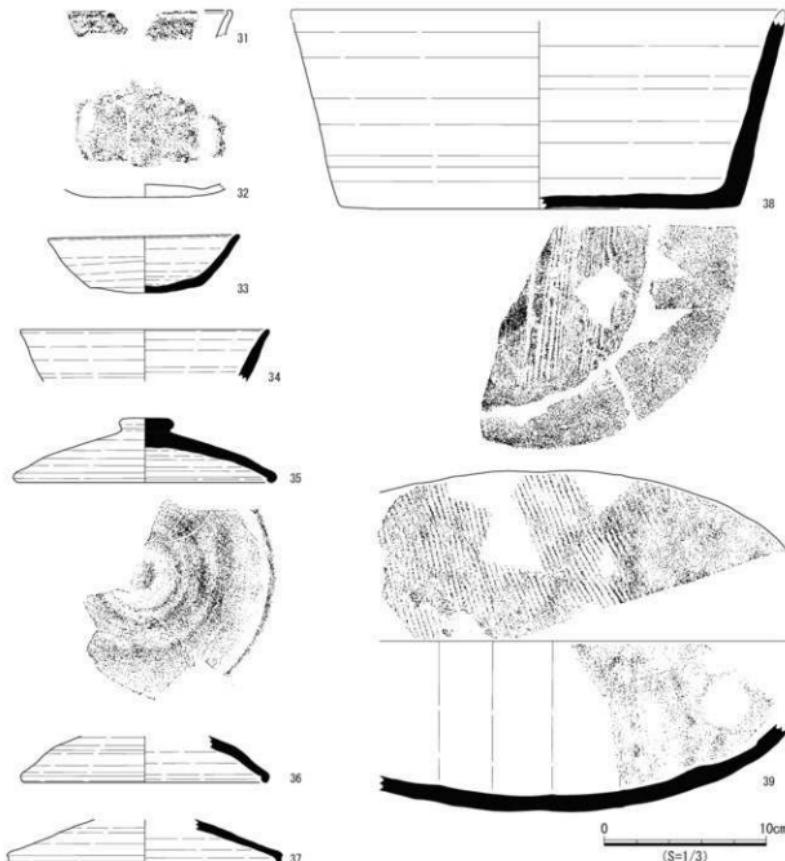


図19 SI04出土遺物

思われる。2層は壁際溝埋土であるが、各辺において土色や礫の混入割合が異なる。

**壁** III層を掘り込んでいるが、南壁では0.42mの深さがあるものの、北壁では0.11mの深さとなる。残存する壁面は、各辺ともやや傾斜している。

**床面** 比較的平坦であるが、西から東に向かってわずかに傾斜している。床面及び他遺構の底面にお

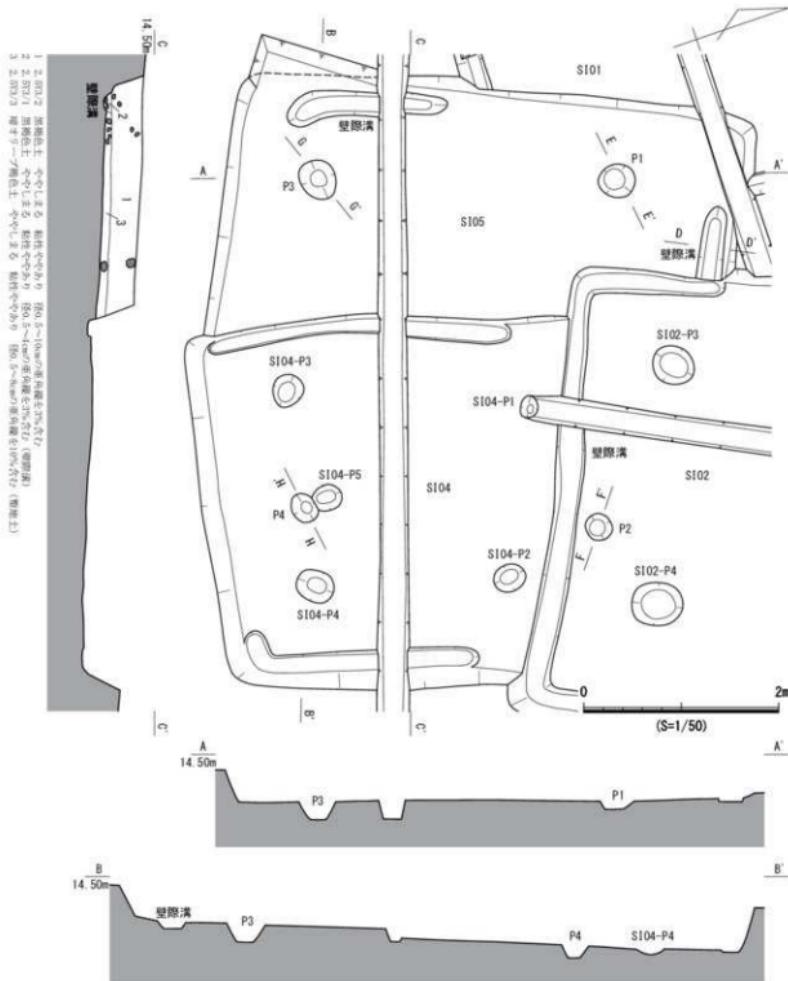


図20 SI05遺構図（1）

いて、4基の小穴（P1～P4）を検出した。P1～P4は、想定される竪穴内の四隅にあり、ほぼ方形に配置されていることから柱穴と判断した。平面形はほぼ円形若しくは楕円形で、長軸長0.28m～0.44m、深さ0.04m～0.20mである。また、西辺及び北辺の一部では、壁に沿って壁際溝を検出したが、不明瞭であった。なお、カマドや炉は確認できなかった。

**遺物出土状況** SI05埋土からは、土師器片15点、須恵器片1点が散在した状態で出土した。他にSI04埋土出土として取り上げた遺物の中には、SI05のものも含まれている。3層（整地土）や柱穴、壁際溝からは、遺物は出土しなかった。

**出土遺物** 40は畿内系土師器片の口縁部片である。41は須恵器無台壺の底部で、焼成不良である。

**時期** 埋土から出土した遺物は、散在した状態で出土しているが、SI04埋土出土として取り上げた37は、8世紀前半と思われる蓋で、SI05埋土出土の可能性がある。また、重複関係からSI01やSI02、SI04よりも古いとされることから、8世紀前半と思われる。

#### SI06（図22）

**検出状況** 発掘区西部の竪穴建物集中地点の北部において検出したが、当初はSI03と同じ遺構としており、掘削途中でSI03と重複する別の遺構と判断した。東隅部以外は、SI02とSI03により削平され不明である。また、南東辺の一部は誤認により掘り過ぎている。平面的に重複したSI02とSI03よりも古いと思われる。平面形は、残存した東隅部の状況から、北東辺や南東辺は直線的で、方形若しくは長方形に近い形状と思われる。検出した2基の柱穴の柱筋を長軸方位とすると、N46°Wとなり、SI04と方位が近い。

**埋土** SI03として掘削した埋土を単層と考えると、壁際溝埋土（1層）と整地土（2層）と合わせて3層になる。

**壁** III層を掘り込んでいるが、北東壁では0.06mの深さがあり、残存する壁面は、各辺ともやや傾斜している。

**床面** 検出できたのは狭い範囲であるが、比較的平坦である。床面及びSI03底面において、2基の小穴（P1とP2）を検出した。P1とP2を結ぶラインは、竪穴北東辺にほぼ平行し、P2は竪穴内の東隅部に位置することから、柱穴と判断した。平面形はほぼ楕円形で、長軸長0.31m～0.39m、深さ0.15m～0.16mである。また、南東壁から東隅にかけて壁際溝を検出した。なお、カマドや炉は確認できなか

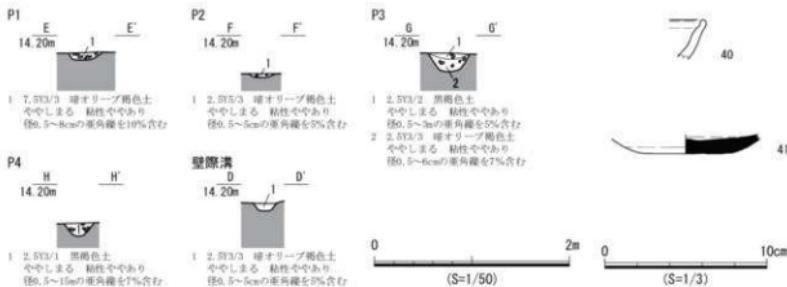


図21 SI05遺構図（2）、出土遺物

つた。

**遺物出土状況** SI06埋土として取り上げた遺物は、土師器片2点のみであったが、SI03埋土として取り上げた遺物の中には、SI06のものも含まれている。2層や柱穴、壁際溝からは、遺物は出土しなかった。

出土遺物 小破片のため図示しなかった。

**時期** 重複関係からSI02とSI03よりも古い。また、SI03埋土出土とした遺物で、SI06埋土出土の可能性がある土器が7世紀末から8世紀前葉と思われること、今回の調査で出土した須恵器の甕や瓶類には、7世紀後葉に遡る可能性がある遺物が存在するが、内面に返りを持つ蓋が出土していないことなどから、7世紀末頃と思われる。

2 溝狀遺構

竪穴建物に付属する壁際溝を除き、発掘区内で検出した溝状遺構は1条だけであった。

SD01 (图23)

**検出状況** 発掘区の北西部において、SK04やSK05、SK06掘削後に各遺構の底面で検出した、直線的な

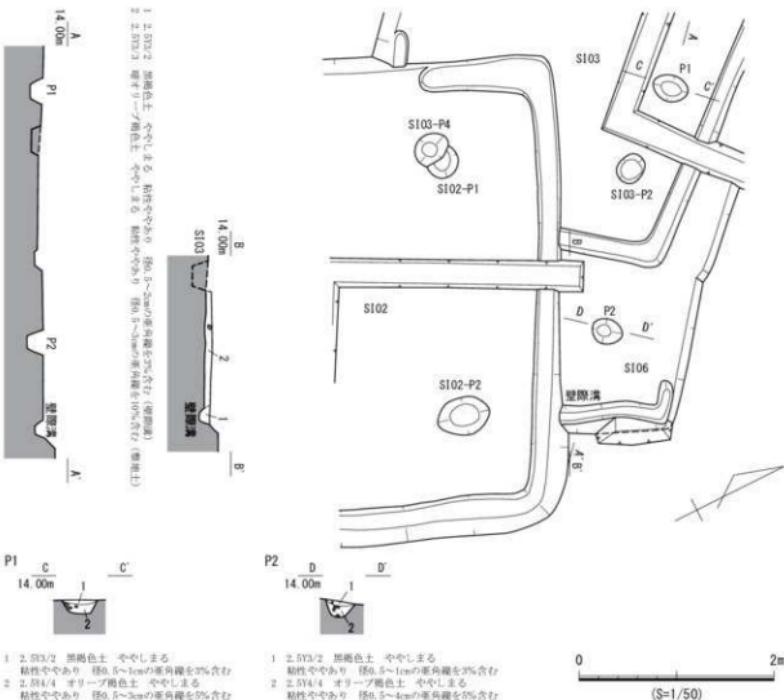


図22 SI06遺構図

構状遺構である。長軸がN20°Eの方向にあり、SI02やSI04などの長軸方位に近い。検出した状況から、SK04やSK05、SK06よりも古ないと判断した。

**埋土** 単層で穢を含み、SK04の埋土と類似している。

**遺物出土状況** 土師器片4点が、埋土中から散在した状態で出土した。

**出土遺物** 42は土師器甕の口縁部片で、口縁端部に沈線状の凹みが巡る。

**時期** 出土した遺物から、奈良時代と思われる。

### 3 土坑

土坑は18基検出したが、このうち出土した遺物や遺構の重複関係から、奈良時代と思われるものは9基で、残り9基は遺物が出土しなかったため時期不明である。しかし、包含層等出土遺物の大半が奈良時代のものであることから、時期不明とした土坑も奈良時代のものである可能性が高い。

**SK01（図23）**

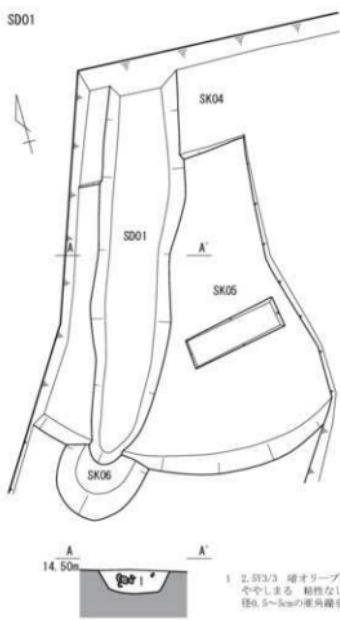
**検出状況** 発掘区西部において、II層除去後にIII層上面で検出した。平面形は明瞭で、西側は発掘区外となる。北側にテラス状の段を持ち、壁面は開く。底面は比較的平坦である。

**埋土** 2層に分層したが、ほぼ水平堆積で、どちらにも亜角鱗を含む。

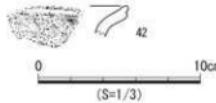
**遺物出土状況** 遺物は出土しなかった。

**時期** 遺物が出土しなかったため、時期不明である。

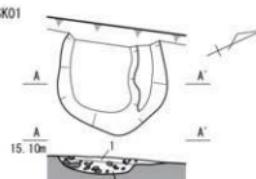
SD01



SD01出土遺物

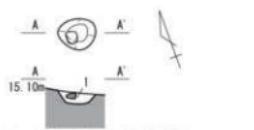


SK01



1. 2.SS3/2 黒褐色土 ややしまる  
粘性なし 程0.5~5cmの亜角鱗を5%含む  
2. SS3/3 塗オリーブ褐色土 ややしまる  
粘性ややあり 程5~15cmの亜角鱗を10%含む

SK02



1. 2.SS3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性なし  
程0.5~5cmの亜角鱗を5%含む

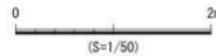


図23 SD01・SK01・SK02遺構図、SD01出土遺物

## SK02（図23）

**検出状況** 発掘区西部において、II層除去後にIII層上面で検出した。平面形は明瞭で、橢円形の浅い穴である。SK03と重複するが、検出状況からSK02が新しいと判断した。壁面は開き、底面は比較的平坦である。

**埋土** 単層で亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 遺物は出土しなかった。

**時期** 遺物が出土しなかったため、時期不明である。

## SK03（図24）

**検出状況** 発掘区西部において、II層除去後にIII層上面で検出した。平面形は明瞭で、橢円形の浅い穴である。SK02と重複するが、検出状況からSK03が古いと判断した。壁面は開き、底面は比較的平坦である。

**埋土** 単層で亜角礫を含む。SK02と非常によく似た埋土であるが、SK03の埋土は土色がやや明るい。

**遺物出土状況** 遺物は出土しなかった。

**時期** 遺物が出土しなかったため、時期不明である。

## SK04（図24）

**検出状況** 発掘区北西部において、II層除去後にIII層上面で検出した。平面形は東側が不明瞭で、発掘区壁面においても明確に掘方の立ち上がりが確認できなかった。多くが発掘区外に広がると思われ、形状不明であるが、確認した南壁は直線的なため、溝状遺構となる可能性もある。SD01やSK05と重複するが、検出状況からSK04はこれらよりも新しいと判断した。底面は西から東に向かってやや低くなる。

**埋土** 単層で亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 遺物は出土しなかった。

**時期** 遺物が出土しなかったため、時期不明である。

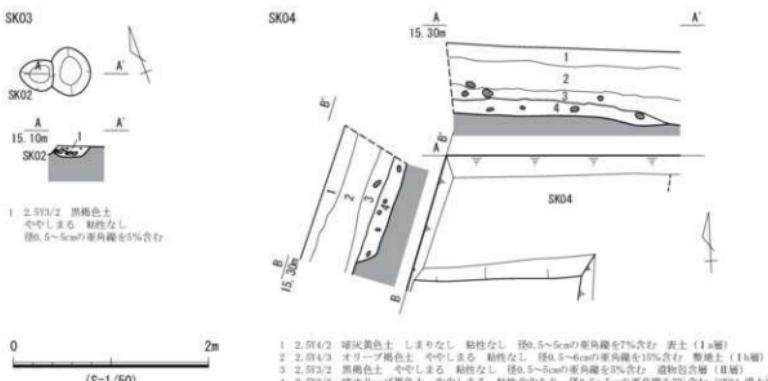


図24 SK03・SK04遺構図

## SK05(図25)

**検出状況** 発掘区北西部において、II層除去後にIII層上面で検出した。平面形は不明瞭で、西側は発掘区外に広がり、東側は別の造構と誤認して掘削したため、形状は不明である。SK04やSK06、SD01と重複するが、検出状況からSK04やSK06が新しく、SD01が古いと判断した。確認した南壁は弧を描き、底面は比較的平坦で、壁面は開く。

**埋土** 2層に分層したが、埋土中に亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 土師器片5点が、埋土中から散在した状態で出土した。

**出土遺物** 小破片のため図示しなかった。

**時期** 出土した遺物から、奈良時代と思われる。

## SK06(図25)

**検出状況** 発掘区北西部において、II層除去後にIII層上面で検出した。平面形は不明瞭であったが、楕円形の浅い穴である。SD01やSK05と重複するが、検出状況からいずれの造構よりもSK06が新しいと判断した。楕円形の浅い穴で、壁面は開き、底面は比較的平坦である。

**埋土** 単層で亜角礫を含む。SK05の埋土とは、土色は似ているが、粘性や締まりの状態が異なる。

**遺物出土状況** 遺物は出土しなかった。

**時期** 遺物が出土しなかったため、時期不明である。

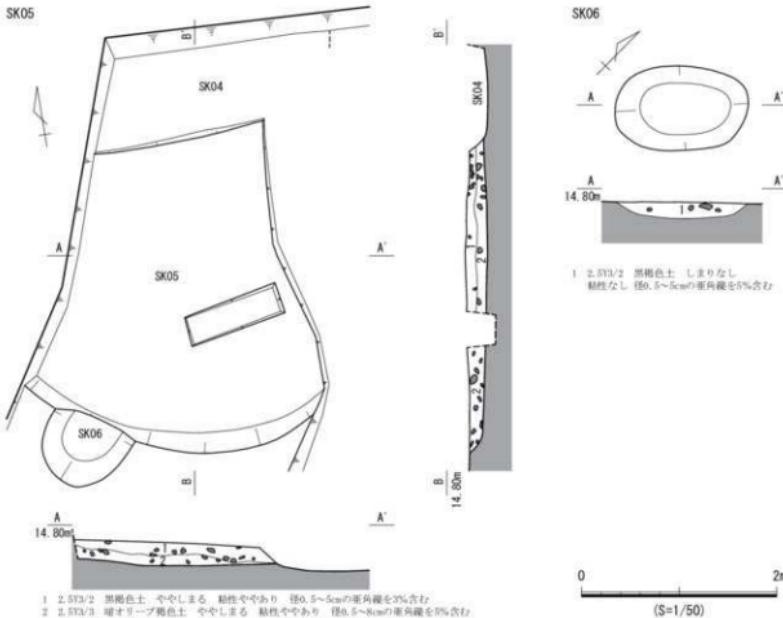


図25 SK05・SK06造構図

## SK07（図26）

**検出状況** 発掘区西部において、II層除去後にIII層上面で検出した。平面形は不明瞭で、東部がSI01と重複しているため、全形は不明である。検出した部分の形状は方形となるため、当初は小型の竪穴建物の可能性も考えたが、柱穴や壁際溝などを確認できなかったことから、土坑とした。SI01と重複するが、検出状況からSI01が新しいと判断した。壁面がやや開く方形の浅い穴で、底面は比較的平坦である。なお、検出した西壁が、SI01の西壁とほぼ平行すること、SK07と重複する部分で、SI01の西壁際溝が途切れるところから、SI01に付属する可能性も考えられる。

**埋土** 単層で亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 遺物は出土しなかった。

**時期** 遺物が出土しなかったため、時期不明であるが、重複関係はSI01よりも古いことから奈良時代のものと思われる。

## SK08（図26）

**検出状況** 発掘区南西部において、I b層除去後にIII層上面で検出した。平面形は不明瞭であったが、円形の浅い穴である。壁面は開き、底面は比較的平坦である。

**埋土** 単層で亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 遺物は出土しなかった。

**時期** 遺物が出土しなかったため、時期不明である。

## SK09（図26）

**検出状況** 発掘区南西部において、I b層除去後にIII層上面で検出した。平面形は明瞭で、円形の浅い穴である。壁面は開き、底面は比較的平坦である。

**埋土** 単層で亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 遺物は出土しなかった。

**時期** 遺物が出土しなかったため、時期不明である。

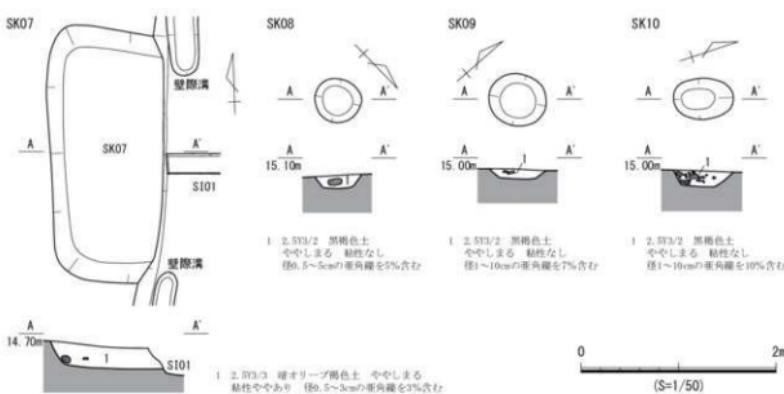


図26 SK07～SK10遺構図

## SK10（図26）

**検出状況** 発掘区南西部において、I b層除去後にIII層上面で検出した。平面形は明瞭で、楕円形の浅い穴である。壁面は開き、底面は比較的平坦である。

**埋土** 単層で亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 遺物は出土しなかった。

**時期** 遺物が出土しなかったため、時期不明である。

## SK11（図27）

**検出状況** 発掘区北西部において、II層除去後にIII層上面で検出した。北部が発掘区外に広がるが、平面形は明瞭で、楕円形の浅い穴である。西側にテラス状の段を持ち、壁面は比較的立ち上がり、底面はやや丸みがある。

**埋土** 2層に分層したが、テラス状部分に堆積するのは1層だけである。いずれにも亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 土師器片13点が、埋土中に散在した状態で出土した。

**出土遺物** 43は、土師器甕の口縁部片で、口縁端部は平坦である。

**時期** 出土した遺物から、奈良時代と思われる。

## SK12（図27）

**検出状況** 発掘区北西部において、II層除去後にIII層上面で検出した。北部が発掘区外に広がるが、平面形は明瞭で、楕円形の浅い穴である。壁面は開き、底面は比較的平坦である。

**埋土** 単層で亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 土師器片2点が、埋土中に散在した状態で出土した。

**出土遺物** 小破片のため図示しなかった。

**時期** 出土した遺物から、奈良時代と思われる。

## SK13（図27）

**検出状況** 発掘区北西部において、堅穴建物の可能性を考え、サブトレンチを掘削した際に確認した。精査した結果、堅穴建物ではないことが判明し、SK13の平面形を確認した。サブトレンチにより東部を削平したが、ほぼ円形でやや深い穴である。壁面はやや開き、底面は比較的平坦である。

**埋土** 単層で亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 須恵器片1点が、埋土中から出土した。

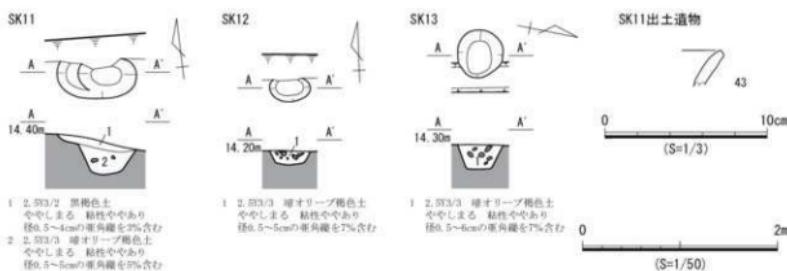


図27 SK11～SK13遺構図、SK11出土遺物

**出土遺物** 小破片のため図示しなかった。

**時期** 出土した遺物から、奈良時代と思われる。

**SK14（図28）**

**検出状況** 発掘区北西部において、堅穴建物の可能性を考え、サブトレンチを掘削した際に確認した。

精査した結果、堅穴建物ではないことが判明し、SK14の平面形を確認した。サブトレンチにより北半を削平しており、形状は不明である。壁面は開き、底面は比較的平坦な浅い穴である。

**埋土** 単層で亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 土師器片4点と須恵器片2点が、埋土中から散在した状態で出土した。

**出土遺物** 小破片のため図示しなかった。

**時期** 出土した遺物から、奈良時代と思われる。

**SK15（図28）**

**検出状況** 発掘区南部において、SI04とSI05の埋土上面で検出した。平面形は明瞭で、ほぼ円形のやや深い穴である。壁面はやや開き、底面は比較的平坦である。

**埋土** 2層に分層したが、いずれも亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 遺物は出土しなかった。

**時期** 遺物が出土しなかったため、時期不明である。

**SK16（図28）**

**検出状況** 発掘区中央部において、SI02とSI03の埋土上面で検出した。平面形は明瞭で、ほぼ円形の浅い穴である。壁面は開き、底面は比較的平坦である。

**埋土** 2層に分層したが、いずれも亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 土師器片7点と須恵器片1点が、埋土中から散在した状態で出土した。

**出土遺物** 小破片のため図示しなかった。

**時期** 出土した遺物から、奈良時代と思われる。

**SK17（図28）**

**検出状況** 発掘区中央部において、II層除去後にIII層上面で検出した。平面形は不明瞭であり、当初は方形の堅穴建物として検出し、サブトレンチを掘削して堆積状況を確認したが、掘方を確認することができなかった。あらためて精査したところ、楕円形状のやや大きな土坑であることが判明した。

西部はSI02と重複しているが、検出状況からSI02が新しいと判断した。東部は、サブトレンチにより削平されている。壁面は開き、底面は比較的平坦である。

**埋土** 2層に分層したが、いずれにも亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 遺物は出土しなかった。

**時期** 遺物は出土しなかったが、SI02よりも古い遺構であることから、奈良時代と思われる。

**SK18（図28）**

**検出状況** 発掘区南部において、II層除去後にIII層上面で検出した。擾乱坑の間にあるため、平面形は不明瞭で、形状不明の浅い穴である。壁面は開き、底面は比較的平坦である。

**埋土** 2層に分層したが、いずれも亜角礫を含む。

**遺物出土状況** 土師器片2点が、埋土中から散在した状態で出土した。

**出土遺物** 小破片のため図示しなかった。

**時期** 出土した遺物から、奈良時代と思われる。

#### 4 包含層等出土遺物

包含層(II層)及び表土(Ia層)や整地層(Ib層)から、縄文時代から近世の遺物が出土した。

このうち、土師器や須恵器、山茶碗、砥石を図示した。

##### (1) 土師器

図示した土師器は、7世紀後葉から8世紀代のものと思われる。44～46は、胎土や色調から畿内系と思われる。44は壺で、口縁端部が内側に巻き込まれ、やや肥厚する。内面の暗文は摩滅により不明である。45は壺で、内面に放射状の暗文がわずかに確認できる。46は皿で、口縁部は短く開く。内外面の調整は摩滅により不明である。47と48は鉢の底部で、平底である。49～58は甕である。49と50は口縁端部が上方に摘み上げられる甕で、頸部がやや肥厚する。7世紀後葉から8世紀前葉と思われる。51は口縁端部がやや内湾する甕で、頸部はやや肥厚し屈曲する。52～56は頸部が外反し、口縁端部は丸く収める。52は頸部が肥厚し、56は小型で、肥厚した頸部の外反が弱い。57は濃尾型甕の口縁部で、

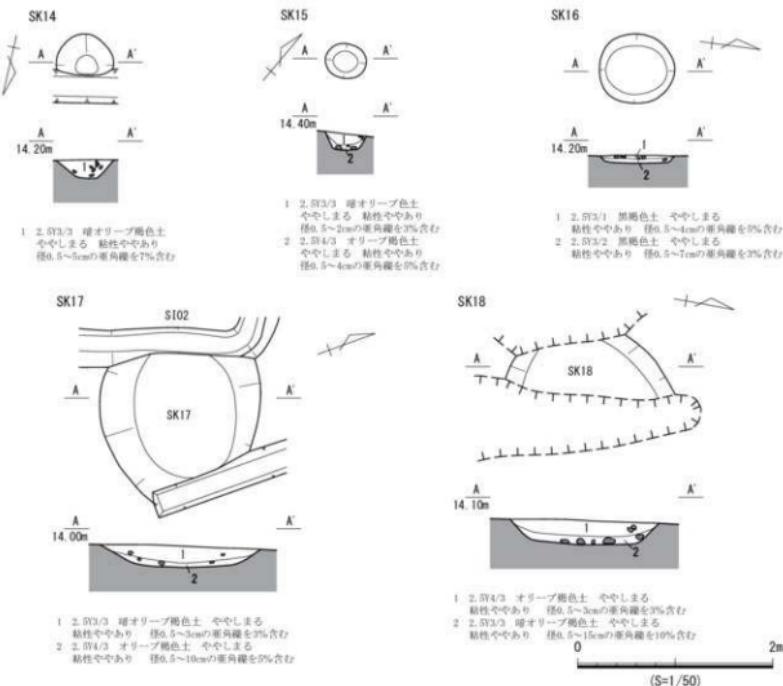


図28 SK14～SK18遺構図

内面に粗い横方向の刷毛目調整を施す。58は濃尾型壺の胴部から底部で平底である。底部の接合が特徴的である。59は鍋の底部片と思われ、平底で胴部は大きく開いて立ち上がる。60は瓶口縁部片で、緩やかに外反して開く。61は壺の底部で、半円形の蒸気孔を2つあける。62～64は鍋又は鍋の把手である。65は蓋のような器形の摘みと思われるもので、上面に放射状の刺突列を6列施す。66は二次的

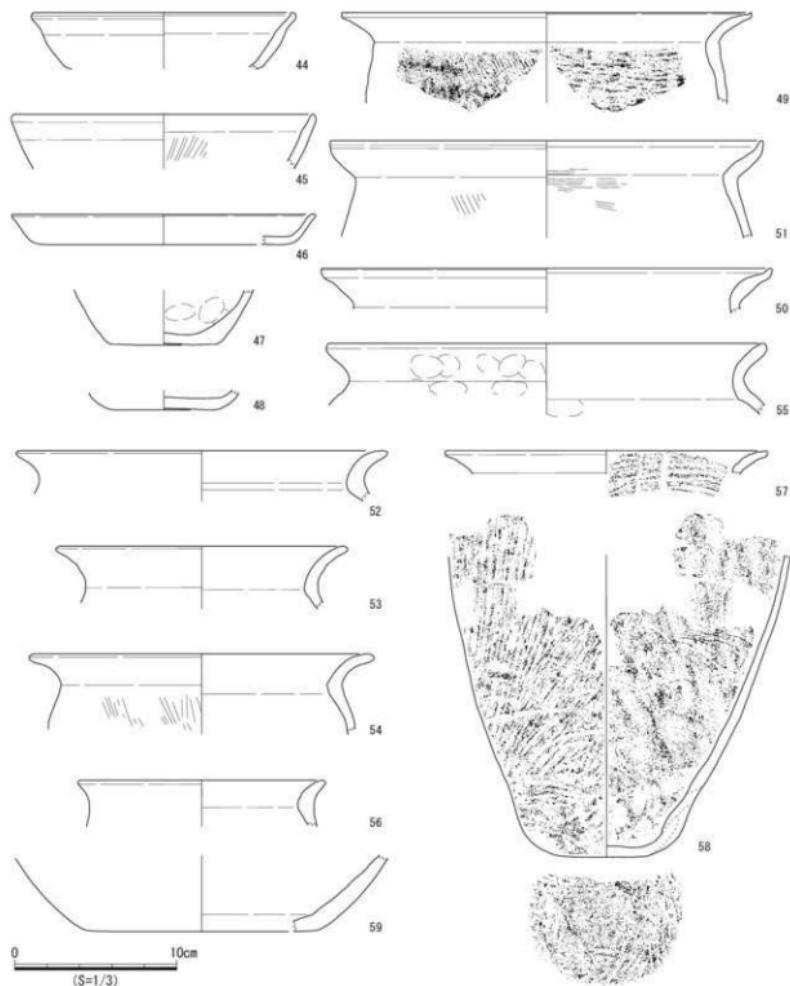


図29 包含層等出土遺物（1）

な被熱を受けている状況から、製塙土器と思われる。67と68は製塙土器の脚部である。69は二次的な被熱が確認できず、砂粒を多く含むためミニチュア土器としたが、製塙土器の可能性もある。

## (2) 須恵器

図示した須恵器は、7世紀後葉から9世紀初頭のものと思われる。70～83は無台坏である。70は腰部が湾曲して開き、口縁部がやや外反する。71は外面がヘラ削り調整され、ヘラ記号がある。70と71は7世紀末から8世紀初頭と思われる。72は体部がやや外反して開く。73は平底の底部片で周囲を敲打し、円盤状に加工した可能性がある。74と75は腰部が湾曲して開き、底部に厚みがある。72～75は8世紀前半と思われる。76と77は底部片で、76には内面にヘラ記号がある。いずれも美濃須衛IV-1期～IV-2期と思われる。78は直線的に開く口縁部片である。79は腰部が屈曲し、口縁部が直線的に開く。美濃須衛IV-3期と思われる。80～82は底部片で、外面にヘラ記号がある。83は底部片であるが、周囲を敲打し円盤状に加工した可能性がある。84～96は有台坏である。84は底部が厚く、腰部は湾曲して立ち上がり、美濃須衛III-3期と思われる。85は腰部が湾曲して立ち上がり、8世紀前半と思われる。86は口縁部が直線的に立ち上がり、美濃須衛IV-3期と思われる。87は腰部が湾曲し、口縁部が直線的で、美濃須衛IV-3期と思われる。88～91は厚みのある底部片で、底部が高台よりも突出するものがあり古い様相を示すが、高台が小さく雑な貼り付けであることから、美濃須衛IV-3期と思われる。88の外面にはヘラ記号がある。92は底部に厚みがあるが、腰部は屈曲して立ち上がる。

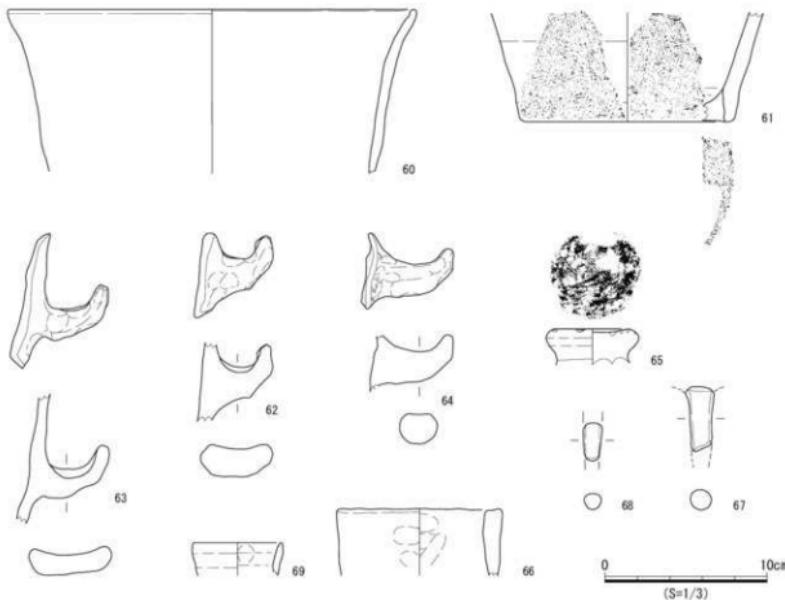


図30 包含層等出土遺物（2）

93は腰部が湾曲し、内側が突出した高台を付ける。92と93は美濃須衛IV-3期と思われる。94は腰部が屈曲して開き、8世紀後葉と思われる。95は高台の幅が広くなり、やや雑に貼り付けてあることから、美濃須衛IV-3期からV-1期と思われる。96は幅広で扁平な高台を付け、腰部に明瞭な棱がある。

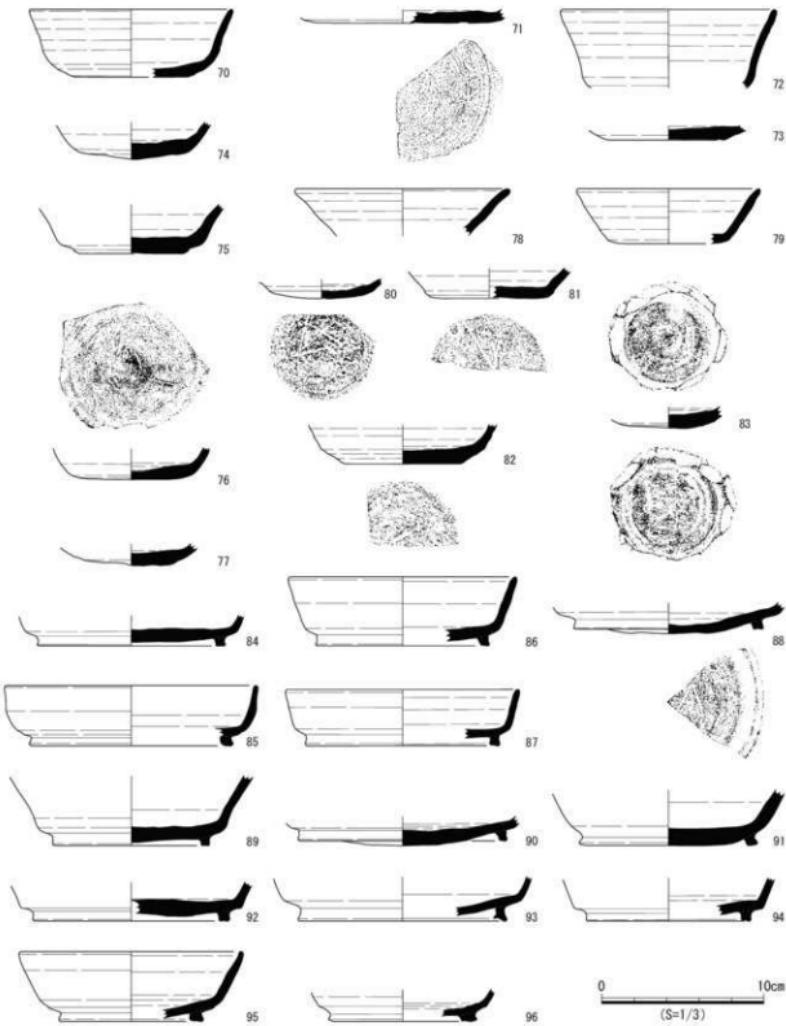


図31 包含層等出土遺物（3）

り、9世紀前半と思われる。97～106は蓋である。97は口縁端部がわずかに下方に屈曲し、美濃須衛III－3期と思われる。98と99は口縁端部が短く屈曲する。100は口縁端部が短く屈曲しわずかに外反する。98～100は美濃須衛III－3期からIV－1期と思われる。101は扁平な摘みを付け、口縁部が短く屈曲する。102は口縁部の屈曲が甘く、天井部は扁平である。101と102は8世紀前半と思われる。103は口縁部が強く屈曲し、天井部は扁平である。8世紀後半と思われる。104は擬宝珠様の摘みを付け、美濃須衛IV－3期と思われる。105と106は金属器写しの蓋と思われる。105は環状の摘みを付け、106は天井部に沈線が巡る。107～109は碗である。107は底部片で、沈線を1条巡らせており、金属器写しの可能性がある。8世紀前葉と思われる。108は小型で、口縁端部が外反する。109はやや深みがあり、口縁端部がやや外反する。108と109は8世紀後半と思われる。110と111は有台盤で、短く立ち上がる口縁部がやや外反する。110の高台は、端部が内側に屈折する。美濃須衛IV－2からIV－3期と思われる。112と113は台付盤で、113の台は外反し、端部が外に屈曲する。3箇所に十字形の透かし孔を開ける。美濃須衛IV－3期～V－1期と思われる。114は高盤の脚部で、3方向から長方形の透孔をあける。

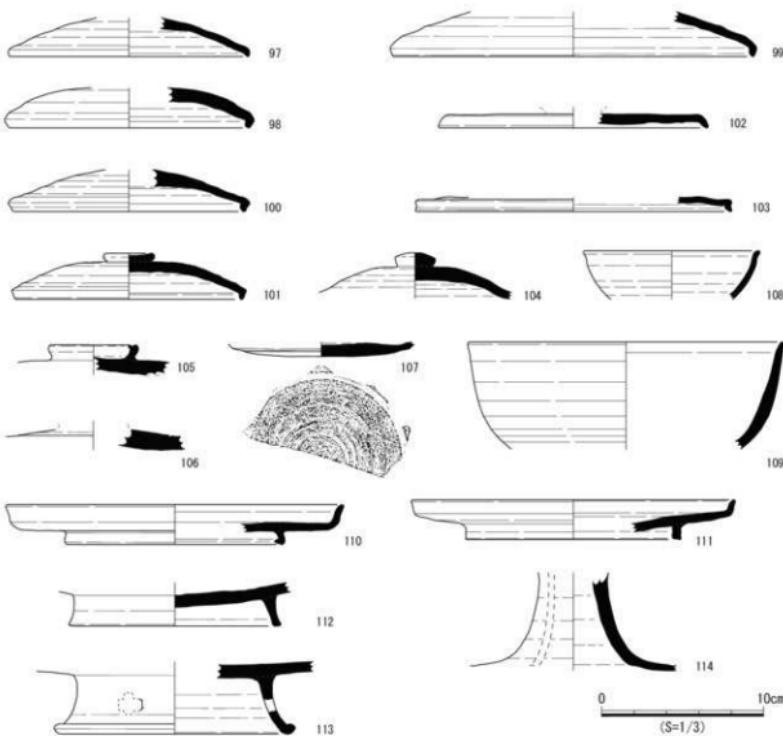


図32 包含層等出土遺物（4）

115は鉢で、頸部が外反し、口縁端部が断面三角形となり、7世紀後半と思われる。116は鉢と思われるが類例のない器形で、肩部が屈曲し、口頸部が外反して開く。口縁端部は短く外に折れる。117は長頸壺の底部で、美濃須衛III-3期と思われる。118は長頸壺の頸部で、沈線を2条巡らせる。8世紀後半と思われる。119は平瓶の口縁部で、外反して開く。8世紀後半頃のものか。120は平瓶の胴部から底部片で、胴部は扁平で無高台である。121～123は短頸壺である。121と122は同一個体と思われ、短い口縁部が段を持って立ち上がる。7世紀後葉と思われる。123は口縁部外面に段を持つことから、7世紀後葉と思われる。124は壺類の胴部片で、上部で強く張る。125は小型の瓶類の底部で、外面にヘラ記号がある。126～130は横瓶である。126は口縁部片で、短く外反し口縁端部が肥厚する。7世紀後

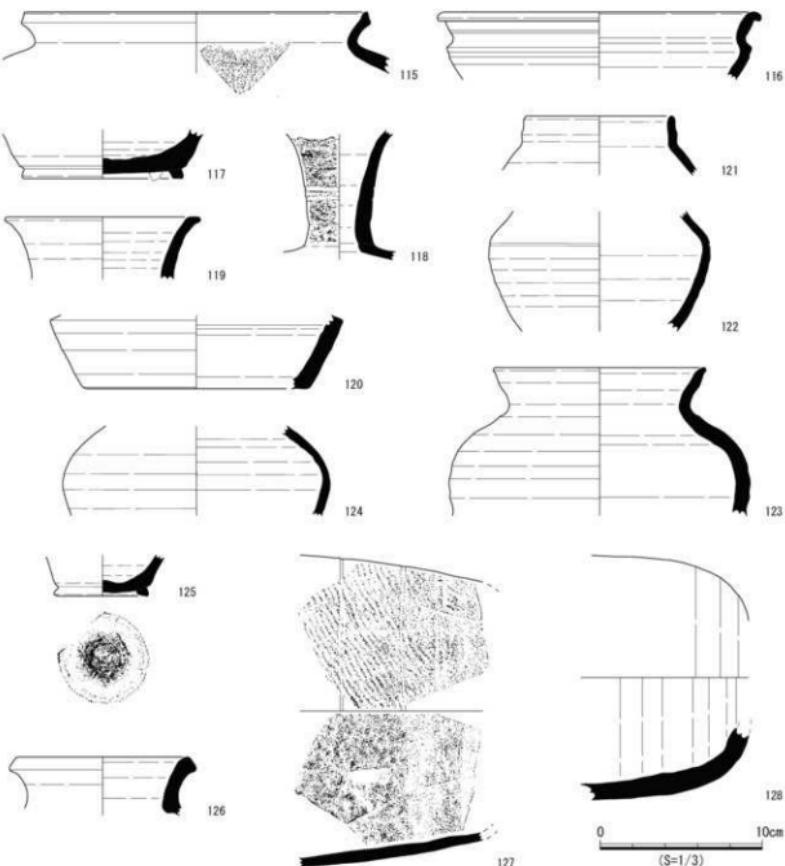


図33 包含層等出土遺物（5）

半と思われる。127～130は胴部片で、7世紀後半と思われる。127は沈線を施し、128は粘土板による蓋の痕跡が確認できる。129と130は長径方向の端部で、130にはヘラ記号がある。131は小型の翫と思われる。132は口縁部を欠くが、岩崎25号窯（日進町教育委員会1984）で合子とされたものと同様の器形で、8世紀前半と思われる。133～141は甕である。133と134は接合しなかつたが、焼成や當て具痕

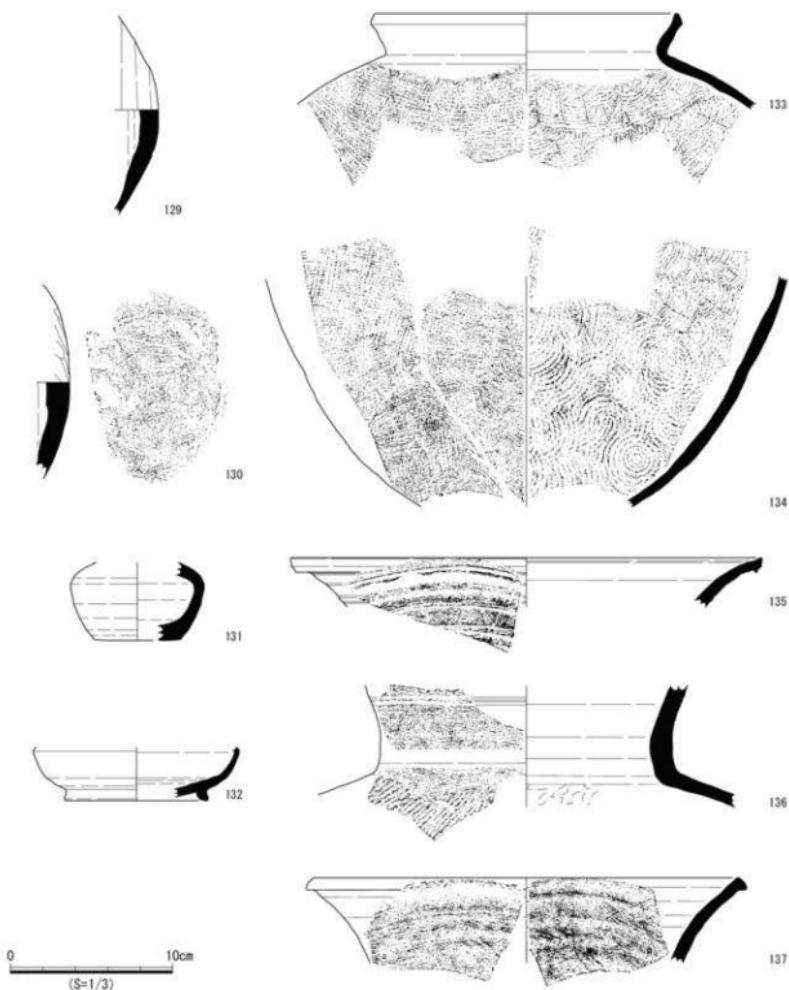


図34 包含層等出土遺物（6）

の特徴から同一個体と思われる。頸部は屈曲して口縁部は短く立ち上がる。7世紀後葉と思われる。135は口頸部が大きく外反して開き、口縁端部を上下に拡張する。頸部外面には横位の沈線と、縦位の櫛状工具による沈線を施すが、回転撫でにより不明瞭となる。SI02出土の壺(23)によく似た形状や文様で、7世紀末から8世紀前葉と思われる。136は頸部片で、外面に沈線と櫛状工具による波状文が施され、内外面に黄土が塗布される。8世紀前半と思われる。137は頸部が外反して開き、口縁端部が下方に拡張される。内外面に斜方向の工具痕と思われる沈線列があり、外面には黄土が塗布される。8世紀前半と思われる。138は口頸部が大きく開き、口縁端部は肥厚する。139は頸部が強く外反し、口縁部が短く立ち上がる。8世紀後半と思われる。140は口縁部が強く外反した後、屈曲して立ち上がる。美濃須衛IV-3期と思われる。141は胴部片で、外面の敲き目を部分的に撫で消す。142は壺の胴

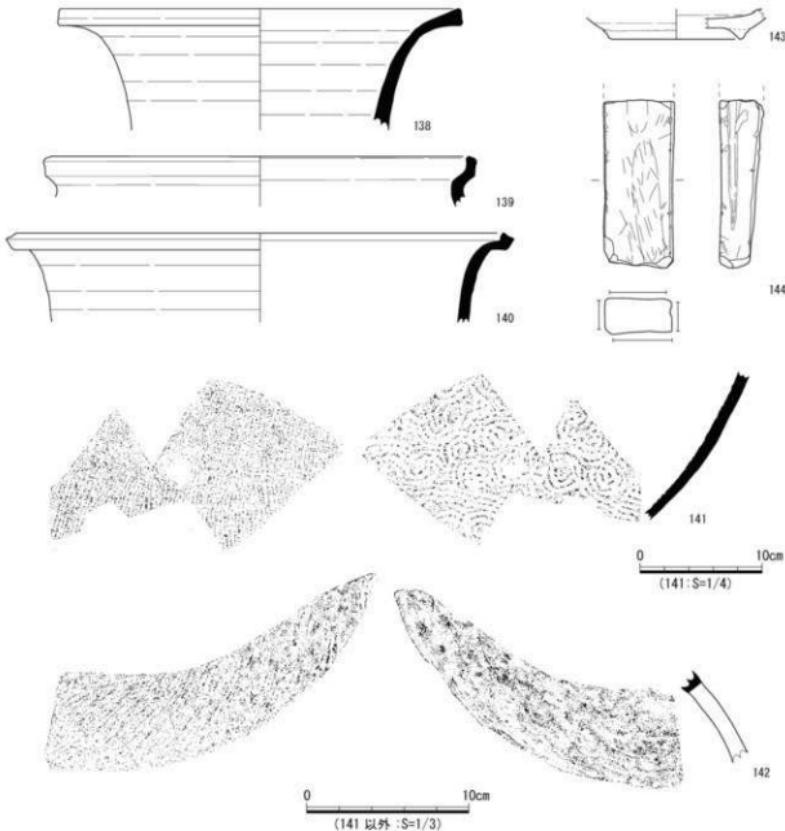


図35 包含層等出土遺物（7）

部片と思われるが、土器片の上部と側面に透かしを開けたような平滑な面を持ち、内面は当て具痕を刷毛目状の工具により撫で消す。類例不明で、異なる器種の可能性がある。

(3) 山茶碗

143は山茶碗の底部片で、12世紀頃のものと思われる。

(4) 石器類

144は手持ち砥石で、使用面が4面確認できる。

注

1) 精良な胎土で、暗文やミガキなど丁寧な調整を行い、赤褐色に焼成した土師器のことである。畿内や他の地域から搬入されたのか、在地で生産されたものか判別できないため便宜的に「畿内系土師器」とした。

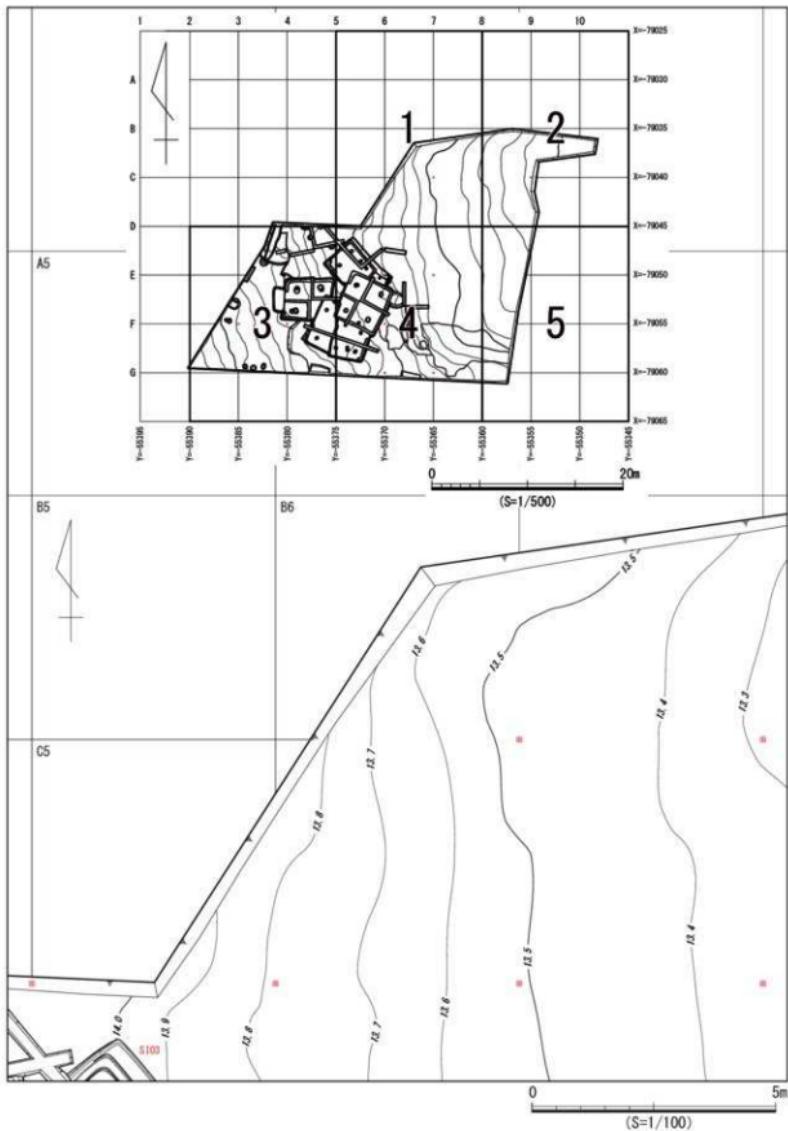


図36 遺構全体図分割図（1）

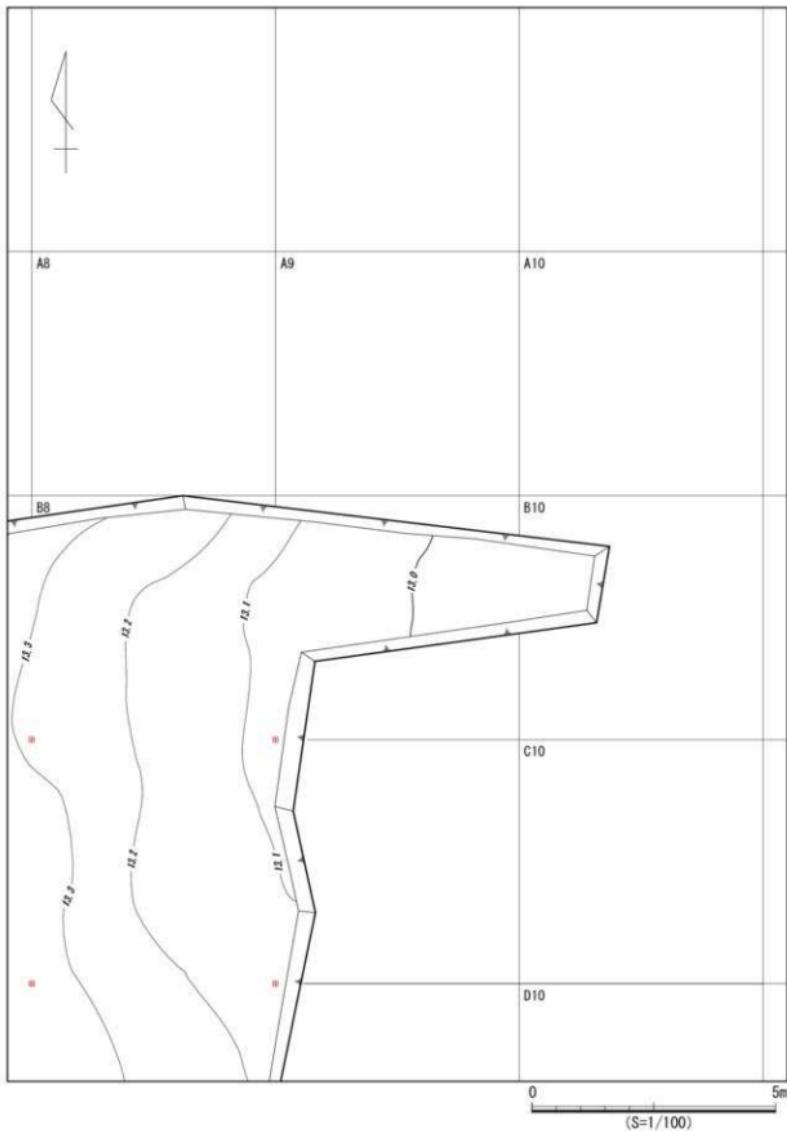


図37 遺構全体図分割図（2）

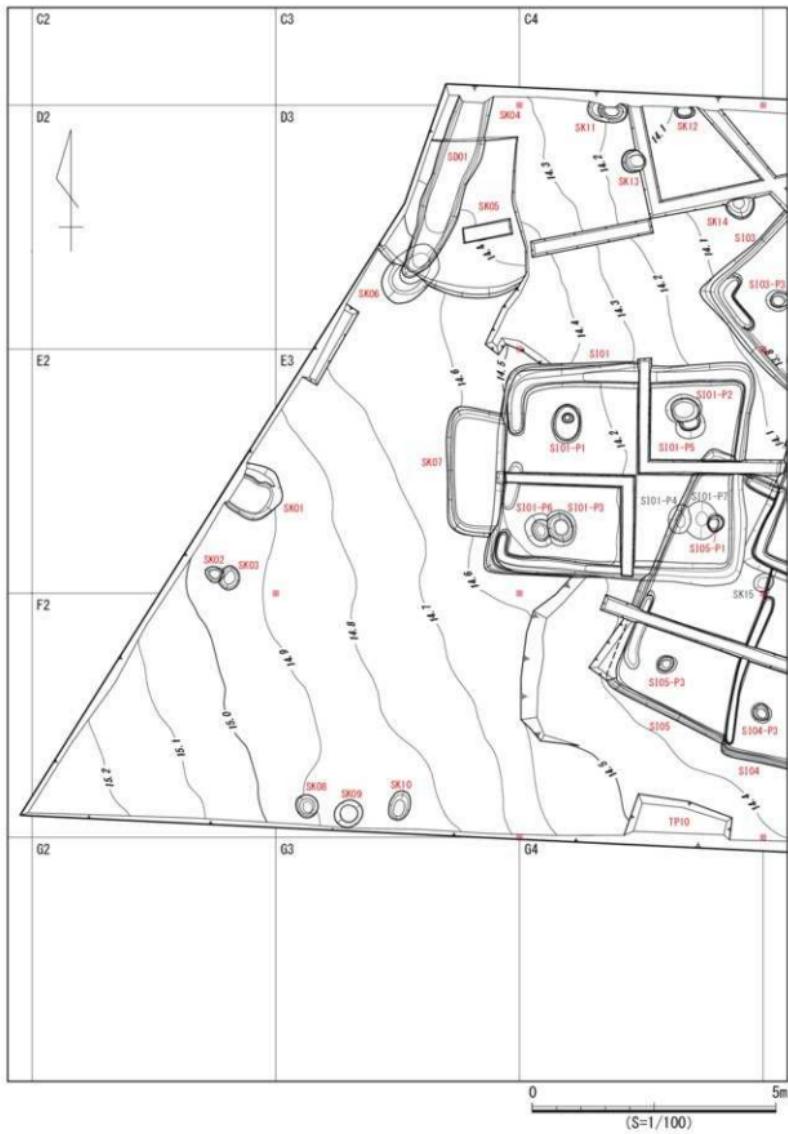


図38 遺構全体図分割図（3）

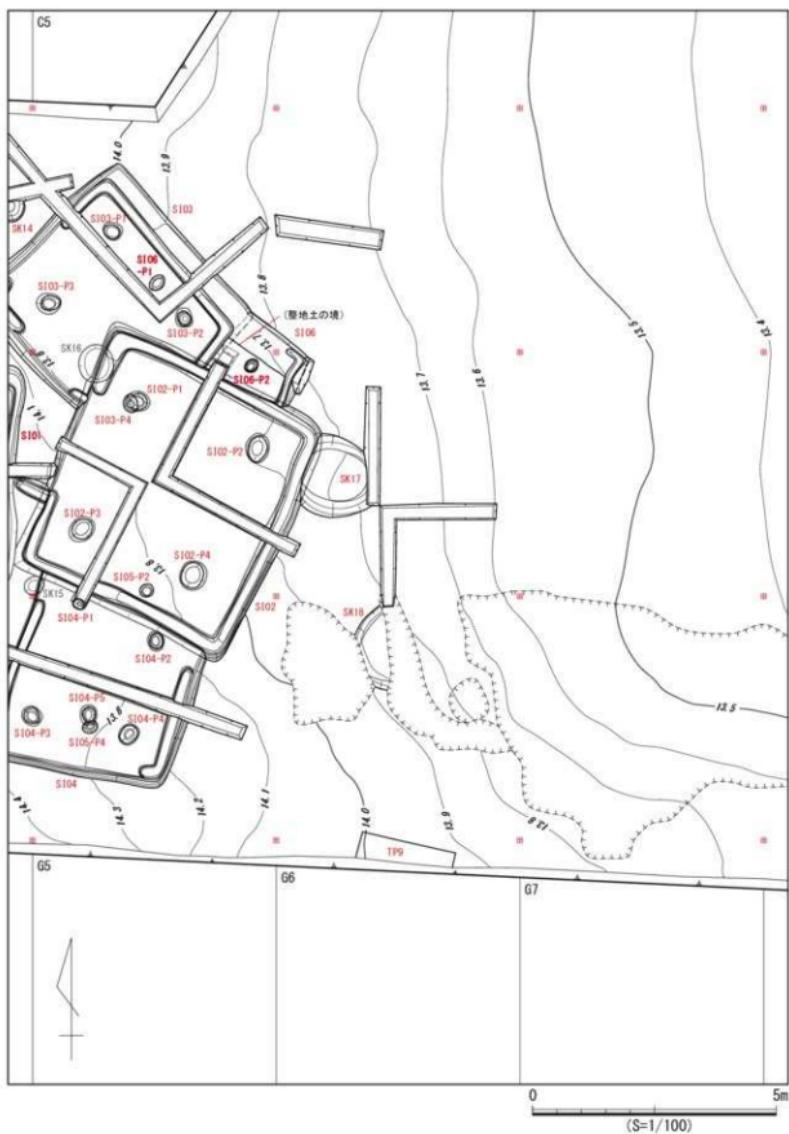


図39 遺構全体図分割図（4）

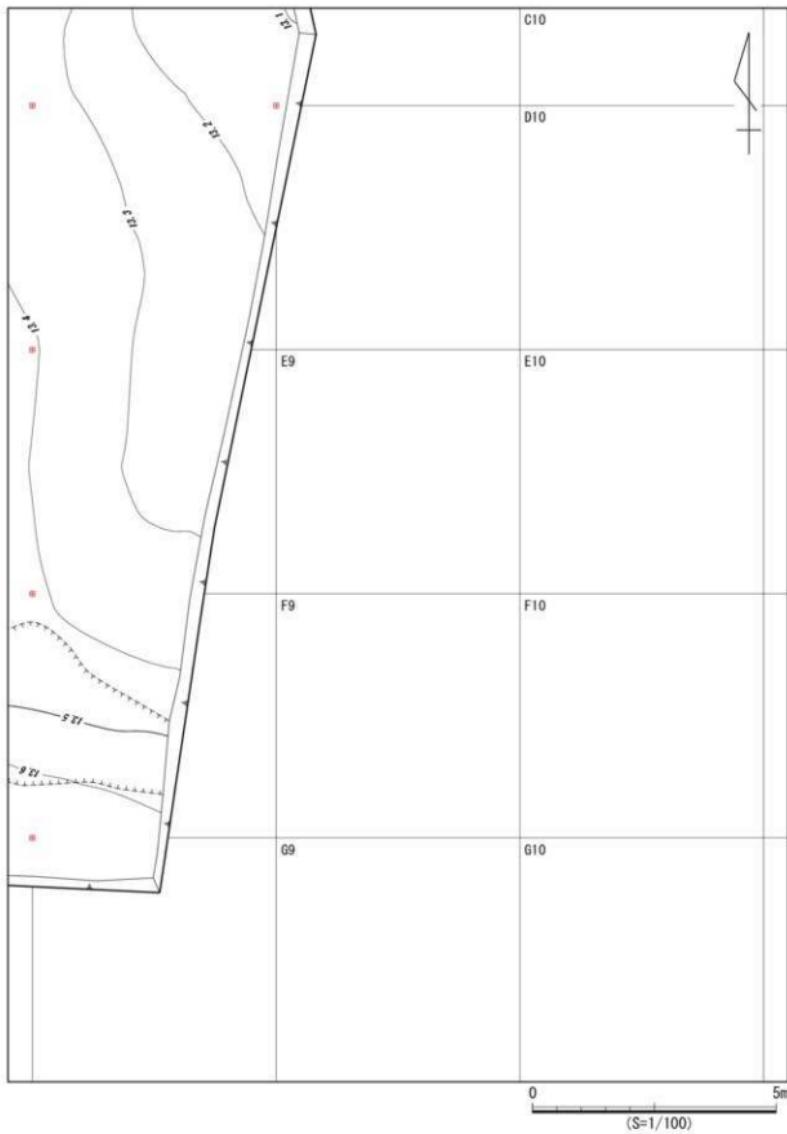


図40 遺構全体図分割図（5）

表5 積穴建物一覧

遺構番号	現場遺構番号	調査番号	平面形状	上端長軸長	上端短軸長	下端長軸長	下端短軸長	深さ	断面形状	埋土	長軸方位	重複関係 新>●○古	出土遺物	時代	種別	図版
S101	S010	E3-4	3	5.1	4.47	4.86	4.2	0.25	b	2層 B	N80° W	>S102, S105, SK07	H, P	古代	10-11	2-3
S102	S023	D5, E4-6, F5	3	5.4	5	5	4.7	0.35	a	3層 B	N23° E	S101, SK16< S103, S104, S105, S106, SK17	H, P	古代	12-13	3
S103	S049	D4-E5	3	4.5	4.12	4.14	3.86	0.325	b	2層 B	N41° W	S102, SK16> S106	H, P	古代	16	4
S104	S042	E5, F4-5	3	3.94	(3.80)	3.62	(3.72)	0.4	b	2層 B	N12° E	S102, SK15> S105	H, P	古代	18	4
S105	S050	E4-F5	4	5.38	(2.48)	5.25	(2.30)	0.4	b	2層 B	N70° W	S101, S102, S104, SK15>	H	古代	20-21	4
S106	S051	D6-E6	6	(3.80)	(1.42)	(3.70)	(1.34)	0.15	d	1層 A	N46° W	S102, S103>	H	古代	22	4

表6 積穴建物柱穴等一覧

遺構番号	現場遺構番号	調査番号	平面形状	上端長軸長	上端短軸長	下端長軸長	下端短軸長	深さ	断面形状	埋土	重複関係 新>●○古	出土遺物	時代	種別	図版
S101-P1	S026	E4	2	0.80	0.60	0.10	0.10	0.30	c	4層 D		無	古代	10-11	-
S101-P2	S029	E4	2	0.75	(0.57)	0.40	0.32	0.23	b	2層 C	S101-P5>	P	古代	10-11	-
S101-P3	S033	E4	1	0.72	(0.60)	0.30	0.26	0.34	b	2層 C	S101-P26>	無	古代	10-11	-
S101-P4	S031	E4	2	0.59	(0.45)	0.29	0.17	0.24	b	2層 C	S101-P7>	無	古代	10-11	-
S101-P5	S028	E4	1	0.61	0.60	0.35	0.32	0.13	b	2層 C	S101-P2>	無	古代	10-11	-
S101-P6	S032	E4	1	0.69	0.60	0.34	0.25	0.23	b	2層 C	>S101-P3	無	古代	10-11	-
S101-P7	S030	E4	1	0.77	0.72	0.30	0.25	0.17	a	2層 C	>S101-P4	無	古代	10-11	-
S102-P1	S045	E5	2	0.50	0.40	0.25	0.16	0.16	b	2層 C	>S103-P4	無	古代	12-13	-
S102-P2	S046	E5	2	0.60	0.50	0.30	0.23	0.16	a	2層 C		H	古代	12-13	-
S102-P3	S048	E5	2	0.57	0.45	0.30	0.23	0.14	b	2層 C		無	古代	12-13	-
S102-P4	S047	E5	1	0.60	0.54	0.35	0.30	0.16	b	2層 C		無	古代	12-13	-
S103-P1	S063	D5	1	0.40	0.35	0.25	0.20	0.12	b	1層 A		無	古代	16	-
S103-P2	S064	D5	1	0.40	0.34	0.21	0.20	0.20	b	2層 C		無	古代	16	-
S103-P3	S066	D5	1	0.50	0.43	0.25	0.20	0.17	b	2層 D		無	古代	16	-
S103-P4	S065	E5	6	0.38	(0.29)	0.15	0.15	0.10	a	1層 A	S102-P1>	無	古代	16	-
S104-P1	S053	F5	2	0.27	(0.21)	0.10	0.05	0.13	b	2層 C		無	古代	18	-
S104-P2	S054	F5	2	0.40	0.33	0.20	0.14	0.20	b	2層 C		H	古代	18	-
S104-P3	S056	F4-5	1	0.43	0.38	0.20	0.15	0.20	b	2層 C		無	古代	18	-
S104-P4	S055	F5	1	0.45	0.40	0.20	0.15	0.18	b	2層 B		無	古代	18	-
S104-P5	S060	F5	1	0.40	0.34	0.20	0.12	0.18	b	2層 C	>S105-P4	H	古代	18	-
S105-P1	S058	E4	1	0.37	0.35	0.22	0.20	0.06	b	1層 A		無	古代	20-21	-
S105-P2	S059	E5	1	0.28	0.28	0.16	0.16	0.04	b	1層 A		無	古代	20-21	-
S105-P3	S061	F4	2	0.44	0.35	0.17	0.16	0.20	b	2層 C		無	古代	20-21	-
S105-P4	S067	F5	2	0.31	(0.25)	0.13	0.10	0.13	a	1層 A	S104>	無	古代	20-21	-
S106-P1	S069	D5	2	0.39	0.27	0.22	0.15	0.15	b	2層 C		無	古代	22	-
S106-P2	S070	E5	2	0.31	0.25	0.15	0.12	0.16	b	2層 C		無	古代	22	-

表7 溝状造構一覧

造構番号	現場造構番号	調査番号	平面形状	上端長軸長	上端短軸長	下端長軸長	下端短軸長	深さ	断面形状	埋土	重複関係	出土遺物	時代	挿図	図版
SD01	SD022	C-D3	6	(3.86)	0.75	(3.74)	0.50	0.23	b	1層 A	SK04, SK05		H 古代	23	4

表8 土坑一覧

造構番号	現場造構番号	調査番号	平面形状	上端長軸長	上端短軸長	下端長軸長	下端短軸長	深さ	断面形状	埋土	重複関係	出土遺物	時代	挿図	図版	
SK01	S001	E2-3	6	1.13	(0.92)	(0.70)	0.63	0.18	a	2層 B			無	不明	23	-
SK02	S002	E2	2	0.40	0.33	0.21	0.17	0.14	b	1層 A	>SK03		無	不明	23	-
SK03	S003	E2	2	0.50	0.39	0.30	0.30	0.12	b	1層 A	SK02		無	不明	24	-
SK04	S018	C3-D4	6	(2.30)	1.25	(2.23)	0.85	0.70	d	1層 A	>SD01, SK05		無	不明	24	-
SK05	S021	D3-E4	6	(3.30)	(2.22)	(3.02)	(2.04)	0.23	d	2層 B	SK04, SK06>SD01		H 古代	25	-	
SK06	S009	D3	2	1.45	0.88	0.92	0.45	0.18	b	1層 A	>SD01, SK05		無	不明	25	-
SK07	S016	E3	6	2.60	(1.16)	2.20	(1.00)	0.22	b	1層 A	SI01		無	古代	26	4
SK08	S004	F3	1	0.49	0.45	0.32	0.29	0.14	b	1層 A			無	不明	26	-
SK09	S005	F3	1	0.62	0.53	0.38	0.36	0.12	b	1層 A			無	不明	26	-
SK10	S006	F3	2	0.62	0.43	0.35	0.20	0.17	b	1層 A			無	不明	26	-
SK11	S013	C-D4	2	0.83	(0.30)	0.32	(0.18)	0.42	a	2層 B			H 古代	27	4	
SK12	S014	C-D4	2	0.42	(0.20)	0.29	(0.15)	0.15	b	1層 A			H 古代	27	-	
SK13	S020	D4	1	(0.49)	0.47	0.34	0.25	0.25	b	1層 A			P 古代	27	-	
SK14	S019	D4	6	0.58	(0.42)	0.25	0.20	0.19	b	1層 A			H, P 古代	28	-	
SK15	S017	E4-E5	1	0.40	0.35	0.25	0.22	0.20	b	2層 C	>SI04, SI05		無	不明	28	-
SK16	S035	D-E5	1	0.79	0.73	0.62	0.52	0.07	b	2層 B	>SI02, SI03		H, P 古代	28	-	
SK17	S040	E6	2	(1.47)	1.66	(1.30)	1.05	0.21	a	2層 C	SI02		無	古代	28	-
SK18	S041	F6	6	(1.74)	(0.65)	(1.35)	(0.58)	0.25	b	2層 C			H 古代	28	-	

表9 出出土器観察表(1)

掲載 No.	整理 No.	種別	器種	地区 遺構	層位	口径 底径 器高	粘土	焼成	色調 (内面) (外面) (断面)	成形・調整 内面/外面	備考	掲 国 No.	出 版 No.
1	100	土師器	罐	SI01 壁面洗	I	18.0	やや粗(径2mm以下の長石、石英、チャート、雲母を含む)	良好	10YR7/3 10YR8/6 10YR7/3	ヨコハケ後指オサエ/摩滅	焼けたように暗化色	11	7
2	162	須恵器	有台 环	SI01	b	14.2	密(径1mm以下の長石、石英をわずかに含む)	良好	7.5YR6/2 2.5Y5/1 5B6/1	回転ナデ/回転ナデ、ナデ、貼付高台	旗投窯	11	7
3	98 94	須恵器	蓋	SI01 D6	b II	14.4	密(径1mm以下の長石、黒色粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/2	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ	外面部灰、美濃須衛窯	11	7
4	98	須恵器	蓋	SI01	b	15.6	密(径1mm以下の長石、石英、チャート、黒色粒を含む)	良好	2.5Y8/1 2.5Y8/1 2.5Y7/2	回転ナデ/回転ナデ	美濃須衛窯	11	7
5	140	土師器	环	SI02	a	-	密(径1mm以下の長石を含む)	良好	7.5YR6/6 7.5YR6/8 7.5YR6/8	摩滅/摩滅	畿内系土師器	13	7
6	152	土師器	甕	SI02	b	14.9	密(径1mm以下のチャート、雲母をわずかに含む)	普通	10YR7/3 10YR7/2 10YR8/3	斜めハケ後指オサエ、ハケ後ヨコナデ/指オサエ 後タテハケ、ヨコナデ		13	7
7	141	土師器	甕	SI02	a	-	密(径2mm以下の長石、石英を含む)	普通	10YR7/3 10YR7/3 10YR8/3	摩滅/摩滅		13	7
8	146	土師器	甕	SI02	a	25.2	密(径3mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	普通	7.5YR7/4 7.5YR7/6 7.5YR7/4	タテハケ、摩滅/斜めハケ、摩滅		13	7
9	176	土師器	甕	SI02	I	-	やや粗(径1mm以下の長石、石英、チャートを含む)	普通	7.5YR8/4 10YR8/4 10YR8/4	摩滅/摩滅		13	7
10	142	土師器	甕	SI02	a	19.4	やや粗(長石、石英、チャートを含む)	普通	10YR7/4 10YR7/4 10YR7/4	摩滅/摩滅		13	7
11	152	土師器	甕	SI02	b	26.8	やや粗(径1mm以下の長石、石英を多く含む)	普通	10YR7/3 10YR7/4 10YR7/4	ナデ/ナデ		13	7
12	182	土師器	製塩 土器	SI02	I	-	やや粗(径1mm以下のチャートを多く含む)	普通	2.5YR6/3 2.5YR8/8 2.5YR6/6	ナデ/ナデ	二次的被熱	13	7
13	177	須恵器	無台 环	SI02	I	12.6	密(径1mm以下の長石、チャートをわずかに含む)	不良	2.5Y8/3 2.5Y8/1 2.5Y8/1	回転ナデ/回転ナデ	美濃須衛窯	14	7
14	179	須恵器	無台 环	SI02	I	12.4	密(径1mm以下の長石、石英をわずかに含む)	良好	N6/1 N6/1 7.5Y6/1	回転ナデ/回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ	旗投窯か	14	7
15	147	須恵器	有台 环	SI02	a	17.4	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	普通	S7/1 S7/1 S7/1	回転ナデ/回転ナデ	美濃須衛窯	14	-
16	153 66	須恵器	有台 环	SI02 E5	b II	16.6	密(径1mm以下の長石、石英をわずかに含む)	良好	10YR6/3 * 7.5YR6/1 7.5Y5/1 2.5Y6/2	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ	旗投窯	14	7
17	179	須恵器	有台 环	SI02	I	19.7	密(径5mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ	内面や摩滅、美濃須衛窯	14	7
18	147	須恵器	蓋	SI02	a	15.9	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	N7/1 S7/1 N7/1	回転ナデ/回転ナデ	外面部灰、美濃須衛窯	14	7
19	156	須恵器	無台 盤	SI02	b	15.2	密(径1mm以下の長石、石英を含む)	良好	5YR6/2 5Y6/1 5Y5/1	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ	旗投窯	14	7
20	177	須恵器	高盤	SI02	I	17.8	密(径1mm以下の長石、石英、チャートをわずかに含む)	良好	5Y8/1 5Y7/1 5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ	外面部灰、美濃須衛窯	14	7
21	177	須恵器	鉢	SI02	I	-	密(径1mm以下の長石、チャートをわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 5Y7/1 2.5Y8/3	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ	美濃須衛窯	14	-
22	9 56 105 116	須恵器	大型 浅鉢	SI02 E5 E5 F6 E7	I I II II I	30.4	密(径6mm以下の長石、石英、チャートを含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ/回転ナデ	38と同一個体、美濃須衛窯	14	7

表10 出土土器觀察表（2）

掲載 No.	監理 No.	種別	器種	地区 構造	層位	口径 底径 器高	粘土	後成	色調 (内面) (外面) (断面)		成形・調整 内面/外面	備考	掲 版 No.	図 版 No.
									内面	外側				
23	177 125 56 66 94 218	須恵器	甕	S102 S102 E5 E5 D6 -	I II -	27.0	密(径4mm以下の長石、石英、チャートを含む)	良好	N5/ N5/ 7.5V6/1	回転ナデ、接合時ヨコナ デ、タタキ(平滑な当て 具)、平行タタキ、瘤状 工具による砥位沈線、頸 位沈線4条、回転ナゲ	施設窯か	15	5	
24	143	須恵器	甕	S102	a	23.2	密(径2mm以下の長石、石英、 チャートを含む)	良好	SV5/1 5V4/1 N4/	回転ナデ/回転ナデ	内面降灰、損投票	15	7	
25	180 46	須恵器	甕	S102 E4	I II	-	密(径4mm以下の長石、 チャートを含む)	良好	2.5V7/1 2.5V6/1 5V7/1	当て具痕を撫で消す/平 行タタキ	美濃須衛窯	15	-	
26	143 48 70	須恵器	甕	S102 F4 E5	a II II	-	密(径4mm以下の長石、石英 をわずかに含む)	良好	2.5V6/1 2.5V6/1 2.5V7/1	当て具痕をナデ消す/平 行タタキ	美濃須衛窯	15	-	
27	205	土師器	把手	S103	I	-	やや粗(径5mm以下の長石、 石英、チャートを多く含む)	普通	7.5V7/6 10V8/7 10V8/6	指オサエ、指オサエ後ナ デ/指オサエ		17	8	
28	191	須恵器	無台 坏	S103	b	6.6	密(径1mm以下の長石をわず かに含む)	不良	N7/ N7/ N7/	回転ナデ/回転ナデ、ハ ラ切り未調整	美濃須衛窯	17	8	
29	206	須恵器	有台 坏	S103	I	22.0	密(径2mm以下の長石を含 む)	良好	2.5V7/1 2.5V7/1 2.5V7/2	回転ナデ/回転ナデ	美濃須衛窯	17	8	
30	195	須恵器	平瓶	S103	a	8.6	密(径2mm以下の長石、 チャートを含む)	良好	N5/ N5/ 7.5V7/1	回転ナデ/回転ナデ	美濃須衛窯	17	8	
31	196	土師器	坏	S104	I	-	密(径1mm以下の砂粒を含 む)	良好	2.5V8/8 2.5V8/8 2.5V8/4	摩滅/摩滅	畿内系土師器	19	8	
32	204	土師器	甕	S104	I	7.8	やや粗(径1mm以下の長石、 石英、チャート、雲母を多く 含む)	普通	10V8/7 10V8/6 10V8/4	指オサエ、ナデ/ナデ		19	8	
33	197 46 68	須恵器	無台 坏	S104 E4 D6	I II III	11.8 6.8 3.6	密(径3mm以下長石、黒色粒 をわずかに含む)	良好	5V7/1 5V7/1 2.5V8/3	回転ナデ/回転ナデ、底 部へラ切り未調整	美濃須衛窯	19	5	
34	194	須恵器	無台 坏	S104	I	15.4	密(径1mm以下の長石をわざ かに含む)	普通	5V7/1 5V7/1 2.5V8/2	回転ナデ/回転ナデ	美濃須衛窯	19	8	
35	197 56	須恵器	蓋	S104 E5	I II	16.0 4.0	密(径1mm以下の長石、石英 をわずかに含む)	普通	2.5V7/1 5V7/1 5V8/	回転ナデ/回転ナデ、回 転ヘラケズリ	内面ヘラ記号、 美濃須衛窯	19	5	
36	197	須恵器	蓋	S104	I	15.0	密(径1mm以下の長石、黒色 粒をわずかに含む)	良好	2.5V7/3 5V7/1 2.5V8/1	回転ナデ/回転ナデ、回 転ヘラケズリ	美濃須衛窯	19	8	
37	167 173	須恵器	蓋	S104 b c	- -	16.7	密(径5mm以下の長石、石英、 チャートをわざかに含む)	良好	2.5V6/1 2.5V6/1 2.5V7/1	回転ナデ/回転ナデ	外側降灰、損投票	19	8	
38	197 84	須恵器	大型 浅鉢	S104 F5	I II	24.9	やや粗(径5mm以下の長石、 チャート、黒色粒を含む)	良好	2.5V7/1 2.5V7/1 2.5V7/2	回転ナデ、不定方向のナ デ/回転ナデ、回転ヘラ ケズリ、底部に板目痕、 ナデ	22と同一個体、 美濃須衛窯	19	5	
39	153 194 5 56 66	須恵器	横瓶	S102 S104 I I E5 E5	b I I II II	-	密(径5mm以下の長石、石英、 チャート、黒色粒を含む)	良好	2.5V6/2 5V4/3 2.5V8/2	ナデ/平行タタキ	外側降灰	19	8	
40	183	土師器	坏	S105	a	-	密(径1mm以下のチャートを 多く含む)	良好	5V8/8 5V8/8 5V8/8	摩滅/摩滅	畿内系土師器	21	8	
41	212	須恵器	無台 坏	S105	I	5.0	密(径5mm以下の石英、 チャートを含む)	不良	10V8/2 10V8/2 10V8/2	回転ナデ/回転ナデ、底 部へラ切り後未調整		21	8	
42	157	土師器	甕	S001	a	-	やや粗(径2mm以下の長石、 石英、チャートを多く含む)	普通	5V7/6 7.5V7/4 7.5V8/4	ヨコナデ/ヨコナデ、沈 痕		23	8	
43	78	土師器	甕	SK11	d	-	やや粗(径5mm以下の長石、 石英、チャートを多く含む)	普通	10V8/6 10V8/7 10V8/4	ヨコナデ/ヨコナデ		27	8	

表11 出土土器観察表(3)

出 土 器 物 名 称 No.	整理 No.	種別	器種	地区 遺構	層位	口径 底径 器高	胎土	焼 成	色調	成形・調整 (内面) (外面)	備考	排 出 國 名 称 No.
									(内面) (外面)			
44	55	土師器	环	E5	II	16.0 — —	密(径1mm以下の砂粒をわずかに含む)	良好	2. SYR5/8 2. SYR5/8 2. SYR5/8	摩誠、沈羅/摩誠	畿内系土師器	29 8
45	49	土師器	环	D4	II	18.6 — —	密(径1mm以下の長石、石英、雲母を含む)	良好	SYR6/8 SYR6/8 SYR6/8	摩誠、暗文/摩誠	畿内系土師器	29 8
46	95	土師器	三	E6	II	18.9 15.2 2.9	密(径1mm以下の砂粒を含む)	良好	SYS/8 SYS/8 SYS/6	摩誠/摩誠	畿内系土師器	29 8
47	63	土師器	鉢	B5	II	6.6 — —	粗(径2mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	普通	10YR8/2 10YR8/3 10YR8/3	指オサエ/摩誠		29 8
48	63	土師器	鉢	B5	II	6.5 — —	密(径1mm以下の長石、石英をわずかに含む)	普通	10YR8/4 10YR7/6 10YR8/3	摩誠/摩誠		29 —
49	45	土師器	甕	E4	II	25.0 — —	やや粗(径1mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	普通	10YR8/3 10YR8/6 10YR8/3	ヨコハケ、ヨコナデ/タテハケ、ヨコナデ		29 8
50	51	土師器	甕	D6	II	28.0 — —	密(径2mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	良好	7. SYR6/6 7. SYR7/6 7. SYR7/6	ヨコナデ/ヨコナデ		29 —
51	63	土師器	甕	B5	II	26.8 — —	密(径3mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	普通	10YR8/4 10YR8/4 10YR8/4	ヨコハケ、摩誠/斜めハケ、摩誠		29 8
52	67	土師器	甕	B5	II	23.1 — —	やや粗(径6mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	普通	10YR8/4 10YR8/6 10YR8/4	ヨコナデ/ヨコナデ		29 —
53	45	土師器	甕	E4	II	17.6 — —	やや粗(径2mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	普通	7. SYR6/6 7. SYR7/6 7. SYR7/6	摩誠/摩誠		29 —
54	93	土師器	甕	D6	II	20.2 — —	粗(径3mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	良好	10YR8/4 10YR7/4 10YR7/3	ヨコナデ、摩誠/ヨコナデ、タテハケ		29 —
55	33	土師器	甕	D4	II	27.0 — —	密(径2mm以下の長石、石英、チャート、雲母を多く含む)	普通	10YR8/4 10YR8/4 10YR8/4	ヨコナデ、指オサエ/ヨコナデ、指オサエ		29 —
56	45	土師器	甕	E4	II	15.2 — —	粗(径4mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	普通	7. SYR7/6 10YR7/4 7. SYR7/6	摩誠/摩誠		29 —
57	43	土師器	甕	D4	II	20.0 — —	密(径2mm以下の長石、石英、チャート、雲母を多く含む)	普通	10YR8/4 10YR7/3 10YR7/3	粗いハケ/ヨコナデ		29 8
58	217	土師器	甕	C4	II	5.3 — —	密(径5mm以下の長石、チャート、雲母を含む)	良好	10YR6/4 7. SYR4/1 10YR7/2	ナデ/粗いハケ、ナデ	外面煤付有	29 5
59	67	土師器	鉢	B5	II	14.3 — —	密(径2mm以下の長石、石英、チャート、雲母を多く含む)	良好	10YR5/— 10YR7/6 10YR8/4	ヨコナデ/摩誠		29 —
60	39	土師器	鉢	D4	II	25.2 — —	密(径5mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	不良	10YR8/4 10YR8/4 10YR8/4	摩誠/摩誠		30 —
61	95	土師器	瓶	E6	II	12.8 — —	密(径7mm以下の長石、石英、チャート、雲母を多く含む)	普通	7. SYT7/4 7. SYT7/3 10YR7/3	ヨコハケ、ナデ/タテハケ、ヨコハケ、ナデ	底部穿孔	30 —
62	63	土師器	把手	B5	II	— — —	密(径3mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	普通	7. SYR8/4 7. SYR7/6 SYR7/6	指オサエ/指オサエ		30 —
63	43	土師器	把手	B4	II	— — —	やや粗(径1mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒を多く含む)	普通	7. SYR8/3 7. SYR8/4 7. SYR8/4	指オサエ/指オサエ		30 —
64	39	土師器	把手	D4	II	— — —	密(径3mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	良好	10YR8/4 7. SYR8/6 7. SYR8/6	指オサエ、ナデ/指オサエ、ナデ、ハケ		30 —
65	4	土師器	蓋	—	I	— — —	密(径2mm以下の長石、雲母を含む)	良好	— 10YR6/3 10YR6/3	/ナデ	放射状の刺突列、掘み部	30 5
66	114	土師器	製度土器	C5	II	9.9 — —	やや粗(径3mm以下の長石、チャートを多く含む)	良好	SYR8/8 SYR7/6 SYR7/8	指オサエ、ナデ/指オサエ、ナデ	二次的な被熱	30 8

表12 出土土器觀察表（4）

地 點 No.	整理 No.	種別	器種	地区 造構	層位	口径 底径 高さ	胎土	燒 成	色調	成形・調整 内面/外面	備考	排 出 No.	回 収 No.
									(内面) (外面) (断面)				
67	76	土師器	製塙土器	D6	II	-	やや粗(径3mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	普通	-	摩滅	二次的な被熱、短多・涅美式	30	8
68	43	土師器	製塙土器	D4	II	-	やや粗(径1mm以下の長石、石英をわずかに含む)	普通	SYR5/8 SYR5/8 10VRS/1	/摩滅	二次的な被熱、短多・涅美式	30	-
69	39	土師器	コナフ土器	D4	II	5.4	密(径1mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	普通	10VRS/8 10VRS/4 10VRS/1	ヨコナフ、指サエ/ヨコナフ、指サエ	製塙土器か	30	8
70	96	須恵器	無台坏	E6	II	12.5 8.0 4.2	密(径1mm以下の長石、石英をわずかに含む)	普通	2.5SY/2 2.5SY/2 2.5SY/2	回転ナデ/回転ナデ/底部ヘラ切り後ナデ		31	5
71	68	須恵器	無台坏	D5	II	11.2	密(径1mm以下の長石、黒色粒を含む)	良好	2.5SY/2 2.5SY/2 2.5SY/2	回転ナデ/回転ヘラケズリ	外面ヘラ記号、尾北窓	31	6
72	23	須恵器	無台坏	D4	II	13.2	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	SYT/1 SYT/1 SYT/1	回転ナデ/回転ナデ	猿投窓か	31	8
73	77	須恵器	無台坏	D6	II	7.2	密(径2mm以下の長石、チャートを含む)	良好	2.5SY/2 SYV/1 SYV/1 SYV/1	回転ナデ/回転ナデ/底部ヘラ切り後ナデ	周囲を意図的に敲打、美濃須衛窓	31	-
74	44	須恵器	無台坏	D4	II	6.8	密(径6mm以下の長石、チャートを含む)	普通	2.5SY/1 2.5SY/1 2.5SY/1	回転ナデ/回転ナデ/底部ヘラ切り後ナデ	内面平滑、美濃須衛窓	31	-
75	46	須恵器	無台坏	E4	II	6.6	密(径3mm以下の長石、チャートを含む)	良好	SYT/1 SYT/1 SYT/1	回転ナデ/回転ナデ/底部ヘラ切り後ナデ		31	-
76	60	須恵器	無台坏	D5	I b	6.8	密(径1mm以下の長石を含む)	良好	SYV/1 SYV/1 SYV/1 SYV/1	回転ナデ/回転ナデ/底部ヘラ切り後ナデ	内外面粗糲、内面ヘラ記号、美濃須衛窓	31	-
77	70	須恵器	無台坏	E5	II	6.6	密(径5mm以下の長石、チャートをわずかに含む)	普通	SYV/1 SYV/1 SYV/1 2.5SY/2	回転ナデ/回転ナデ/底部ヘラ切り未調整	美濃須衛窓	31	-
78	29	須恵器	無台坏	E4	II	13.0	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	SYT/1 SYT/1 SYV/1	回転ナデ/回転ナデ		31	-
79	50	須恵器	無台坏	D4	II	11.4 6.0 3.4	密(径1mm以下の長石、チャートをわずかに含む)	良好	SYV/1 SYV/1 SYT/1	回転ナデ/回転ナデ/ナデ	内外面平滑、美濃須衛窓	31	8
80	46	須恵器	無台坏	E4	II	-	密(径2mm以下の長石、黒色粒をわずかに含む)	不良	2.5SY/2 2.5SY/2 2.5SY/2	回転ナデ/回転ナデ/底部ヘラ切り後ナデ	外面ヘラ記号、猿投窓	31	6
81	40	須恵器	無台坏	D4	II	7.4	密(径3mm以下の長石をわずかに含む)	良好	7.5SY/1 7.5SY/1 7.5SY/1	回転ナデ/回転ナデ/底部ヘラ切り後ナデ	外面ヘラ記号、美濃須衛窓	31	8
82	23	須恵器	無台坏	D4	II	7.0	密(径1mm以下の長石、チャートを含む)	不良	2.5SY/3 2.5SY/3 SYV/1	回転ナデ/回転ナデ/底部ヘラ切り後ナデ	外面ヘラ記号、内面平滑、美濃須衛窓	31	-
83	60	須恵器	無台坏	I b	-	密(径2mm以下の長石、石英、チャートをわずかに含む)	不良	10VRT/4 7.5SY/6 10VRT/7	回転ナデ/回転ナデ/底部ヘラ切り後ナデ、板目状の跡跡	周囲を意図的に敲打	31	8	
84	3	須恵器	有台坏	-	I II	11.4	密(径1mm以下の長石、黒色粒をわずかに含む)	良好	SYT/1 SYT/2 SYT/2	回転ナデ/回転ナデ、貼付高台	美濃須衛窓	31	-
85	56	須恵器	有台坏	E5	II	15.6 12.4 3.8	密(径5mm以下の長石、チャートを含む)	良好	SYV/1 SYV/1 SYV/1	回転ナデ/回転ナデ、貼付高台		31	8
86	52	須恵器	有台坏	D5	II	14.0 10.6 4.2	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5SY/1 2.5SY/1 2.5SY/3	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	美濃須衛窓	31	8
87	34	須恵器	有台坏	D4	II	14.4 12.0 3.5	密(径3mm以下の長石、石英、チャートを多く含む)	良好	SYT/1 SYV/1 SYV/1	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	美濃須衛窓	31	6
88	40	須恵器	有台坏	D4	II	11.7	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	SYT/1 SYT/1 SYT/1	回転ナデ/ナデ/回転ナデ、底部静止ヘラケズリ、貼付高台	外面ヘラ記号、美濃須衛窓	31	-
89	52	須恵器	有台坏	D5	II	-	密(径2mm以下の長石を含む)	良好	2.5SY/1 2.5SY/1 2.5SY/1	回転ナデ/ナデ/回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼付高台	美濃須衛窓	31	6
90	64	須恵器	有台坏	-	-	9.6	-	-	-	-	-	31	-

表13 出土土器観察表(5)

掲載 No.	整理 No.	種別	器種	地区 遺構	層位	口径 底径 器高	胎土	焼成	色調	成形・調整 (内面) (外面)	備考	邦 国 No.	図 版 No.
									(内面) (外面)				
90	52	須恵器	有台 环	D5	II	12.8	密(径1mm以下の長石、チャートをわずかに含む)	良好	2.5Y7/2 2.5Y7/1 5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	美濃須衛窯	31	-
91	56	須恵器	有台 环	E5	II	10.0	密(径3mm以下のチャートをわずかに含む)	普通	2.5Y7/2 2.5Y7/1 5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	美濃須衛窯	31	-
92	46	須恵器	有台 环	E4	II	11.9	密(径2mm以下の長石、チャートをわずかに含む)	良好	2.5Y7/2 2.5Y7/1 5Y7/3	回転ナデ/回転ナデ、底部一から後ナデ、貼付高台	内面平滑、美濃須衛窯	31	-
93	77	須恵器	有台 环	B5	II	12.8	密(径2mm以下の長石、チャートを含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/2 5Y7/2	回転ナデ/回転ナデ、底部一から後ナデ、貼付高台	美濃須衛窯	31	8
94	21	須恵器	有台 环	D3	II	10.0	密(径5mm以下の長石、チャートを多く含む)	良好	10Y86/2 10Y85/2 10Y86/2	回転ナデ/回転ナデ、貼付高台	猿投窯	31	8
95	68	須恵器	有台 环	D5	II	13.7	密(径2mm以下の長石、石英をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y6/1 5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	美濃須衛窯	31	5
96	46	須恵器	有台 环	E4	II	8.8	密(径1mm以下の長石、石英を含む)	良好	N6/ NS/5 5Y5/1	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	内面重ね焼き、猿投窯	31	8
96	56	須恵器	有台 环	E5	II	4.4	密(径2mm以下の長石、石英を含む)	良好	N6/ NS/5 5Y5/1	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	内面重ね焼き、猿投窯	31	8
97	23	須恵器	有台 环	D4	II	8.6	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y7/2 2.5Y7/1 2.5Y6/1	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ	外面部灰、美濃須衛窯	32	-
97	110	須恵器	蓋	F6	II	14.8	密(径2mm以下の長石、チャートをわずかに含む)	良好	2.5Y7/2 2.5Y7/1 2.5Y6/1	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ	外面部灰、美濃須衛窯	32	-
98	77	須恵器	蓋	D5	II	15.0	密(径3mm以下の長石を含む)	良好	NS/ 5Y7/1 5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ	美濃須衛窯	32	-
99	44	須恵器	蓋	D4	II	22.3	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y8/2 2.5Y8/2	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ	外面部灰、美濃須衛窯	32	-
100	52	須恵器	蓋	D5	II	14.2	密(径2mm以下の長石、黒色の段をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 NS/6	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ	外面部灰、美濃須衛窯	32	8
101	55	須恵器	蓋	E5	II	14.0	やや粗(径3mm以下の長石、チャートを含む)	良好	7.5Y86/3 5Y85/3 2.5Y85/6	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ	猿投窯	32	8
101	56	須恵器	蓋	E5	II	14.0	やや粗(径3mm以下の長石、チャートを含む)	良好	7.5Y86/3 5Y85/3 2.5Y85/6	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ	猿投窯	32	8
102	64	須恵器	蓋	D5	II	16.6	密(径2mm以下の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/2	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ		32	-
103	46	須恵器	蓋	E4	II	19.6	密(径3mm以下の長石、チャートを含む)	良好	7.5Y85/1 7.5Y85/1 7.5Y85/1	回転ナデ/回転ナデ	外面部灰、猿投窯	32	-
104	3	須恵器	蓋	C4	I	-	密(径2mm以下の長石、石英、チャートを含む)	良好	5Y6/1 5Y6/1 5Y7/1	回転ナデ、木口状工具によるナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ	美濃須衛窯	32	-
105	52	須恵器	蓋	D5	II	5.3	密(径1mm以下の長石をわずかに含む)	不良	2.5Y8/2 2.5Y7/2 2.5Y8/2	回転ナデ/回転ヘラケズリ	金属器写し、美濃須衛窯	32	8
106	46	須恵器	蓋	E4	II	-	密(径2mm以下の長石、チャート、雲母を含む)	良好	2.5Y7/2 2.5Y7/1 10Y87/2	回転ナデ/回転ヘラケズリ、沈線彫	金属器写し	32	8
107	62	須恵器	範	D5	II	9.6	密(径2mm以下の長石を含む)	良好	N7/ NS/ 5Y6/1	回転ナデ/回転ナデ、底部系切後回転ヘラケズリ、比輪条	外面部記号、金属器写し	32	8
108	64	須恵器	範	B5	II	10.6	密(径2mm以下の長石を含む)	良好	5Y6/1 2.5Y6/2 2.5Y7/2	回転ナデ/回転ナデ		32	-
109	68	須恵器	範	D5	II	19.4	密(径2mm以下の長石、チャートをわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/2 2.5Y7/2	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ		32	-
110	56	須恵器	有台 盤	E5	II	20.8	密(径2mm以下の長石を含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ/回転ヘラケズリ、回転ナデ、貼付高台	美濃須衛窯	32	8
44	52	須恵器	有台 盤	D4	II	20.1	密(径2mm以下の長石、チャートを含む)	良好	2.5Y7/2 2.5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ/回転ナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	内面部灰、美濃須衛窯	32	6
62	64	須恵器	有台 盤	D5	II	13.4							
66	68	須恵器	有台 盤	D5	II	2.5							

表14 出土土器觀察表（6）

掲載 No.	整理 No.	種別	器種	地区 遺構	層位	口径 底径 器高	施土	焼成	色調	成形・調整 (内面) (外面)	備考	掲 版 No.
									(内面) (断面)			
112 21 38	頸	直筒 盤	B3 F4	II	- 12.6 -	密(径3mm以下)の長石。 チャート、黒色粒をわずかに含む	普通	2,577/2 577/2 578/1	回転ナデ/回転ナデ、回 転ヘラケズリ、ナデ	内面や平滑。 美濃須衛窯	32	6
113 41	頸	直筒 盤	F4	II	- 14.2 -	密(径4mm以下)の長石。 チャートを含む	良好	2,577/2 577/1 2,577/1	回転ナデ、ナデ/回転ナ デ	台部3方向に十 字の透かし、美 濃須衛窯	32	6
114 56	頸	直筒 器	E5	II	- -	密(径2mm以下)の長石を含 む	良好	2,577/1 577/1 2,577/2	回転ナデ/回転ナデ。	脚部、3方向に 方形の透かし、 美濃須衛窯	32	8
115 70	頸	鉢	E5	II	21.2 -	密(径2mm以下)の長石、黑色 粒を含む	良好	575/1 575/1 576/1	回転ナデ。当て具痕ナデ 消す/回転ナデ、タタキ 後ナデ		33	-
116 77	頸	鉢	D5	II	19.2 -	やや粗(径2mm以下)の長石。 石英を含む	普通	N6/ NS/ N7/	回転ナデ/回転ナデ、同 転ヘラケズリ、浅い沈線 2条		33	8
117 62	頸	長頸 壺	B5	II	9.8 -	密(径5mm以下)の長石、石英、 黒色粒をわずかに含む	良好	2,577/2 577/1 2,575/1	回転ナデ/回転ナデ、回 転ヘラケズリ、貼付高台	底部外面に付着 物あり、美濃須 衛窯	33	7
118 218	頸	長頸 壺	-	排水	- -	密(径1mm以下)の長石。 チャートをわずかに含む	良好	1077/3 1078/3 2,577/3	回転ナデ/回転ナデ。 木口は工具による不定 方向の擦痕、沈線2条	外面降灰	33	8
119 44	頸	平瓶	D4	II	21.8 -	やや粗(径1mm以下)の長石。 チャートをわずかに含む	良好	2,577/1 2,577/1 2,577/1	回転ナデ/回転ナデ	外面降灰、美濃 須衛窯	33	-
120 94	頸	平瓶	D6	II	13.8 -	密(径1mm以下)の長石をわず かに含む	良好	2,578/1 2,576/1 1077/2	回転ナデ/回転ヘラケズ リ、回転ヘラケズリ後ナ デ	猿投窓	33	-
121 66	頸	短頸 壺	E5	II	9.0 -	密(径1mm以下)の長石、石英。 チャートを含む	良好	2,577/1 2,577/2 2,578/2	回転ナデ/回転ナデ	122と同一個体、 外面降灰、美濃須 衛窯	33	6
122 44	頸	短頸 壺	D4	II	- -	密(径1mm以下)の長石、黑色 粒をわずかに含む	良好	2,577/1 2,577/2 2,577/1	回転ナデ/回転ナデ、沈 線2条	121と同一個体、 外面降灰、美濃須 衛窯	33	6
123 68 32	頸	短頸 壺	D5 E5	II I	13.0 -	密(径2mm以下)の長石。 チャートを含む	良好	577/1 576/1 2,578/1	回転ナデ/回転ナデ	美濃須衛窯	33	8
124 96	頸	壺	E6	II	- -	密(径1mm以下)の長石、石英、 黒色粒を含む	良好	2,577/1 N6/ 2,576/1	回転ナデ/回転ナデ	外面降灰、美濃 須衛窯	33	-
125 46	頸	瓶	E4	II	- 5.6	密(径3mm以下)の長石。 チャートをわずかに含む	良好	2,577/1 576/1 2,577/2	回転ナデ/回転ナデ、未 切端ナデ、貼付高台	外面ヘラ記号、 内面先突起状	33	6
126 56	頸	横瓶	E5	II	10.6 -	密(径2mm以下)の長石をわず かに含む	良好	2,575/3 1074/2 2,577/3	回転ナデ/回転ナデ	内外面降灰	33	8
127 40 68	頸	横瓶	D4 D5	II	- -	密(径3mm以下)の長石。 チャートを含む	良好	1078/5 1078/6 1078/7	日コロデ、当て具痕/平 行タタキ後ヨコナデ、沈 線2条		33	-
128 56	頸	横瓶	E5	II	- -	やや粗(径5mm以下)の長石。 石英、チャートを多く含む	良好	576/1 N6/ NS/	回転ナデ、指オサエ/タ ケズリ後回転ナデ、回転ヘ ラケズリ		33	-
129 96	頸	横瓶	E6	II	- -	密(径2mm以下)の長石。 チャートを含む	普通	2,577/1 2,577/1 2,577/1	回転ナデ/回転ヘラケズ リ		34	-
130 56	頸	横瓶	E5	II	- -	密(径1mm以下)の長石をわず かに含む	普通	2,577/1 577/1 2,576/2	回転ナデ/不定方向のヘ ラケズリ	外面ヘラ記号	34	-
131 52	頸	甕	B5	II	5.3 -	密(径1mm以下)の長石、石英 を含む	良好	2,577/1 2,577/2 2,578/1	回転ナデ/回転ナデ、回 転ヘラケズリ	外面降灰	34	-
132 70	頸	合子	E5	II	- 8.7	密(径1mm以下)の長石をわず かに含む	良好	1077/1 N6/1 N7/1	回転ナデ/回転ナデ、貼 付高台	猿投窓	34	7

表15 出土土器観察表(7)

掲載 No.	整理 No.	種別	器種	地区 遺構	層位	口径 底径 高さ	粘土	焼成	色調 (内面) (外面) (侧面)	成形・調整 内面/外面		備考	挿 図 No.	図 版 No.
										(内面)	(外面)			
133	3	須恵器	便		I	18.7	密(径3mm以下の長石、チャートをわずかに含む)	普通	2.5Y7/2 5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ、当て具痕/回転ナデ、平行タキ	134と同一個体、美濃須衛窯	34	7	
	25				II									
	40				II									
	44				II									
	46				II									
	52				II									
	64				II									
	68				II									
	82				II									
	56				II									
134	66				II	29.2	密(径2mm以下の長石を含む)	普通	2.5Y7/2 5Y7/1 2.5Y7/1	当て具痕/格子目状タタキ	133と同一個体、美濃須衛窯	34	7	
	91				II									
	25				II									
	40				II									
	41				II									
135	68	須恵器	便	II	II	29.2	密(径2mm以下の長石を含む)	良好	5Y6/1 5Y5/1 2.5Y6/1	回転ナデ/櫛状工具による縦位沈線、横位沈線4条、回転ナデ	34	-		
	68				II									
136	41	須恵器	便	F4	II	26.3	密(径3mm以下の長石、石英、チャートを含む)	普通	5Y5/1 (2.5Y7/2) 5Y5/1 2.5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ/平行タタキ、工具によるヨコ方向の横位、櫛描き波状文、沈線2条	内外面黄土塗布、振揺窯	34	-	
	23				II									
138	52	須恵器	便	D5	II	24.7	密(径3mm以下の長石、チャートをわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ/回転ナデ/回転ナデ後斜め方向の擦痕	外面黄土塗布、内面降灰、振揺窯	34	8	
	96				E6									
139	40	須恵器	便	D4	II	25.9	密(径1mm以下の長石、チャートをわずかに含む)	良好	5Y7/1 5Y7/2 5Y7/3	回転ナデ/回転ナデ/回転ナデ	美濃須衛窯	35	-	
	56				E5									
141	29	須恵器	便	E4	II	30.2	密(径2mm以下の長石を含む)	良好	2.5Y7/2 2.5Y7/1 2.5Y7/2	回転ナデ/回転ナデ	内面降灰、美濃須衛窯	35	-	
	46				E4									
	68				D5									
	56				E5									
	84				F5									
142	5	須恵器	便	-	I	-	密(径3mm以下の長石をわずかに含む)	良好	NS5/1 NS6/1 NS5/1	板状工具によるナデ(ハグ目状)/平行タタキ後ナデ消し	外面部降灰、断面に透かし状の平滑な面あり	35	7	
	17				F2									

表16 磁石一覧

掲載 No.	整理 No.	地区 遺構	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	使用面数	使用痕		折損	挿 図 No.	図 版 No.
										平坦面	側面			
144	10	E5	II	砂岩	11.4	4.4	2.75	211.1	4面	磨面・擦痕	磨面・擦痕	一部欠	35	-

## 第4章 総括

今回の発掘調査では、主に古代の遺構や遺物を検出し、縄文時代や弥生時代、中世から近世の遺物が少量出土した。当遺跡における土地利用の変遷を概観し、検出した遺構の中心となる古代の竪穴建物や遺物について、県内美濃地方の主な遺跡と比較検討し、古代における当遺跡の特徴を示し総括とする。

### 1 土地利用の概要

『養老町遺跡詳細分布調査報告書』(養老町教委2007)における白石道遺跡は、地表から採集した遺物により、弥生時代終末期から古墳時代初頭及び中世末期の遺跡として紹介されている。

今回の発掘調査は、遺跡の中央を南北に縱断するように計画された道路建設に伴うものであったが、試掘・確認調査により、遺跡内における道路建設予定地の中央部から北部及び南端部は遺構が確認されず、遺物も少量の出土にとどまったため、南部の一部が発掘調査による記録保存措置の対象となった。発掘調査では、7世紀末から8世紀後葉の竪穴建物などの遺構や遺物を検出した他、縄文時代や弥生時代、中世の遺物が少量出土した。

縄文時代の遺物は、深鉢底部片と思われるものが、表土層から1点出土しただけである。破断面は摩滅しているため、斜面上部からの流れ込みか、外部から持ち込まれた客土に混入していた可能性が考えられる。

弥生時代の遺物は、表土層及び遺物包含層から、甕の口縁部片や壺の胴部片が4点出土しただけである。縄文土器と同様に破断面は摩滅しており、斜面上部からの流れ込みか、外部から持ち込まれた客土中に混入していた可能性が考えられるが、包含層から出土した2点は、近隣にこの時代を主体とする遺跡の存在をうかがわせる。

古墳時代の遺物は出土していないが、西方の砂礫台地上には古墳群が形成されており、扇状地上には集落が営まれていた可能性がある。

古代では、7世紀末から8世紀後葉の竪穴建物や土坑、溝状遺構を検出した。竪穴建物は6棟検出したが、狭い範囲に重複して建てられたため、後述のように一時期に1棟の竪穴建物が存在したと思われる。遺構は道路建設予定地の東側や西側に広がる可能性があるが、今回の発掘区では、竪穴建物が狭い範囲に繰り返し建て直された状況を確認した。遺物は、少量ではあるが9世紀前葉のものまで確認できる。しかし、竪穴建物の埋土中や遺物包含層から出土したものであり、竪穴建物が9世紀前葉まで存続していた可能性は低いと思われる。

その後、明確な土地利用の痕跡は、遺構としては残されていないが、12世紀頃の山茶碗や近世の陶器片が少量出土しており、当遺跡周辺も含めて何らかの土地利用が行われていたと思われる。近現代では扇状地上は桑畑や果樹園として利用され、扇状地末端近くに集落が形成されていることから、そういう土地利用が古くから行われていた可能性も考えられる。

このように、今回の発掘区において、7世紀末から始まった土地利用は、現代に至るまで継続的に行われていたと思われる。

## 2 壺穴建物

古代の壺穴建物は、養老町内では初めての検出例となる。今回検出した壺穴建物は6棟で、最も古いものが7世紀末頃、最も新しいものが8世紀後葉に建てられたと思われる。まずは、6棟の壺穴建物が建てられた順序を、遺構の重複関係と出土遺物の時期、長軸方位（図41）の類似性から検討し、次にカマドが付属しないことと、周囲に空間があるにもかかわらず、壺穴建物が狭い範囲で重複する状況を、他の集落遺跡と比較して考えたい。

壺穴建物の重複関係から、最も新しいのはSI01（8世紀後葉）、次にSI02（8世紀後半）となる。SI02は、SI03（8世紀前半）やSI04（8世紀後半）よりも新しいが、SI03とSI04は重複していない。そのため、重複関係からは、SI02の次に古いのはSI03かSI04となる。SI03とSI04の新旧関係は、出土した遺物からSI04がSI03よりも新しいと思われる。SI05（8世紀前半）はSI04より古く、SI06（7世紀末頃）はSI03より古いことが重複関係から判明している。SI03とSI05は重複していないが、両者の間に1.5mほどしか空間がなく、同時に存在したとは考えにくい。SI03とSI05の出土遺物の時期差は判然としないが、建物の長軸方位はSI05がSI04と約90°異なる（SI05の短軸方位はSI04の長軸方位に類似する）ことから、SI05がSI03よりも新しいと考えたい。また、SI03とSI06との建物の長軸方位も近いことから、SI06が最初に建てられ、その後SI03-SI05-SI04-SI02-SI01と順次建て替えられたと思われる。SI06の長軸方位は、地形の傾斜に直交した方向に近く、それが新しくなるにつれて地形とは関係なく、南北方位に近づいていくように変更されていったと思われる。また、SD01の方位は、SI02やSI04、SI05に近く、これらの壺穴建物との関係がうかがわれる。

今回の調査で検出した6棟の壺穴建物は、重複関係や出土遺物の時期等から、一時期に1棟の壺穴建物が存在していたと考えられる。壺穴建物の長軸方位を変化させながら、同じ場所を選択して、7世紀末から8世紀後葉まで建て替えていたと考えられる。

次に、カマドが付属しない壺穴建物について検討したい。6棟の壺穴建物は、平面形や柱配置、壁際構の状況など、建物構造に共通性が認められ、カマドや炉といった火処が確認できなかった。火処については、遺構の重複により削平された可能性はあるものの、部分的に確認しただけのSI06や1/2以上を削平されたSI05を除き、少なくとも3辺の壁面を検出しており、元来カマドを付属しない壺穴

壺穴建物と溝状遺構の長軸方位

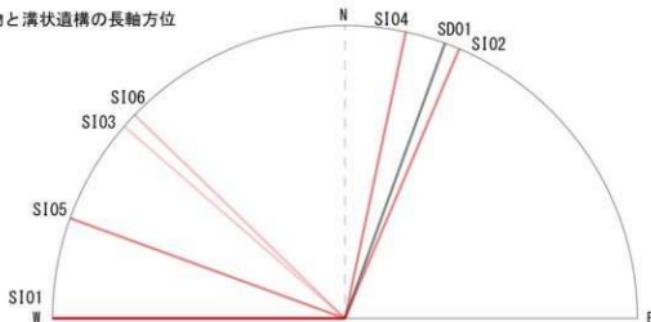


図41 壺穴建物長軸方位

建物であった可能性が高いと思われる。また、6棟の堅穴建物が、直径13mほどの狭い範囲に重複して検出されたことも、特徴的なことである。

堅穴建物にカマドが付属しないこと、重複が激しいことについて、岐阜県美濃地方の西濃地区や岐阜地区、中濃地区、可茂地区の主な集落遺跡の中で、7世紀後葉から8世紀とされた堅穴建物を確認した（表17、図42）<sup>11)</sup>。

確認した512棟の堅穴建物では、発掘区の制約や構造の重複等によるカマドの有無不明を除く320棟のうち、カマドが付属しない堅穴建物は8棟（鷺山市場遺跡、六里遺跡、尾崎遺跡は各1棟、針田遺跡は5棟）と非常に少ない。今回検索した美濃地方の堅穴建物の中では、カマドが付属するものが一般的と言える状況であった。しかし、尾張地方の同じ時期の堅穴建物では、カマドが付属しないものが美濃地方よりも多いようである。名古屋城三の丸遺跡では、「7世紀後半以降カマドの構造がはつきりしなくなる」（愛知県埋蔵文化財センター1990）とされ、3棟以上の堅穴建物にカマドがない<sup>12)</sup>。清州城下町遺跡では、「II期以降の堅穴住居はカマドを持たないが、住居の床面に焼土、炭化物の広がりを持つものがみられる。」<sup>13)</sup>とされ、カマドが確認された堅穴建物はI期（6世紀末から7世紀前半）のものに限られている。稲沢市下津新町遺跡では、7世紀後半から9世紀初頭の堅穴建物41棟中、カマドが確認できないものが7棟、カマドを検出したものが9棟、不明が20棟あるが、5棟が地床炉とされている（愛知県埋蔵文化財センター2009）。尾張地方では3遺跡を確認しただけであるが、カマドが付属しない堅穴建物は、7世紀後半以降集落内に一定数存在している。

尾張地方や針田遺跡では、カマドが付属しない堅穴建物が一定数あっても、他にカマドや地床炉を持つ堅穴建物も確認されているが、当遺跡ではカマドを持つ堅穴建物は確認できなかつた。美濃地方南西部に位置することから、尾張地方の影響を強く受けたとも考えられる。しかし、カマドが付属しない堅穴建物ばかりである可能性が高く、そうした堅穴建物を継続して建て替えていたり、他の遺跡では確認できず、一般的な集落ではないと考えることができるのではないか。

なお、カマドや炉などの火炉が確認できない堅穴建物は、居住のための建物ではなく、作業場や物置小屋、一時的な施設のように位置づけられることがある。作業場や物置小屋とされる場合は、比較的小規模な堅穴建物であることが多いが、当遺跡の堅穴建物は、一辺が4mから5mとそれほど小さくはない。また、出土遺物に土師器甕や瓶のような煮炊き具が一定量あり、何らかの調理施設が存在していたことも想定されること<sup>14)</sup>や、継続して建て替えが行われた可能性が考えられるため、日常的に使用する居住施設ではないとしても、定期的に使用するような施設の可能性を考えたい。

では、周囲に空閑地があるにもかかわらず、特定の狭い範囲に堅穴建物が繰り返し建てられている状況は、他の集落遺跡でも確認できるのであろうか。検索した遺跡の中では、半数以上の12遺跡で、比較的狭い範囲に堅穴建物が密集し重複する状況が見られた。検出した堅穴建物数が多い集落ほど、堅穴建物の重複が多い傾向があり、集落の存続期間が長くなれば当然起りうることとも考えられるが、遺跡によって状況が異なり、以下のように集約した<sup>15)</sup>。なお、白石道遺跡と合わせて、三井遺跡や重竹遺跡、東山浦遺跡、針田遺跡の発掘区全体図を参考に示した（図43・図44）。

①堅穴建物の重複が多い時期が、遺跡によって異なり、同じ遺跡において重複が多い時期とあまりない時期がある（正明寺城之前遺跡、重竹遺跡、半布里遺跡・東山浦遺跡、今遺跡、宮之脇遺跡など）。

表17 美濃地方西半部の堅穴建物検出遺跡

No.	遺跡名	所在地	時期	堅穴 建物数	カマド			堅穴建物 重複状況
					有	無	不明	
1	白石道遺跡	養老郡養老町	7c末～8c後葉	6	0	4	2	重複多い
2	美濃不破関	不破郡垂井町	8c	2	2	0	0	なし
3	美濃國府跡	不破郡垂井町	7c後半	2	2	0	0	なし
4	堅田遺跡	不破郡垂井町	7c～8c	2	0	0	2	なし
5	一本松遺跡	大垣市	7c後半～8c	3	3	0	0	なし
6	六里遺跡	揖斐郡大野町	7c後半～8c	3	1	1	1	なし
7	稻荷遺跡	揖斐郡大野町	8c	8	4	0	4	重複多い
8	御望遺跡A区	岐阜市	7c～8c	10	5	0	5	なし
	御望遺跡B区	岐阜市	8c	21	11	0	10	重複多い
9	鳶山市場遺跡	岐阜市	7c～8c	58	7	1	50	重複多い
10	正明寺城之前遺跡	岐阜市	7c後半～8c	19	3	0	16	時期により重複多い
11	鷲山仙道遺跡	岐阜市	7c後半～8c	17	5	0	12	時期により重複多い
12	鷲山城遺跡	岐阜市	7c後半～8c	7	2	0	5	重複する
13	城之内遺跡	岐阜市	7c後半～8c	13	9	0	4	少ない
14	長山遺跡	岐阜市	8c中葉～9c初頭	12	8	0	4	重複する
15	三井遺跡	各務原市	8c中葉～9c前葉	27	27	0	0	重複多い
16	前洞遺跡	各務原市	8c後葉	5	5	0	0	少ない
17	東竹遺跡(B地点)	閑谷市	7c後半～8c中葉	75	65	0	10	時期により重複多い
18	半布里遺跡	加茂郡富加町	7c後半～8c	30	24	0	6	重複多い
	(東山浦遺跡)	加茂郡富加町	7c～8c	31	26	0	5	重複多い
19	尾崎遺跡	美濃加茂市	7c後半～8c	18	9	1	8	少ない
20	佐口遺跡	美濃加茂市	7c後半～8c前半	22	20	0	2	少ない
21	針田遺跡	美濃加茂市	7c後半～8c	40	11	5	24	重複多い
22	今遺跡	美濃加茂市	7c～8c	37	23	0	14	時期により重複多い
23	宮之脇遺跡A地点	可児市	7c後葉～8c中葉	43	33	0	10	時期により重複多い
	宮之脇遺跡B地点	可児市	7c後葉	7	7	0	0	少ない
計(白石道遺跡を除く)				512	312	8	192	

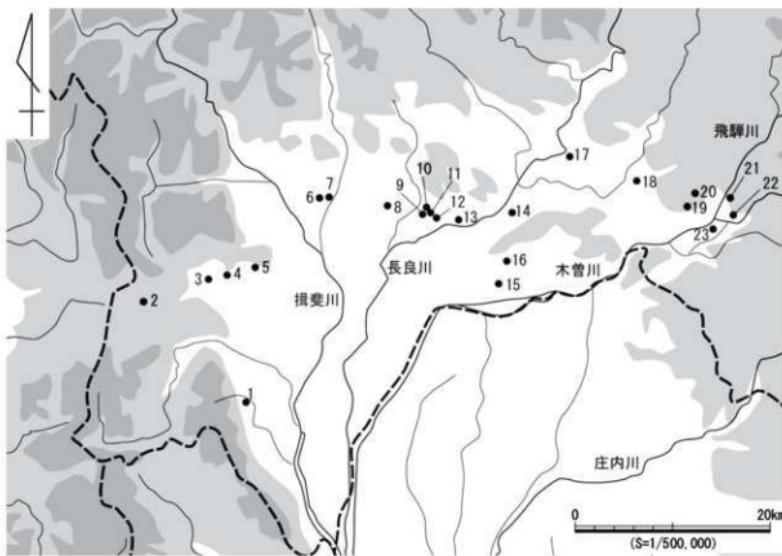


図42 堅穴建物検出遺跡位置図

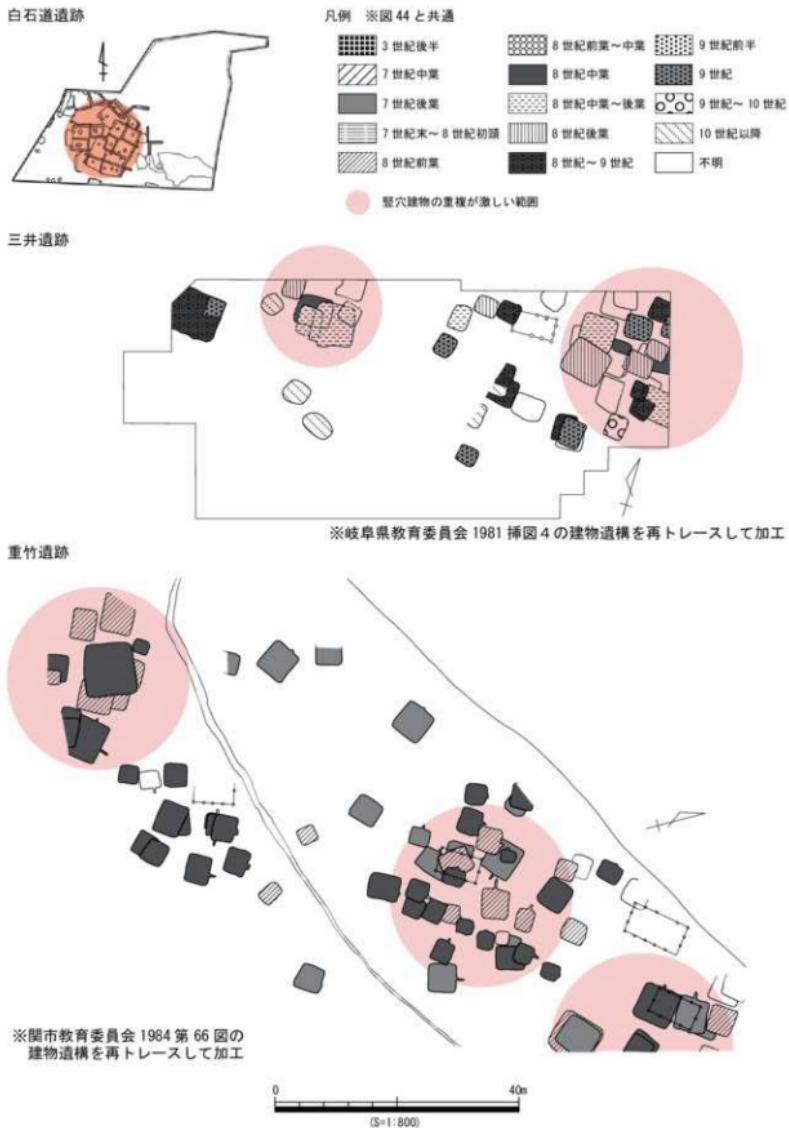
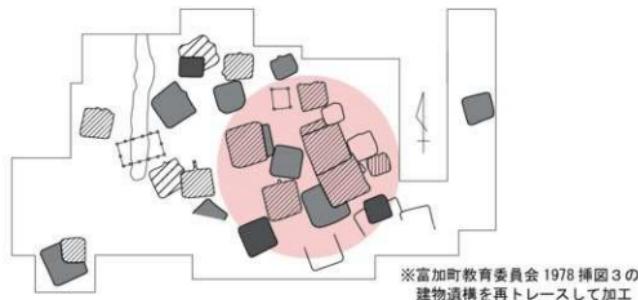


図43 発掘区全体図（白石道跡・三井跡・重竹跡）

- ②同じ時期でも、狭い範囲に密集し重複が多くなるところがある一方で、間隔を空けてあまり密集せず堅穴建物が分布する遺跡がある（御望遺跡、正明寺城之前遺跡、半布里遺跡・東山浦遺跡、重竹遺跡など）。
- ③集落の中でブロック状に堅穴建物が密集し重複する場合、その範囲は直径20m～30m程度である。
- ④面積が40m<sup>2</sup>以上となる大型の堅穴建物と、それよりも面積が小さい中型・小型の堅穴建物により構成される遺跡（三井遺跡、重竹遺跡、半布里遺跡・東山浦遺跡、針田遺跡など）と、中型・小型の堅穴建物のみで構成される遺跡がある（稻荷遺跡、御望遺跡など）。
- ①については、集落形成当初は重複が少くとも、やがて近接する時期の堅穴建物の重複が増加す

## 東山浦遺跡



## 針田遺跡

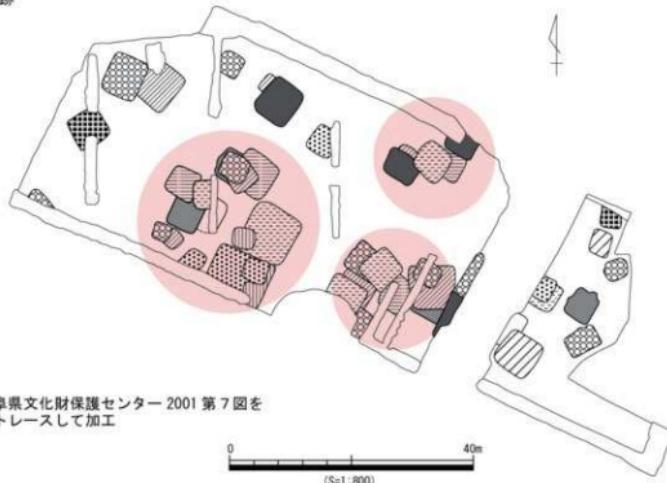


図44 発掘区全体図（東山浦遺跡・針田遺跡）

る遺跡では、「居住地に対する何らかの制約」が生じた可能性が指摘されている<sup>6)</sup>。②については、集落を広範囲に渡って発掘調査するとわざることであり、遺跡の一部に限られた発掘調査では、どちらか一方の状況しか確認できない可能性が高い。③については、堅穴建物が密集し重複している範囲を全体図から視覚的におさえたもので、見方によっては異なる可能性があるが、小さくて直径20m、大きくて直径30mほどの中に密集し重複しているブロックのように見える。④については、面的に広く調査できた場合には、このような堅穴建物の構成が明確になってくると思われ、細長い発掘区や面積が狭い発掘区では把握しにくいと思われる。

当遺跡の堅穴建物の密集した状況と、他の調査事例による①～④とを比較したい。当遺跡では、7世紀末から8世紀後葉にかけて継続して建て替えを行っているため、①のような時期差によって重複の多寡が生じてはいない。また、検出したすべての堅穴建物が、狭い範囲に密集し重複しているため、空閑地を隔てて堅穴建物を確認しておらず、②にも該当しない。③については、堅穴建物が密集している範囲は、径13mと他の集落と比較してかなり狭く、この場所に建てる必要性、若しくはこの場所でなければ建てられない制約があるように思われる。④については、6棟の堅穴建物が一辺4m～5m程の大きさであり、規模の差はあまりない。

それぞれの遺跡において、発掘区の形状や調査面積が異なり、このような単純な比較では不十分と思われるが、当遺跡で検出した堅穴建物群は、美濃地方で確認した他の集落遺跡の状況とは異なる。カマドが付属しない堅穴建物群であることと同様に、狭い範囲に密集し重複して建て替えられた状況も、他の集落とは異質と言えるのではないか。堅穴建物以外の遺構が少ないことも、他の集落遺跡とは異なる点である。

### 3 出土遺物

出土した遺物の大半は、7世紀後葉から9世紀前葉の土師器や須恵器であった。やや時期幅があるものの、当遺跡の土師器や須恵器の器種組成と特殊な遺物を他の集落遺跡と比較した。

当遺跡で出土した土師器と須恵器について、口縁部残存率を計測<sup>7)</sup>して個体数を集計した(表18)。土師器の中では甕が最も多く、次いで壺・皿(畿内系土師器)となる。甕が少ないが、堅穴建物にカマドが付属しないことと関係するのであろうか。ミニチュア土器は1点出土しただけであるが、口縁部が1/4程度残存しているため、比率としては製塙土器と同程度となった。須恵器では壺が最も多く、次いで蓋となり、供膳具が多い。土師器と須恵器を合わせて見ても、須恵器壺が最も多く、次い

表18 古代の器種組成

種別	土師器					須恵器									合計		
	壺・皿	甕	瓶	製塙土器	ミニチュア	小計	壺	無台壺	有台壺	蓋	碗	盤	鉢	瓶類	甕	小計	
個体数 (x/12)	10.2	61.3	1.6	2.6	2.7	78.4	23.6	38.7	24	67.6	4.6	5.0	6.5	7.4	19.7	197	275.5
種別比率 (%)	13.0	78.2	2.0	3.3	3.4	99.9	12.0	19.6	12.2	34.3	2.3	2.5	3.3	3.8	10.0	100	—
全体比率 (%)	3.7	22.3	0.6	0.9	1.0	—	8.6	14	8.7	24.5	1.7	1.8	2.4	2.7	7.2	—	100.1

\*各個体数は口縁部残存率(x/12)による。

\*比率は、小数点以下第2位を四捨五入して表示。

表19 他遺跡との用途別組成比較

種別	用途	白石道 遺跡 7c末～ 9c初	清州城下町遺跡					六里遺跡	稲荷遺跡 (単位: %)	
			7c前半	7c後半	7c末～ 8c中	8c後葉	8c末～ 9c前			
土師器	供膳具	3.7	0	0	1.1	0	0	0	2.1	
	煮炊具	22.9	37.5	36.5	19.6	2.0	20.8	56.5	5.6	
	他	1.9	0	0	0	0	0	0	0	
須恵器	供膳具	59.3	57.5	35.3	57.9	91.3	70.3	23.3	87.2	
	調理具	2.4	0	0	2.5	0	0	0	0.7	
	煮炊具	0	1.8	3	0	2.4	1.6	0	0	
	貯蔵具	9.9	3.7	25.2	19.0	4.3	7.3	20.2	3.1	
	不明	0	0	0	0	0	0	0	1.4	
計		100.1	100.5	100	100.1	100	100	100	100.1	
種別	用途	白石道遺跡 7c末～9c初	重竹遺跡B地区			重竹遺跡B地点				
			7c後葉	8c前葉	8c中葉	7c後葉	8c前葉	8c中葉	8c後葉	
須恵器	供膳具	82.9	47.6	62	69.3	43	74	88	81	
	調理具	3.3	4.9	3	2	24	6	1	3	
	煮炊具	0	0	0	0	0	0	0	0	
	貯蔵具	13.8	33	27	20.8	52	20	6	15	
	不明	0	14.6	8	7.9	0	0	4	1	
計		100	100.1	100	100	119	100	99	100	

※重竹遺跡は計測方法不明、土師器と須恵器を分けて集計（土師器は堀がほぼ100%）

で須恵器蓋、土師器甕の順となる。用途別にまとめると、須恵器供膳具が最も多く59.3%、次に土師器煮炊具の22.9%、須恵器貯蔵具の9.9%となる。この用途別の組成比を他の遺跡と比較する（表19）。清州城下町遺跡<sup>8)</sup>では、7世紀末から8世紀中葉が概ね類似した組成比となる。須恵器供膳具が57.9%、土師器煮炊具が19.6%、須恵器貯蔵具が当遺跡よりやや多くて19%である。重竹遺跡は土師器を含めた組成比が不明なため、須恵器での比較となる<sup>9)</sup>。供膳具が最も多いことは変わらないが、貯蔵具の比率が当遺跡よりも高い。7世紀前半の六里遺跡では、土師器煮炊具が最も比率が高いのに対し、8世紀後半の稲荷遺跡では須恵器供膳具の比率が非常に高く、土師器煮炊具の比率はかなり低くなる<sup>10)</sup>。清州城下町遺跡では、7世紀後半に須恵器貯蔵具の比率が高く、8世紀末に向けて低くなっているが、当遺跡でも、胴部片も含め図示した遺物では、7世紀後半の貯蔵具が多い。7世紀後半から8世紀末にかけて継続する集落では、当初使用された貯蔵具が比較的の長期間使用され、破損したら補充するという状況が想定される。当遺跡において、図示した須恵器貯蔵具が、7世紀後葉のものが多く、8世紀前半が不明瞭で、8世紀後半のものが存在する状況は、7世紀末から8世紀後葉にかけて、堅穴建物が継続して建て替えられたことの傍証の一つになるのではないか。

当遺跡は発掘区も狭く、検出した遺構も堅穴建物が中心で、その大きさも中小規模のものであるが、出土した土器の中に、畿内系土師器（5や31、44、45など）や須恵器高盤（20や114）といった一般的な集落からはあまり出土しない遺物がある。こうした遺物について、下総国の分析事例（小林2006）

表20 各遺跡での特殊遺物出土状況

No.	遺跡名	円面硯	畿内系土師器	高盤	双耳坏	金属器 写し	製塩 土器	備考
1	白石道遺跡	—	●	●	—	●	●	須恵器合子
2	美濃不破間	●	—	—	—	●	—	堅穴建物は兵舎か
3	美濃国府跡	●	●	●	—	—	—	縁袖陶器・二袖陶器
4	堅田遺跡	—	—	—	—	—	—	
5	一本松遺跡	—	●	—	—	—	●	
6	六里遺跡	—	●	—	—	—	●	
7	福荷遺跡	—	●	—	—	—	●	美濃刻印須恵器（表採）
8	御望遺跡A区	—	—	—	—	—	●	美濃刻印須恵器（表採）
9	鷲山市場遺跡	—	—	—	—	—	●	
10	正明寺城之前遺跡	—	—	—	●	●	◎	
11	鷲山仙道遺跡	—	●	—	●	●	●	
12	鷲山蟬遺跡	—	—	●	●	—	●	
13	城之内遺跡	—	●	●	—	●	●	鉢形金具、郡衙推定地近く 長良庵守に近接、近辺に方県駅
14	長山遺跡	—	—	—	—	—	—	三彩陶器
15	三井遺跡	●	—	●	●	●	●	美濃刻印須恵器
16	前洞遺跡	—	—	●	●	●	●	美濃刻印須恵器
17	重竹遺跡（B地点）	—	—	●	—	—	◎	美濃刻印須恵器
18	半布里遺跡 (東山浦遺跡)	—	—	●	●	●	●	
19	尾崎遺跡	—	—	—	—	—	—	美濃刻印須恵器、羊形硯
20	佐口遺跡	—	—	—	—	—	●	
21	針田遺跡	—	●	—	—	●	◎	
22	今遺跡	—	—	—	—	—	●	
23	宮之脇遺跡A地点	—	—	—	—	—	◎	美濃刻印須恵器
	宮之脇遺跡B地点	—	—	—	—	●	◎	

●：あり　—：なし　◎：多量

※遺物は堅穴から出土したものだけではなく、報告書に掲載されたもの

を参考に、堅穴建物を確認した遺跡での出土状況をまとめた（表20）<sup>11)</sup>。

下総国の分析では、「円面硯」と「畿内系土師器」<sup>12)</sup>は、交通の要衝若しくは官衙からの出土が多いとされ、須恵器高盤についても官衙関連遺物と評価され、官人等と密接に結びつく遺物と考えられている。今回集計した遺跡の中では、美濃国府跡からこれらの3種の遺物が出土している。当遺跡からは、円面硯の出土はないが、少量ながらも畿内系土師器や須恵器高盤が出土した。同様に畿内系土師器と須恵器高盤が出土した遺跡に城之内遺跡がある。ここは長良庵守に近接し、近辺には東山道方県駅が存在した可能性が指摘されている。また、鷲山仙道遺跡からは畿内系土師器が、鷲山蟬遺跡からは須恵器高盤と帶金具が出土している。両遺跡は近接する場所にあり、鷲山遺跡群周辺が方県郡衙推定地となっている（岐阜市教育文化振興財团2007）。畿内系土師器や須恵器高盤が出土した遺跡は、他にそれぞれ4遺跡と3遺跡が確認されただけである<sup>13)</sup>。須恵器双耳坏や金属器模倣須恵器は、畿内系土師器や須恵器高盤よりも多くの遺跡で出土しているが、三井遺跡や東山浦遺跡では、円面硯も出土している。当遺跡では、堅穴建物6棟の他、溝状構造や土坑を検出しただけであり、堅穴建物も一時期に1棟存在するだけの小規模な遺跡である。より広い範囲を発掘調査することで、検出される遺構の内容や規模も異なるものになる可能性はあるが、他の集落遺跡出土遺物との比較においても、日常生活では使用しない遺物が含まれることから、一般的な集落とは言い難いと言える。

また、当遺跡では製塩土器も破片数で11点出土した。製塩土器は多くの遺跡から出土しているが、特に多量に出土した5遺跡以外では、少量の製塩土器が出土しているだけである。塩は日常生活に欠かすことのできない食料であり、製塩土器が出土していない遺跡においても、生命維持に必要不可欠

な栄養素として塩は欠かすことはできない。日常消費する塩の量は、出土した製塩土器の量ではとても賄うことができる量ではなく、製塩土器と共に流通した塩（固体塩・堅塩）は、日常消費する塩とは別の特別な用途のものであるとの指摘がある<sup>14)</sup>。

当遺跡が営まれた時期には、西濃地域に郡家や国府、不破閥、国分寺、国分尼寺などの造営が行われた。当遺跡の西側には、養老山地山麓に沿って、不破郡から伊勢国へ向かう重要な道として伊勢東街道が古くからあり、東には河川交通が盛んな木曾三川が流れ、その対岸には尾張国の平野部が広がる。当遺跡の北にある滝谷の上流には、養老の滝や元正天皇行幸遺跡があり、滝谷を隔てて北側には、聖武天皇の行幸に関連する可能性が指摘された戸門遺跡（養老町教育委員会2007）がある。当遺跡の堅穴建物は、この場所に7世紀末頃から8世紀後葉にかけて継続して建て替えられた。一時期に1棟しか堅穴建物が存在しないが、堅穴建物の状況や出土遺物から、公的若しくは地域の有力豪族が関わった施設の可能性が考えられる。日常生活では使用しない遺物の存在から、祭祀的な行為を行った施設であり、養老の醴泉が上流部にあること、初期には甕や横瓶などの貯蔵具や運搬具の点数が多いことから、水の祭祀に関わるものと可能性の一つとして提示したい。しかし、発掘区は遺跡内的一部に止まるため、今後のさらなる調査の進展により、特殊性を持つ当遺跡の内容解明が期待される。

#### 注

- 1) 各遺跡の発掘調査報告書で、7世紀後葉から8世紀とされた堅穴建物を抽出したが、「7世紀～8世紀」や「8世紀～9世紀」など幅を持たせた時期比定がされたものも含んでいる。また、西濃地区は可能な範囲で堅穴建物を検索したが、他の地区は、10棟以上の堅穴建物が検出された遺跡を中心に検索しており、各地区で7世紀後葉から8世紀のすべての堅穴建物を確認したわけではない。
- 2) 報告書の図等で確認し、少なくとも3棟はカマドが付属しないと思われる。なお、堅穴建物の一辺に半円形のふくらみを持ち、甕の底部を逆位に置いたものや、角柱状の石を据えたものはカマドに類する火壇としての施設と考えた。
- 3) 愛知県埋蔵文化財センター1990によるが、「二期以降」は7世紀後半以降とされている。
- 4) 帝京大学山梨文化財研究所2000の討論の中で、黒井峯遺跡の発掘調査を担当された石井克己氏が、屋外に何かを差炊きするような簡易な施設（カマド）があると発言されていることから、屋内に火穴が確認できない当遺跡では屋外に簡易な火穴が存在した可能性が考えられる。
- 5) それぞれの遺跡での発掘調査では、発掘対象面積や発掘区の形状などが異なり、集落の全域を調査したものはないため、あくまで、限られた範囲の発掘調査で判明した集落の一部を見ているに過ぎない。今後の調査の進展により、変更が必要になると思われる。
- 6) 東山浦遺跡（富加町教育委員会1978）、今遺跡（美濃加茂市教育委員会1979）、前洞遺跡（各務原市教育委員会1994）などで指摘されている。なお、前洞遺跡では8世紀の堅穴建物はあまり重複しないが、9世紀後半から10世紀の堅穴建物の重複が激しい。
- 7) 口縁部残存率の計測は宇野1992を参考とし、12分の1未満の破片は12分の1に切り上げ、12分の1以上の破片は小数点以下第1位まで計測した。
- 8) 愛知県埋蔵文化財センター1990に記載された、器種構成の表の数値を転記した。個体数は、口縁部計測法により算出され、その比率が示されている。

- 9) 関市教育委員会1984の「第31表 須恵器・土師器甕の年代別内訳表」に示された割合の数値(%)を使用した。土師器と須恵器それぞれで割合が計算されており、土師器は甕だけとなっているため、表18には須恵器の数値のみ利用した。なお、この計測方法は明記されていないため不明である。
- 10) 六里遺跡と稲荷遺跡の組成比は、岐阜県文化財保護センター2017の「表126 古墳時代～古代の土器組成」に示された個体数から比率を計算した。個体数は口縁部残存率による計測で算出している。
- 11) 小林信一氏による下総国の事例分析（小林2006）を参考に、畿内系土師器や須恵器高盤、双耳坏、円面鏡、幕金具などの有無を確認した。合わせて、当遺跡で出土した金属器模様須恵器や製塙土器についても表に含めたが、文様のある土師器（65）や須恵器鉢（116）の類例は確認できなかった。なお、名古屋城三の丸遺跡では円面鏡と須恵器高盤が、清州城下町遺跡では畿内系土師器と須恵器高盤・合子が出土している。また、須恵器合子（132）は、恵那市正家庵寺において出土した古墳時代の特徴を残す坏と報告されているもの（南山大学人類学博物館1982）が類似し、官断的な性格が強い遺物が多く出土した千葉県向台遺跡谷部からは、蓋とともにやまとまと出土している（千葉県文化財センター1985）。参考として、図45に須恵器合子の実測図を掲載した。
- 12) 本書では、産地を確定できないことから、胎土が精良で赤褐色に焼成され、丁寧な調整がされた土師器を「畿内系土師器」としたが、小林氏の分析では、「畿内產土師器」と記載されている。なお、岐阜県内の「畿内產土師器」を集成された横幕氏は、古墳や集落遺跡から出土する少量の「畿内產土師器」は属性が高いとされている（横幕2000）。
- 13) 壁穴建物を集計した集落遺跡以外では、弥勒寺東遺跡（関市教育委員会2015）や広畠野口遺跡（岐阜県文化財保護センター2010）といった官衙遺跡で出土しているが、他の集落遺跡よりも出土点数が多く、畿内系土師器の器種も多い。
- 14) 森泰通2007では「～堅塙は必需品ではなくて、地方では特別な階層、あるいは特別な場面で使われる、ある種せいたく品～」、平野2017では「～この土器に入った塙も希少性が高い「特別」な塙、あるいは「高級」な塙であった～」と述べられている。



縮尺を1/3にして各報告書から実測図を転載

図45 須恵器合子及び類似資料

### 参考・引用文献

- 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター2009『下津新町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第159集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1990『名古屋城三の丸遺跡（I）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第15集
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1990『清州城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集
- 内堀信雄・井川祥子1996「美濃における古代煮炊具の様相」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集、国立歴史民俗博物館
- 大垣市教育委員会1994『大垣市埋蔵文化財調査概要平成4年度』（大垣市文化財調査報告書第23集）
- 各務原市1983『各務原市史 考古・民俗編考古（本文）』
- 各務原市教育委員会1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』（各務原市資料調査報告書第4号）
- 各務原市教育委員会1994『前洞遺跡A地区発掘調査報告書』（各務原市文化財調査報告書第14号）
- 各務原市教育委員会1996『各務寒洞窯址群発掘調査報告書』（各務原市文化財調査報告第19号）
- 可児市教育委員会1994『川合遺跡群』
- 岐阜県教育委員会・建設省岐阜国道工事事務所1981『三井遺跡・六軒遺跡 一般国道21那加バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 岐阜県教育委員会・不破関跡調査委員会1978『美濃不破関』
- 岐阜県教育委員会2002『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第1集（西濃地区・本巣郡）』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター1994『尾崎遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第13集）
- 財団法人岐阜県文化財保護センター1997『堀田城之内遺跡一岐阜環状線建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第30集）
- 財団法人岐阜県文化財保護センター2001『佐口遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第69集）
- 財団法人岐阜県文化財保護センター2001『針田遺跡・東坪之内遺跡・田中浦遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第70集）
- 岐阜県文化財保護センター2010『広畑野口遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第113集）
- 岐阜県文化財保護センター2017『六里遺跡・稻荷遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第139集）
- 岐阜県文化財保護センター2019『六里遺跡Ⅱ』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第145集）
- 岐阜県文化財保護センター2020『御望A遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第144集）
- 岐阜県文化財保護センター2020『堅田遺跡・美濃国分尼寺東遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第146集）
- 岐阜県文化財保護センター2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書（第2分冊）』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第162集）
- 岐阜県文化財保護センター2023『六里遺跡Ⅲ』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第158集）

- 岐阜市遺跡調査会1996『堀田・城之内一岐阜市堀田土地地区画整理事業に伴う発掘調査』（岐阜市遺跡調査会報告書第3集）
- 岐阜市教育委員会1981『老洞古窯跡群発掘調査報告書』
- 岐阜市教育委員会1982『長山遺跡発掘調査報告書』
- 岐阜市教育委員会1995『御望遺跡－市道西郷1号線建設に係る緊急発掘調査の記録－』
- 岐阜市教育委員会1999『城之内遺跡－長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査－』
- 財団法人岐阜市教育文化振興事業団2007『鷺山蟬・鷺山仙道遺跡－岐阜市鷺山第二土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査－』（財団法人岐阜市教育文化振興事業団報告書第15集）
- 財団法人岐阜市教育文化振興事業団2008『鷺山市場遺跡－岐阜市都市計画事業鷺山・下土居土地区画整理事業における都市計画道路鷺山下土居線建設に伴う緊急発掘調査－』（財団法人岐阜市教育文化振興事業団報告書第17集）
- 財団法人岐阜市教育文化振興事業団2011『鷺山遺跡群 第2分冊 正明寺城之前遺跡－岐阜市都市計画事業鷺山・下土居土地区画整理事業における区画道路建設に伴う緊急発掘調査－』（財団法人岐阜市教育文化振興事業団報告書第19集）
- 公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所2012『鷺山遺跡群 第3分冊 鷺山仙道遺跡－岐阜市都市計画事業鷺山・下土居土地区画整理事業における区画道路建設に伴う緊急発掘調査－』（公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団報告書第19集）
- 公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所2012『鷺山遺跡群 第4分冊 鷺山市場遺跡－岐阜市都市計画事業鷺山・下土居土地区画整理事業における区画道路建設に伴う緊急発掘調査－』（公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団報告書第19集）
- 小林信一2006『III 下総地域の官衙関連遺物について』『研究紀要』25、財団法人千葉県教育振興財團
- 斎宮歴史博物館2001『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区的調査 本文編』
- 斎藤孝正1995「I 東海西部」『須恵器集成図録』第3巻東日本編I、雄山閣出版株式会社
- 城ヶ谷和広1993「尾張における7世紀から9世紀半ばの須恵器～猿投窓とその周辺～」『古代の土器研究会第2回シンポジウム 古代の土器研究－律令的土器様式の西・東2 須恵器－』古代の土器研究会
- 城ヶ谷和広1996「総論 東海地方の古代煮炊具の様相と諸問題」『鍋と甕そのデザイン』第4回考古学フォーラム実行委員会
- 城ヶ谷和広2015「第4章特論 第5節編年論 須恵器」『愛知県史 別編 窯業1 古代猿投系』愛知県
- 閔市教育委員会1981『重竹遺跡』（閔市文化財調査報告7号）
- 閔市教育委員会1984『重竹遺跡』（閔市文化財調査報告第8号）
- 閔市教育委員会2015『国指定史跡弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺東遺跡III－第1部 館・厨区域ほか／第2部 池尻大塚古墳－』（閔市文化財調査報告第34号）
- 垂井町教育委員会・三重大学考古学研究室1999『美濃國府跡発掘調査報告II』
- 垂井町教育委員会2005『美濃國府跡発掘調査報告III』

- 財団法人千葉県文化財センター1985『主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅宅地関連事業）地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 帝京大学山梨文化財研究所2000『住まいと住まい方—遺跡・遺物から何を読みとるか』（帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集3）
- 富加町教育委員会1978『東山浦遺跡』（富加町文化財調査報告書第2号）
- 富加町教育委員会1989『半布里遺跡発掘調査報告書』（富加町文化財調査報告書第4号）
- 豊田市郷土資料館2009『豊田市郷土資料館特別展 塩の歴史と民俗—三河の塩生産と交易—』
- 永井宏幸1996『尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷』『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 名古屋市教育委員会1993『NN288号窯・NN289号窯』
- 南山大学人類学博物館1982『正家庵寺発掘調査報告書』（人類学博物館紀要第4号）
- 日進町教育委員会1984『愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 林部均1986「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内產土師器」『考古学雑誌』第72巻第1号、日本考古學會
- 平野修2017「内陸地域における古代の堅塙生産と流通—山梨県南アルプス市鉄物師屋遺跡群出土資料を中心とした考古学検討からー」『帝京大学文化財研究所研究報告』第16集、帝京大学文化財研究所
- 藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」三重県埋蔵文化財センター編『研究紀要』第3号
- 美濃加茂市教育委員会1979『今遺跡—県道可児金山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』
- 美濃加茂市教育委員会2002『尾崎遺跡発掘調査報告書』
- 森泰通2007「古代美濃における塩の生産と流通」『木曾川学研究』第4号、木曾川学研究協議会
- 養老町1978『養老町史 通史編』上巻
- 養老町教育委員会2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』（養老町埋蔵文化財調査報告書第4集）
- 養老町教育委員会2007『養老町遺跡地図』（養老町埋蔵文化財調査報告書第5集）
- 養老町教育委員会2020『千人塚1号古墳範囲確認調査現地説明会資料』
- 横幕大祐「美濃・飛騨の畿内產土師器」『美濃の考古学』第4号、美濃の考古学刊行会
- 渡辺博人1993「美濃須衛窯跡群の須恵器」『古代の土器研究会第2回シンポジウム 古代の土器研究—律令の土器様式の西・東2 須恵器—』古代の土器研究会
- 渡辺博人1997「美濃各務原地域における古代の集落遺跡について」『岐阜史学』第92号、岐阜史学会
- 渡辺博人2008「美濃須衛窯について」『日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集』日本考古學協会2008年度愛知大会実行委員会

図版 1 発掘区遠景・近景



発掘区遠景（南から）



発掘区近景（西から）

図版2 発掘区近景・SI01（1）

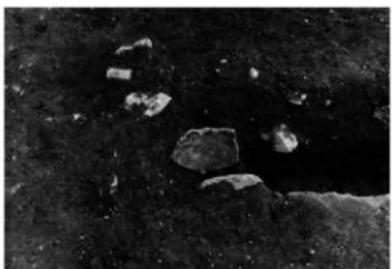


発掘区近景（上が北）

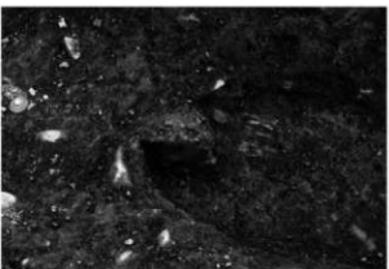


SI01（西から）

図版3 SI01(2)・SI02



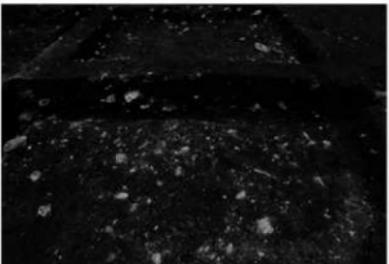
SI01 壁際溝内土器出土状況（東から）



SI01 壁際溝内粘土塊出土状況（東から）



SI01 土層断面（南西から）



SI02 土層断面（東から）



SI02（西から）

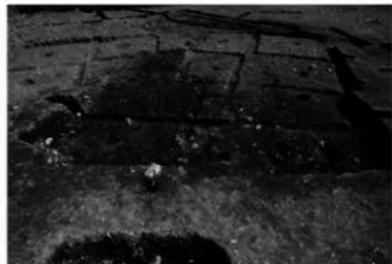
図版4 SI03～SI06・溝状遺構・土坑



SI03 (北から)



SI04 (東から)



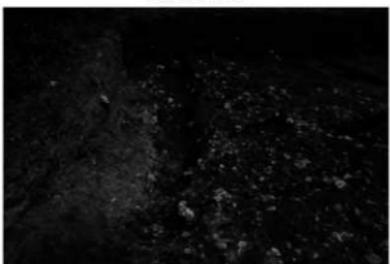
SI05 (南から)



SI06 (北から)



豊穴建物重複状況 (北から)



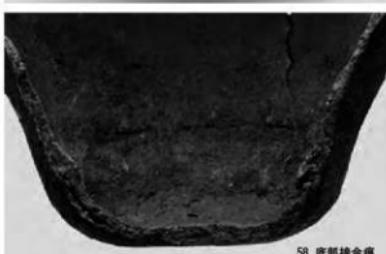
SD01 (南から)



SK07 (南から)



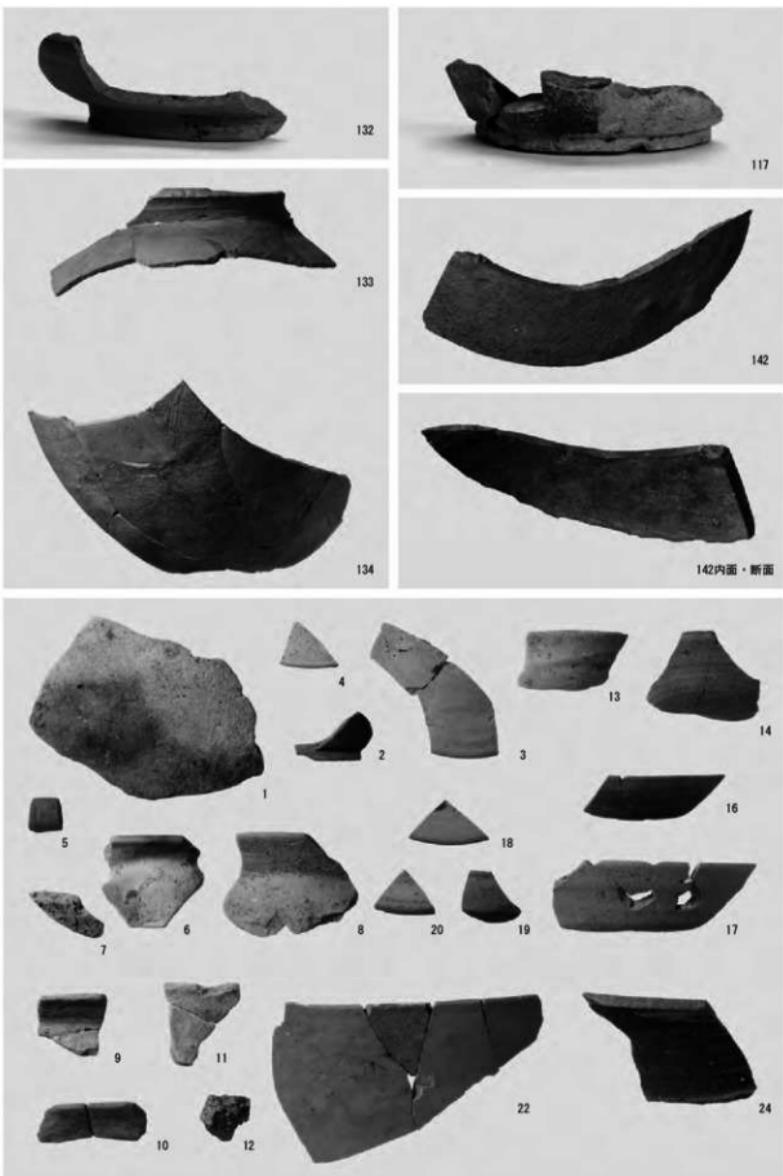
SK11 (南から)



图版6 出土遗物（2）



圖版 7 出土遺物 (3)



图版8 出土遗物 (4)



## 報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第167集

## 白石道遺跡

2024年3月8日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社もとすいんさつ



